

# 新たな人生はポケモンの世界

バロン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

冒険の舞台となるのは、温暖な島々からなるアローラ地方！

アローラ地方は、自然豊かな4つの島と1つの人工島を中心とした地域。

主人公の高校生が事故がきっかけでポケモンの世界へと転生した話。

# 目次

## メレメレ島編

転生者	1
最初のポケモン!	6
島巡り開始!	11
新しい仲間	16
vsイリマ!	22
素早さの特訓	29
リーリエ登場	34
倒したポケモンが・・・	41
島キング・ハラの大試練	45
カーラエ湾で	52
初Z技!	58

## 看病

## リオルの回想その1

62

## アーカラ島編

イーブイGETのために	73
グラジオ登場	81
スイレン登場	86
水の試練!	91
バトルロワイヤル	100
火の試練	108
ライチ登場	118
島クイーン・ライチの大試練	124
リオルの回想その2	130
ウラウラ島編	



	波導の極	284
	潜在能力開花!	292
	リヨウタvsハプウ	298
	初代チャンピオン誕生!	305
314	チャンピオン後の生活(完結)	



# メレメレ島編

## 転生者

### 1話

俺の名前はリョウタ。

目を開けると俺は森の中にいた。

それは別にいい。

だが！何故、目の前にモンスター共がいる！

モンスターと言ってもポケットモンスター。縮めてポケモンと言う。

そいつらの目の前にいるのだ。

何故こうなったかと言うと・・・

俺は一度・・・死んでいるからだ。

生前の俺は高校3年生。

成績一般。

運動神経一般。

コミユカ一般。

だがしかし！俺にも唯一自慢出来る事がある！

そ・れ・は！

小学生時代からずくとやり続けていたゲーム。

ポケットモンスターと言う主人公がポケモンと一緒に旅をして行き、最後にポケモンリーグに挑み制覇する物語なのだ。

凄くザツと説明したが、その道中は色々あるから省く。

俺はそのゲームの最新作、ポケットモンスターサン&ムーンをやっていた。

今まではジムなどあったのだが、今作は島巡りをするらしい。

島はマップにある4つの島と人工島。

人工島以外の島のトップである島キング島クイーンを倒すらしい。

この『らしい』の表現は、俺が途中で死んでしまったからゲームの続きが出来なくなつたから分からないのだ。

何故死んだかって？

ハハハ・・・ゲームに夢中になりすぎて、歩きスマホならぬ歩きゲームをしていたんだ。



俺は横断歩道が赤になっていている事に気付かずにそのまま渡ってしまい、トラックに跳ねられ死んでしまったのだ。

・・・自業自得だね。うん・・・

トラックの運転手さん、ごめんなさい。

俺の意識が薄れていく時、持っていたゲームが光り出し今に至る。

俺は・・・

ポケモンの世界に転生したのだ！

多分・・・

俺は目の前にいるポケモン、ヤングースの群れと向き合いながら腰にあるであろうモンスターボールに手を伸ばそうとしたが・・・無い。

説明しよう！（天の声）

モンスターボールとは、ポケモンをGETするために必要なボールなのだ。

だが、初期に手に入るモンスターボール。ポケモンのGETも容易でない！

その上にあるスーパーボール、ハイパーボールなど更にGETし易くなるボールも存在するのだ！

モンスターボールが無いだと・・・？

俺が動けばヤングース共も襲ってくるハズ！

うん！何も出来ないや・・・

リヨウタが諦めかけたその時、後ろから足音が聞こえた。

「ヤングース、人を襲おうとするのは良くない事だよ」

「え？イリマ？」

ザツと説明しよう！（天の声）

イリマとはメレメレ島のキャプテンである！

ノーマルタイプの使用手として有名だ。

「僕の事を知っているのかい？」

「キャプテンだろ？」

「そうだよ。ところで、君はポケモンを出さないのかい？」

「ポケモンを持ってないんだ」

「そうだったのか」

イリマはヤングース達の前にしゃがみ込むと話しかけた。

「ヤングース。この人はポケモンを持っていない。だから、襲わないで帰ってくれないかな？」

ヤングース達はイリマに一鳴きすると森の奥へと行ってしまった。

「あんだ、スゲーな」

「戦う事が全てじゃないからね。さて、君も一緒に森を抜けようか」

「ありがとう。助かるよ」

イリマはリョウタと共に森を抜け、ハウオリシティへと向かった。

その道中、リョウタとイリマは簡単な自己紹介をした。

「リョウタ。君の歳だとポケモンを持つ事を許されるんだ。島キングのハラさんの所に行き、ポケモンを貰うのはどうだろうか？」

「ポケモンが居ないと危険って分かったしな。直ぐにリリイタウンに行くことにするよ」

「うん。マップをあげるから見ながら行くといいよ」

「ありがとう」

イリマと話しながら歩いているとハウオリシティに着いたのでイリマと別れ、リョウタはリリイタウンを目指し歩いて行った。

# 最初のポケモン!

## 2話

リョウタがリリイタウンに向かっている最中、ポケモンセンターの前でスカル団が屯っていた。

説明しよう! (天の声)

スカル団とは悪さをする連中の事である。

まだポケモン手に入れてないしなあ・・・

見なかつた事にしとこ。

リョウタは足早にポケモンセンターの前を通り過ぎようとした時、屯っていたスカル団が近づいて来た。

「おうおう! 俺様達を見て素通りか?」

面倒くさい連中だな・・・

「用事ないから通るだけ」

「アタイ等は君に興味を持ってねえ? ちょっと付き合ってくんない?」

うわゝ本当、面倒くさい・・・

「行く所があるので、お断りさせて頂きます」

「大丈夫、大丈夫。行きたい所あるなら俺のバイクに乗せてってやるよ!」

スカル団がリヨウタを取り囲み、一番最初に話しかけてきた奴がリヨウタに手を伸ばそうとしたその時!

「マクノシタ、つつぱりじゃ!」

野太い声をしたと思ったらマクノシタがスカル団をつつぱりで弾き飛ばした!

「大丈夫かな、少年?」

「島キング!」

リヨウタを助けたのはメレメレ島の島キング、ハラだった!

「ちよつと!島キングが出て来たんですけど!」

「や、やるしかねえだろ!」

「そ、そうね!」

「おとなしく、退いた方がいい気がする・・・」

「黙れ!」

「はい・・・」

スカル団の連中は直ぐにポケモン達を出した。

ズバット、ヤトウモリ、ヤブクロンだ。

「行くぞー!どくばり!」

「ひのこー!」

「スモッグ!」

「マクノシタ、避けるのじゃ!」

ズバットのどくばりを体を捻って避け、ひのこの火を横に移動し更に避け、最後のスモッグはバックステップで距離を取り攻撃範囲から逃れた。

「では、ワシの番じゃな。マクノシタ!全力無双激烈拳!」

ハラが専用のZ技ポーズを取り、マクノシタにZ技のエネルギーが譲渡された後、マクノシタが拳のオーラの連撃を繰り出す!

スカル団のポケモン達は次々繰り出される拳のオーラの連撃により吹き飛び、スカル団の直ぐ側に落ちた。更に、マクノシタがフィニッシュの拳をのオーラを放ちポケモン達とスカル団を近くの森の方に吹き飛ばした。

「すげえ・・・」

「無事でなにより」

ハラはニカツと笑いリョウタに近づいた。

「改めて、ワシは島キングのハラじゃ」

「俺はリョウタ。まだポケモンを持っていないから、イリマさんからハラさんの所に

行つてポケモンを貰えつて」

「そうだったか」

ハラはそう言うのと腕を組んで少し困つた顔をした。

「先ほどな・・・御三家のポケモンである、アシマリ、モクロー、ニャビーを今日から新人トレーナーに渡したばかりなのじゃ」

「え・・・」

「すまないのお・・・」

「御三家じゃなくても良いから、ポケモンを俺にくださいー！」

「ふむ・・・ならば」

ハラはポケットからモンスターボールを取り出すと、ポケモンを出した。

「この子の名前は」

「リオル!?」

「なんじゃ、知っていたのか・・・」

「もちろん!てか、この地方じゃ凄く珍しいポケモンじゃないですか!」

「まだタマゴから孵つて間もない子だな。このリオルを君の最初のパートナーにしてみないか?」

「ぜひ!」

「では、このボールがリオルのじや。後、空のモンスターボールを5個あげよう」  
「ありがとう！よろしくリオル」

リオルは笑顔で頷いた。

リヨウタの最初のポケモンはリオル。

レベルは1

特性は不屈の心

覚えている技は見破る、電光石火、堪える



# 島巡り開始！

## 3話

リヨウタはリオルを育てる為ハラと別れた。

さてと、まだレベル1だし・・・

適当に狩りますか！

リヨウタは1時間ほど1番道路でリオルを育てるとレベル7にまで上がった。

レベル6の時にカウンターも覚えたので、敵の攻撃を避けて一気にカウンターで決める戦法がとにかく強い！

まだまだレベル上げしたいけど、今作のサン・ムーンは島巡りするのが目的・・・

どうやって島巡りの証を手に入れるか考えなくては・・・

リヨウタが悩みながらリリイタウンに向かっていると、ハウがニャビーを連れてこつち向かって来ていた。

「ねえねえ！僕とポケモンバトルしよー！」

「・・・俺とか？」

「君以外ないよお」

「それもそつか。いいぜ、相手してやる！」

「やったあ！ニャビーよろしくね！」

「リオル、頼むぞ」

リヨウタvsハウ

「先手は俺が貰う！リオル、電光石火！」

「ニャビー、引つ掻く！」

リオルはニャビーの爪に当たらないように電光石火を決めると直ぐに後退した。ニャビーは威嚇しながらリオルを睨み付ける。

「君のリオル、速すぎるよ！」

「育成の仕方だろ・・・リオル、トドメの電光石火！」

「ニャビー！火の粉！」

ニャビーが火の粉を吐くよりも早く、リオルの電光石火でニャビーを攻撃して戦闘不能にさせた。

「負けたあ」

「良くやったなあリオル！」

「あ、僕の名前はハウ。君は？」

「俺はリョウタ。よろしくな」

「うん！よろしくね」

初バトル勝てたあ!!

リオルは攻撃と素早さが高いポケモンだから、ツツケラ狩りをして正解だった。

説明しよう！（天の声）

リョウタが1番道路でひたすら狩りまくっていた相手はツツケラだったのだ！

このポケモンを倒す事により、通常よりも素早さが高く育ち先手必勝が狙いやすくなるのだ！

「そうだ、ハウ。俺さ島巡りしたいんだけど、その証どうやって手に入れたらいいんだ？」

「ん？これ？ハラさんから貰ったよ？」

「そうか！ありがとう！」

思い出した！ゲームの最初の時、ハラから貰ったじゃないか！

あゝ！あの時に貰っとけば良かった！！

リョウタは速攻でリリイタウンに続く上り坂を走っていった。

「ハラさん！俺、島巡りしたい！」

「唐突じゃな・・・」

島巡りする事ぐらいしかやることないし・・・

何よりも、ゲームでやった今しか知らないから、渡せないなんて言われたら何をしていいかわからん!!

「まあそう言うと思うてなあ。ホレ、これが島巡りするための証じゃ」

ハラはポケットから島巡りの証を取り出しリョウタに手渡した。

「ありがとう!」

「これで島巡り出来る!

「まずはイリマの試練を受けてみたらどうじゃ?」

「そうする!」

ゲーム的にもイリマを倒す事になってたし、その次はアンタだ!

あく!早くハラと戦いてえ!

「じゃー!」

俺はそれだけ言うのと下り坂を一気に駆け抜けた。

再び1番道路へと戻って来て最初にしたこととは1時間のツツケラ狩りだ。

・・・待てよ?

ツツケラじゃなくて、オニスズメとコラツタじゃ?

はあ・・・やらかしたあ!!

ツツケラは攻撃力が上がる方じゃないか!!

結局、俺が気付いた時にはしっかりと1時間みっちりツツケラ狩りをし終えてから  
だった・・・

リオル

レベル11

特性不屈の心

技電光石火、堪える、カウンター、発勁（はつけい）

## 新しい仲間

### 4話

そろそろ新しい仲間を捕まえた方がよさそうだな・・・

ゲームの時はツツケラもGETしてたし、ハウオリシティではコイルが出るまでひたすら草むら周回してたし・・・

うん、コイルをGETしよう!!

特性は重力か頑丈・・・だったら頑丈だな!

先にポケモンセンターでリオルを全回復させた後、ハウオリシティでコイル探しをしたが全く見つからない!!

わかっていたさ!ゲームと違って現実で草むら彷徨っててもポケモンなんて出てこないし!ツツケラの時だって、草むら探しても出てこなかったから木の方を探したりしていたし!

けどさ・・・町中で野生のコイルなんて、どこを探せばいるんだよ!

・・・町の人に聞けばいいか。

ちようど、うつつくしく!女性が町を歩いているし。

「すみませ〜ん。俺、コイルを探しているんですけど、どこにいるか分かりますか？」

「え？コイル？う〜んとね・・・南側の工場付近に良く出て来るわよ」

「ありがとう！」

その工場に行けば居るわ居るわコイルの群れ！群れ！群れ！

いや〜居すぎてなんか近づきたくないわw

・・・ん？この大群の中に1匹だけ色違い居るじゃん！ラッキー!!!

ちなみに、通常のコイルは灰色だでしょう。色違いは白色なのだ！あ、ま、り！かわ

らん！

ゲームでコイルの色違いを見ても、ん？ってなったし!!

最初の時、間違つて倒して悔しかった思い出しかないし!!

「行くぞリオル！」

リオルは力強く頷いてくれてるし、うん！色違いコイルGETするぞ！

俺とリオルはコイルの大群の中に突っ込んでいき、電気ショックを受けて危うく死ぬところだった・・・

俺は逆ギレしてリオルと一緒に殴るわ蹴るわしてコイルの大群と戦い、最後に残っていた色違いのコイルにリオルの発勁喰らわして麻痺発生させ、モンスターボールを掴み勢いよく投げるのでは無く、殴りつけてやった！

結果は・・・色違いのコイルGET！

ふく終わってたぜ！

辺り一面コイルが目回して戦闘不能アピールしているが気にしない！

・・・リオルの大量経験値を貰えたお礼しなきゃいけないかな。

結局俺はコイルをリアカー2台分乗せて、リオルと1台ずつ押してポケモンセンターに行った。

コイル達の回復を待っていると、コイルの大群がいた工場の社長が来てお礼を言われた。

コイルの大量発生のおかげで電気食われるわ、扉は開かないわで大変だったらしい・・・  
丁度その時に俺がコイル共と戦っており、社長が助けに来てくれたと勘違いしたらしい。しかも、負かした大量のコイルをポケモンセンターに連れて行き回復までさせた事に感激したらしい。

勿論、俺はそんな事知らないし、コイルとの戦闘はただ、コイルが欲しかっただけと言ったら「なんて素直な子だ！」と更に感激され、終いにはお礼を受け取る形となった。

お礼何と10万円！

更にモンスターボールを超えるスーパーボールを10個貰った。

更に！磁石を貰った・・・



ちなみに、この磁石・・・電気タイプ技の威力を1.5倍上げる代物だ。

この時の俺はなぜ磁石?となっていたが・・・

更に俺の新しいポケモンであるコイル。

こいつも回復させる為に女医さんに渡したら発狂された!

何故かって?女医さん、色違いのポケモンを見るの初めてだそうな。

いつものお淑やかなイメージが崩れた瞬間だった。

その後、何故か女医さんからお礼を貰う事になり、幸せタマゴを貰った。

これには俺も驚いたさ!

だって、幸せタマゴって経験値が1.5倍増して貰えるんだぞ。

ちなみに、助けた工場。モンスターボールを作る工場だったらしく、俺がコイルを育てようとポケモンセンターを出るとき社長から、新しいボールが出来たら一番最初に君にやろう!と言ってくれた。

ちなみに、ハイパーボールは既に売られているので、違うボールだろう・・・

俺は連絡手段が無いので困った顔を見ると、連絡出来る端末を貰った。

コレの方が嬉しかったりする。

直ぐに社長とアドレスを交換した後、名前を確認した。

オーキド?

は？

オーキドって博士ちゃうん？

この疑問は直ぐに解消された。

この社長。ジョート地方のオーキド博士の孫だったのだ！

勿論、シゲルではない。

オーキド・ゲンと言うらしい。

オーキド社長とアドレスの交換を終えた後、何故か女医さんからもアドレス交換を求められたので交換した。

地味に嬉しかったりする。

更に嬉しかった事は、コイルを倒すと特攻が上がるので、リオルの育成に素晴らしく貢献した事だ。

これで波導弾覚えれば言う事無し！

リオル・レベル15

特性不屈の心

技電光石火、カウンター、フェイント、発勁

コイル・レベル11

特性頑丈

技電気ショック、マグネットボム、電磁波、超音波

## V S イリマ！

## 5話

早速新たに加わった色違いコイル（面倒くさいからコイル）の強化から始める事にした。

コイルは攻撃よりのポケモンなので、ヤングース狩りをするため1番道路に戻りヤングースを片っ端から倒すこと2時間。

流石に2時間もヤングースを狩り続けると、ヤングースが俺達から逃げるようになってしまった。

・・・やり過ぎた。

そのおかげでコイルはレベル13になり光の壁を覚えた。

結局ヤングースの逃げ足が速すぎるため1番道路でのヤングース狩りを断念することにした。

時刻はまだ正午になったばかり。

コイルの食事って何だ？何を食うんだ？電気？・・・分からん！

リオルは普通にポケモンフーズで大丈夫だろう。

そんな事を考えながらポケモンセンターに戻るとイリマが怒った顔で待っていた。あ、これアカンやつや・・・

イリマはノーマルタイプを好んでいる。そのノーマルタイプのヤングース狩りを2時間も繰り返していたのがバレたみたいだ。

だがしかし！俺にも言い分はあるぞ！

まず、育て方が違う！うん！これで行こう！！

「リヨウタ君。ヤングースを痛めつけてたつて本当？」

「・・・はい？」

あくなるほどね・・・尾ひれはヒレ着いたみたいだな。

「痛めつけてはいない。俺は能力値を高めるために片っ端からヤングースを倒しまくっていただけだ」

「・・・片っ端ね」

イリマは怒った顔から呆れた顔になった。表情変えるの上手いな！

「うん！ごめん。僕の怒りが収まらないからバトルしてほしいな？」

あくやつはお怒りですよね！しかも笑顔で・・・

「勿論バトルさせて頂きますよ。あ、俺が勝ったらイリマさんの試練合格にしてください」

「ん」

「良いでしょう。僕も本気でいきますよ!」

「はい」

俺のポケモンを回復させた後、バトルフィールドに移動してイリマと戦う事になった。

しかも、イリマがずっとポケモンセンターで俺を待っていたせいで、女性陣の集まり具合が酷い!

しかもずっと俺をバッシングしてくるし・・・

俺のリオルとコイルはその事で怒ってくれてる。なんて俺想いの良い子達だ! 一生可愛がってあげる!

ちなみに、男性陣は俺を応援してくれてる。まあ全体の2割しかないが・・・

リョウタ vs イリマ

「僕の最初のポケモンは、ヤングースです!」

「なら、行くぞリオル!」

「定番の格闘タイプ。しかもリオルですか。ヤングース、穴を掘る!」

「リオル。目を閉じて感じ取るんだ」

ヤングースは直ぐに穴を掘りリオルに迫って行く。

ちなみに、俺が目を閉じて感じろと言った理由。それは、リオルはルカリオの進化系前。言わば波導ポケモンの子供なのだ。

まだ感じ取るのは苦手かも知れないが、何回も気配を感じ取り波導を極めればリオルは更に強くなる。

「今です！」

「リオル！カウンターだ！」

ヤングースがりオルの真後ろから穴を掘って出て来た瞬間一気にリオルに迫る！

リオルは目を閉じたまま回し蹴りをしてヤングースの横腹を勢いよく蹴り吹き飛ばした！

「トドメ行くぞ！発勁」

「ヤングース！砂かけです！」

ヤングースが目の中の砂を巻き上げるよりも早く、リオルはヤングースに発勁を喰らわせ戦闘不能にさせた。

「リョウタ君のリオル、思っていたよりも素早さが高いね」

イリマはヤングースをボールに戻すと、もう一つのボールを掴んだ。

「僕のポケモンは2体しかないんだ。行くよ！ドープル!!」

「俺のポケモンも2体しかいないです。リオル、一度戻ってくれ。コイル、出番だ」

「ドーブル、火の粉!」

「やっぱりか!コイル、光の壁!」

やっぱりこのドーブル、ゲーム同様火の粉を覚えてやがった。もしかしたら水鉄砲と木の葉も覚えてるかもしれないな。・・・

ドーブルの放った火の粉は光の壁を使い威力を軽減しようと思ったらまさかの事が起こった!

光の壁が本当の壁の役割をして火の粉を封じたのだ!これには俺も驚いた!

イリマ自身も驚きを隠していないので、新たな発見か?

「いや、今の光の壁には驚いたよ。まさか本当に光の壁で技を防ぐとはね」

「俺も驚きましたよ。コイル、マグネットボムだ!」

「ドーブル、火の粉です!」

マグネットボムはゲームでは確実に相手に当たる技!俺の勝ちだな。

コイルのマグネットボムはドーブルが放った火の粉に当たり弾け飛んだ!

マングース狩りをして攻撃力が上がっていたので火の粉では相殺すら出来なかったのだ!

コイルの放ったマグネットボムはドーブルに吸い込まれるように当たっていき大爆



発して戦闘不能になった。

「僕の完敗です……」

「良くやったなコイル〜！リオルもありがとうな！」

コイルは嬉しそうに回り、リオルはボールから出て来てハイタッチを求めてきたので、勿論タッチした。

「リョウタ君、約束通り試練達成の証を授けるよ」

「ありがとう」

「まさかここまで強くなるとは思わなかったよ。まだ半日なのに……」

「友情の特訓をしましたからね」

「友情の特訓ね……あ、これもあげます」

イリマはノーマルZのクリスタルをリョウタにあげた。

……俺。Zリングね〜〜〜!!!

………とりあえず貰っておくか。

「ありがとう！大切にする！」

「うん」

その後はイリマは自分の家に帰り俺はポケモンセンターでリオルとコイルを回復させた後、2番道路に向かった。

Zリング。どうやって手に入れよ・・・

リオル・レベル15

特性不屈の心

技電光石火、カウンター、フェイント、発勁

コイル・レベル13

特性頑丈

技電気ショック、マグネットボム、光の壁、超音波

# 素早さの特訓

## 6話

2番道路のマップを見ながら茂みの洞窟を目指していると、あの時のスカル団の連中が道を通せんぼしていた。

「おうおう！今朝あったばかりの小僧じゃないか！」

「ここを通りたければ金を寄こしな！」

「あん時は島キングがいたけど、今回はお前だけだからな！」

「「負けないぜ！」」

あゝやっぱ面倒くさい・・・

「俺もポケモン持つてるから相手してやるよ。かかってきな！」

「生意気な小僧だぜ！行け！ズバット！」

「ヤトウモリ、出番だよ！」

「ヤブクロン、行くんだ！」

うん。此奴等いいポケモンを出してくれるから助かるわ

この3体共、素早さの能力値上がりやすいからな！

「んじゃ、コイル行ってこい！リオル、お前もだ！」

「2体出すなんて卑怯だぞ！」

「何を言ってる？お前達は3体だぞ？」

「ぐぬぬぬ・・・」

### リヨウタvsスカル団

「リオル、ヤトウモリに発勁！コイルはズバットに電気ショック！」

「ヤブクロン、スモッグ！」

「ヤトウモリは火の粉！」

「ズバットは毒針！」

リオルはヤブクロンが吐いた毒霧の範囲外に素早く避難し、ヤトウモリの火の粉を紙一重で躲した後発勁をヤトウモリの背中に当て麻痺らした！

コイルには毒タイプの攻撃は無効化出来るので、ズバットの毒針を受け止めそのまま電気ショックを浴びせた。ズバットはこの一撃で戦闘不能になった。

「ヤトウモリ！もう一度火の粉！」

「ヤブクロンもスモッグ！」

「コイル、光の壁で攻撃をガード！リオルは回り込んでヤトウモリに発勁！トドメをさせ！」

ヤトウモリとヤブクロンの同時攻撃はコイルが前に出て光の壁を発勁し、攻撃を全て防いだ！リオルは直ぐに回り込みヤトウモリの横腹に発勁を喰らわせ戦闘不能にさせた。

「リオル、そのまま電光石火でヤブクロンを攻撃！コイルはマグネットボムでトドメをさせ！」

「ヤブクロン！躲してくれ！」

ヤブクロンの遅い動きなんて俺のリオルには止まって見えるわ！

リオルは直ぐに電光石火でヤブクロンを攻撃し軽く吹き飛ばした後、コイルのマグネットボムがヤブクロンに当たり大爆発！そのまま戦闘不能になった。

「「覚えてろお〜！」」

スカル団共はポケモンを素早くボールに戻して逃げて行った。

・・・雑魚だな。

さ〜とと・・・このまま茂みの洞窟に向かうか。そこにデイグダがいるはずだし。

アローラ地方のデイグダは鋼タイプ付くから格闘技を覚えるリオルを育てやすいし・・・

コイルはもう少し先に進んだ所に鳥ポケモンの巣があるはずだから、そこで育てよう。

その後リョウタは2番道路の坂を登った所にあるポケモンセンターでポケモンを回復させた後、茂みの洞窟に3時間ほど籠もりデイグダ狩りをした。その際、ズバットが大量に襲って来たので、コイルを出しズバットを全滅させた。

デイグダもズバットも、倒せば素早さの努力値が貰えるので凄く美味しかった。

お礼に再びリアカーをここに来る途中にあった畑のを借りてデイグダとズバットを乗せまくった。今回はコイルもいるので3台に別けて乗せポケモンセンターに持っていったのだ。

洞窟から出ると綺麗な夕日が見れたので、リオルとコイル、俺も癒やされた。

そのままポケモンセンターで俺のポケモンも回復してもらっていると、女医さんから俺のポケモンにポケルスと言うウイルスに掛かっていると言われた。

説明しよう！（天の声）

ポケルスとは通常よりもポケモンが育てやすくなる優れたウイルスなのだ！

命に別状は無い！・・・ハズだ！

（しっかり説明しろよ天の声！）byリョウタ

女医さんからの報告を聞いている最中、ポケルスに掛かった方が嬉しかった俺は女医

さんの話なんて全く聞いておらず適当に返事していた。

リオル・レベル20

特性不屈の心

技電光石火、カウンター、まねっこ、発勁

コイル・レベル17

特性頑丈

技電気ショック、マグネットボム、光の壁、ソニックブーム

## リーリエ登場

## 7話

ポケモンを回復してもらった後、早速3番道路に行き当初の予定であったオニスズメ狩りをすることにした。

コイルの素早さは元々低いので底上げして損はない。

……って事で3番道路でオニスズメ狩りをして早2時間。

この時に少し大変な事になってしまった。

オニスズメを狩りすぎて、その進化系であるオニドリルが大群を成して俺に襲い掛かって来やがった！ 勿論オニスズメも一丸となって襲ってくるのでコイルだけでは無理と判断しリアルも出して必死に戦う事更に2時間。

結構ギリギリだった俺達は勝利を収めた。

その後、いつもより倒した数が多くなってしまったので大型リアカーを作る事にした。

いや〜この時ほどバイト経験が役に立つとは思わなかったぜ！

バイト先の農園でリアカーを1から手作りした経験が活かされた！



張り切りすぎて大型リアカー（木製だけど結構丈夫）を2個も作り上げてしまったぜ・・・

その後はいつも通り倒したポケモン達をリアカーに乗せて再びポケモンセンターに連れて行った。

女医さんは茂みの洞窟と3番道路のポケモン達を回復させる為三日三晩治療し続けた・・・

そしてもう2度と来ないで欲しいと絶える気持ちで思い続けた。

俺は再び3番道路に戻ってきた後、見晴らしが良い場所にテントを張り焚き火を用意した。

このテント、実はオーキド社長に貰っていたりする。焚き火セット含めて・・・

その日の夜、綺麗な女の子がテントを横切るのを見たので興味本位で覗いてみた。

女の子は小さなポケモンを追って3番道路の先に消えていった。

・・・リーリエ来た〜!!!

このゲーム始めた時、リーリエ可愛いなあ！って思ってたんよ！

実際に会ってもこんだけ可愛いとか反則！いあ、違うな・・・

可愛いは正義!!

って事で、あのポケモンはほしぐもとリーリエが呼んでいるポケモンだな。

正確にはコスモツグだが。

説明しよう！（天の声）

コスモツグとは、アローラ地方の伝説ポケモンソルガレオとルナアーラのどちらかに進化出来るポケモンである！

正確な詳細は誰も知らない・・・

（知らないのかよー） by リョウタ

綺麗な星空の元、俺はリーリエを追いかけてメレメレの花園に向かった。

そして・・・やはりと言うべきか、問題は起こっていた。

コスモツグは黄色い花が綺麗に咲いている花園の一番奥の方に行っており、その途中にはオドリドリ達が踊っていた。

リーリエはポケモン恐怖症だったはず。

花園の中に脚を踏み出せないでいるので間違いないみたいだ。

「君、あのポケモンの持ち主？」

「え？」

とりあえず初対面だし名前とかは言わない方がいいよな？

「俺はリョウタ。君の名前は？」

「わ、私はリーリエ。あの子はほしぐも」

とりあえず、これで名前を呼んでも大丈夫だな！

「リーリエ。ほしぐも大分奥の方の行っているけど、リーリエは奥には行かないの？」

我ながら酷え……

ポケモン恐怖症って知ってるのに！俺のバカ！バカ！

「ごめんなさい……私、ポケモンが怖くて」

ほら〜リーリエ泣きそうに……泣かないで？

「ご、ごめん！俺がほしぐも助けるから泣かないで！！お願い！」

「あ、すみません……」

もう！リーリエを泣かすなんて俺、悪者！嫌や〜！！

リヨウタは速攻花園の中に入っていきほしぐもの場所まで行った。

ほしぐもはキャツキヤはしやぎながら遊んでいるので捕まえるのは簡単だ。

後は戻るだけだけど……ここまで来る途中にこいつらが襲って来なかつたって事は、

帰りに問題が発生する？……いや絶対するな、コレ……

彼奴等、俺をガン見してやがるし……しかも獰猛な笑み♪で！！

「あ〜面倒くせ〜コイル、ここは頼んだぞ」

俺はコイルをボールから出し警護に就かせながら花園を進もうとすると、オドリドリ

共が一斉に襲って来やがった！

「だよな・・・コイル、光の壁を斜めに展開しろ！」

コイルは命令通り斜めに壁を展開した事により、飛んでくるオドリドリ共を上方向に滑らせた！

「体制を崩している奴等にマグネットボム！決して電気は出さな！」

コイルはマグネットボムを発射しオドリドリを的確に打ち落としていく。俺はその間にリーリエの元に向かいほしぐもを手渡した。

「コイル！花に当てると確実に叱られるから、下方向に光の壁展開！」

コイルに花を守るだけの壁を用意させた後・・・

「フィニッシュを仕掛ける！マグネットボム最大数展開！」

コイルが今出せる最大数のマグネットボムを展開させる。

その数50発！あの丸い金属が空中を漂う様は凄い・・・

「放て〜!!!」

俺は右手を勢いよく振り下ろし発射の合図を送る。

一度やってみたかったんだよなあ。バリアントてえ〜！みたいなやつ・・・

コイルの放った無数のマグネットボムは的確にオドリドリに当たっていき戦闘不能にさせた。10体前後しか居なかったが、レベルアップは出来たしオドリドリを倒した事により特攻の努力値も稼いだ。あまり意味無いけど・・・

「凄いですわ！こんな戦法見たことありません！」

俺もねえよ！つてリリーエに言えないわ！

「俺も初めて試した事だからさ。成功して良かったよ」

「まあ！初めてなんですわ。あ、これ、傷薬です。コイルさんの体力回復にお使いください」

リリーエは鞆から傷薬と言つて取り出した物を俺にくれたけど・・・

傷薬の最上級の物。回復の薬じゃんコレ!?

「こ、これ、貰つていいの？」

「勿論です。ほしぐもを助けて頂いたお礼です」

「ありがとう。コイル、回復の薬だ」

コイルに回復の薬を使つてあげると凄く気持ちよさそうな目になり体力が全回復した。

「では、私は行く所がありますのでこれで」

「うん。気を付けてね」

「ありがとうございます」

リリーエはリリータウンの方へと向かつて行つた。

俺は勿論、まだ夜なのでテントへと帰つて行つた。

リオル・レベル20

特性不屈の心

技電光石火、カウンター、まねっこ、発勁

コイル・レベル19

特性頑丈

技スパーク、マグネットボム、光の壁、ソニックブーム

## 倒したポケモンが・・・

## 8話

翌朝、目が覚めると外が騒がしいのでテントから出てみると、昨日大量に狩りまくったオニスズメ、オニドリル、デイグダ、ズバットが整列していた・・・

どうなってるん？

「もう一度倒してほしいの？」

俺が適当にそう言うのと一斉に首を横に振られた。ヤバい、今の面白いわ。

「まあポケモンの声を聞けるわけじゃないから俺には何言ったってわかんないけど・・・何かあるなら聞くぞ？何となくなら理解出来るかも知れないし」

一応此奴等にはリオルとコイルの努力値稼ぎになってもらったしな。

その後、此奴等が一斉に鳴き出した（喋り出した）ので、代表者を選ばして1体ずつ喋るようにさせた。

結果・・・此奴等は俺に仕えたいと言う事らしい。

このらしいは先ほども言ったが、ポケモンの声を聞ける訳では無いので、色々な仕草や鳴き声を聞いて考えた結果だ。

ちなみに、この仕えたいは合っていたみたいだ。此奴等が全員頭を下に下げたから。「俺に仕えても何も出ないぞ?」

この事についても此奴等は色々考えていたらしく、俺から何かを貰うのでは無く、守られたらしい。

簡単に言くと、俺みたいな人から守れって事だ。

「だが、俺も旅人である以上、ここに留まる事は出来ないぞ?」

この事も此奴等は承知の上だった。

俺がこの島にいる間だけでも良いから守って欲しい。これだけみたいだ。

逆に此奴等からは木の実等を俺にくれるらしい。

別に俺はいらないので断ったが、そこは許してくれなかった。仕方無く貰う事にしたが・・・

その中で貴重な謎のみを渡してきた時は驚いた。

「これ貴重だぞ?貰っても大丈夫なのか?」

ポケモン達は一斉に頭を下げたので、俺はありがたく頂戴する事にした。

断っても無理そうだから:

それにしても、まさかこうなるとは・・・

まだ昨日の戦闘が癒やされていないのにここに来て、俺に願いを申し出る。



此奴等に愛着が沸くではないか……  
良い努力値稼ぎだったけど諦めよう。

この後、ポケモンセンターから女医さんが来てポケモン達を全員連れ戻した。  
俺はそのままテントを片付けて島キングに会いに行くことにした。

イリマを倒した後、この島ですることは島キングを倒す事だけだから。

その後はバトルを申し込んでくる雑魚トレーナーを片っ端から片付けながらリリイ  
タウンに行き、島キング・ハラに試練の申し入れをした。

まだ朝速かったが、ハラは快く試練の申し入れを受けてくれた。

「試練の前に腹ごしらえ！リョウタ君も是非、朝ご飯を食べようぞ」

「はー」

ハラと朝ご飯を食べ終わると、広場の中央にある木のステージに移動して、試練につ  
いて説明を聞かされた。

内容はゲームと一緒にハラを倒せば試練達成。

実にシンプルでいい！

さて……この島一番のトレーナーである島キングと対戦。緊張するぜ！

リオル・レベル22

特性不屈の心

技電光石火、カウンター、まねっこ、発勁

コイル・レベル20

特性頑丈

技スパーク、マグネットボム、光の壁、ソニックブーム

# 島キング・ハラの大試練

## 9話

遂に島キング・ハラの大試練！

…遂にって言ってもまだ2日目の朝なんだけどね。

さくて！ハラと格闘vs格闘で行くか！

「説明は以上じや。何か質問はあるかね？」

「いえ！全くもって大丈夫です！」

「うむ。それでは始めるとしようか！」

「はい！」

島キング・ハラvsリョウタ

「まずは、マンキー出番じゃ！」

「行くぞ、リオル！」

「ほう？リョウタ君の一番最初のポケモンか」

「はい！俺のリオルは強いですよ」

「うむ！楽しめそうじゃ」

楽しめそうか…

いつまで余裕でいられるかな！

「リオル！先手必勝電光石火！」

「マンキー、避けるのじゃ！」

マンキーがリオルの電光石火を避けようと構えるよりも早く、リオルはマンキーの腹に攻撃を入れた！

マンキーはリオルのスピードに追いつけなかったのだ！

「むっ!?速いな…」

「リオル、今のうちにトドメだ！発勁！」

「マンキー！空手チョップ！」

マンキーが空中で体制を整え、リオルに向け手を上段から振り下ろそうとするが、リオルは素早くマンキーの背中に回り込み発勁を綺麗に決め地面に突き飛ばした！

マンキーは戦闘不能で地面に横たわった。

「良くやった！リオル！」

「…マンキー戻るのじゃ。素早いのお」

彼奴等を狩りまくったからな…努力値は並大抵じゃないぜ！

「うむ！マクノシタ、出番じゃ」

次はマクノシタか。攻撃力も高いが体力もそこそこ高い。

連撃で決める！

「リオル、電光石火！」

「マクノシタ、猫だまし！」

リオルがマクノシタに急接近した瞬間、マクノシタが猫だましをリオルの真正面ですて怯まされた！だが…

「っふ…これでリオルの素早さが更に上がりましたよ。知らなかった訳じゃないですよね、ハラさん？」

「うむむ…忘れておったわい！歳かのお…」

説明しよう！（天の声）

リオルの特性、不屈の心は相手によって怯まされた時、素早さが上がるのだ！

「まだ行けるな、リオル？」

リオルは力強く頷き構える。マクノシタもドンと構えている。

「リオル、発勁！」

「マクノシタ、突っ張りじゃ！」

！

マクノシタがオラオラオラオラ！を決めようと必死に拳の連打をするが、遅いな

今のリオルにその程度の速さなんて、止まっているようにしか見えないんだよ！

リオルはマクノシタの攻撃全てを最小限の動きで躲す度に発勁を手首に当て、確実に麻痺らせていく。最後の突っ張りの一発は、麻痺の影響で出だしが遅くなったその隙を逃さず、リオルが発勁をマクノシタの首下に決めた！

マクノシタは地面に横たわり戦闘不能になった。

「なんと…マクノシタ戻るのじゃ」

「2連勝！やったな、リオル！」

リオルはリヨウタの元に来て嬉しそうに微笑んだ。リヨウタはちゃんとリオルの頭を撫でてベタ褒めしちゃう。

ちなみに、リヨウタのリオルはメスである。

「リオルは強く育ったな。ワシの最後ポケモンじゃ。行くぞ、マケンカニ！」

「リオル、ラストも行ってくれるか？」

リオルは強く頷きフィールドに戻って構える。

リオルが最初のポケモンで良かった。

こんなに可愛くて頼もしいポケモン。他にいないんじゃないか？

うん！いない！後、可愛いは正義！

(うるせえぞー！) by天の声

「マケンカニ、この戦いあの技を出すぞ」

マケンカニも力強く頷き構える。

あの技つてZ技だろうな…

あの技隙だらけだし、発動する前に倒してやる！

「マケンカニ、グロウパンチ！」

「リオル、まねっこでグロウパンチをコピー！」

リオルはマケンカニが発動したグロウパンチを瞬時にコピーして我が物とする。

ちなみに、リオルだからこそその速さでのコピーである。

リオルはマケンカニの拳を上からグロウパンチで殴りつけ、更にマケンカニの顔に回し蹴りを決めた後、下からアツパーでグロウパンチを振りかざした！

マケンカニは盛大に吹き飛ばされた後、木のステージに落ちて戦闘不能になった。

Z技を出せる前に終わらせませ！

リオルが小走りで走ってくる〜！可愛いなあ！

俺は両手を広げてリオルを招き入れ抱きしめた。そのまま抱っこしてハラさんの所に行く。

「お見事じゃ！まさか、一方的にワシの相棒が倒されるとは思いもしなかったわ！」

「リオルの適切な判断のおかげです。さすが、俺の相棒」

俺は和やかにリオルの頭を撫でると可愛らしい鳴き声が返って来たので萌え死になりかけた。

俺とリオルが和んでいるとハラから格闘Zのクリスタルをいつ渡すか迷っていたので、先に貰う事にした。

「格闘Zクリスタル嬉しいんですけど俺、Zリング無いのでただの綺麗な石です」

「おおお！そうじゃった！忘れておったわい!!」

急にハラが大きな声を出したせいでリオルがビクツと震えた。てか！俺もびっくりしたわ！ビクツと震えたりオル可愛かった。

「お主にコレをやろうとしていたんじゃ！」

そう言うところから取り出した？かは知らんが、Zリングを俺にくれた。

「Zリング！」

「お主の物じゃ」

「ありがとう！」

リオルは邪魔にならないように肩車状態に移動して、俺は腕にZリングを装着した。

これがZリング：普通におもちやみたいだけど、本当にこれであんな強力な技が放て



るのか？

「試練を達成した者しか扱う事が出来ない代物じゃ。今お主が使えるのはノーマルと格闘だけじゃな」

「そうですね。まあ格闘乙あればリオルが更に頼もしくなりますけどね」  
「そうじゃな」

その後、ハラからケンタロスを貰った。

ケンタロスに硬い岩などを粉碎してもらうのだそうな。

ごめん。知ってた：

後、ケンタロスの背中に乗って移動も可能みたいだ。

ゲームで言うところのライドギアだな。

リオル・レベル23

特性不屈の心

技電光石火、カウンター、まねっこ、発勁

コイル・レベル20

特性頑丈

技スパーク、マグネットボム、光の壁、ソニックブーム

## カーラエ湾で

## 10話

俺はケンタロスに乗りカーラエ湾に向かった。

その際、ゲームではメレメレの花園の最奥にある小さな穴に入りそこから海繋ぎの洞穴を経由して行かなければならないが、俺は違う！

俺は身体作りの一環で地味にロツククライムをしており、色々な崖を上り下り出来る術を既に習得しているのだ！

なので！俺はいちいち花園になんて行かずに、カーラエ湾を見下ろせる場所まで行き、ロープを木に括り付けて飛び降りた。

カーラエ湾の並は穏やかで砂浜も人が殆ど来ないこともあり凄く綺麗だった。

そのカーラエ湾の海の方を見ると、デカイ影がこちらに迫って来ていた。

…ん？迫って来て…いる？

俺の思考がフリーズしているとギャラドスが海から出て来た瞬間、破壊光線を問答無用で放って来やがった！

コイルは自分でボールから出て来て光の壁を斜めに展開し破壊光線の軌道をずらし

て攻撃を反らした。

「ナイスだコイル！ソニックブーム発射！」

コイルは無数の真空波を発射するが、ギャラドスは一度海に潜り攻撃を避ける。

「なら、コイル！海に潜ってスパーク!!」

コイルは直ぐに海の中に入り思いっきり電気を放電した事により、辺り一面が黄色く光ギャラドスがプスプス音を立てながら浮かび上がってきた。

コイルは海から出て来てドヤ顔。

「さすがだなコイル」

俺はコイルをボールに戻した後、ずっと遠くからこつちを眺めてたタツベイの方を見る。

「タツベイ。俺はお前が欲しい。一緒に旅に行かないか？」

俺はその場でタツベイに話しかけるが全然答えてくれない。

あくやっぱバトルしなきゃダメだな。

「リオル、頼む」

俺がリオルを出すとタツベイは直ぐに戦闘態勢に入った。

…このタツベイ、プライドが高いのか。ただではGETさせてくれないって事だな。

面白い！思いっきりリオル無双してやるぜ！

「行くぞ、リオル！電光石火！」

リオルは一気にタツベイの距離を詰めて攻撃を当てようとしたその時、タツベイは頭をリオルに向け拳を受け止めた！

リオルは直ぐに距離を取り涙目で俺を見つめる。

「大丈夫かりオル!?!」

説明しよう！（天の声）

タツベイの頭は石頭でかなり硬いのだ！

俺は直ぐに掛けより傷薬を使って傷を治した。リオルは嬉しさのあまり俺に抱きついてくる。

なんて可愛いんだ!!あくもう、タツベイGETしなくてもいいかも…

俺はそのままリオルをなでなでしていると、タツベイが羨ましそうにこつちを見てきた。

「お前もして欲しいのか?」

タツベイはそっぽを向いて来ようとしませんが、目はしっかりとこつちを向いていた。

あくこいつ、プライドが高いんじゃないかと、ツンデレか!?

しやくないなあ…

俺はリオルを抱きかかえながら近寄ったが、タツベイは逃げようとしないのでそのまま

ま頭を撫でてあげた。

そしたらタツベイ：目を細めて気持ちよさそうに身を委ねるじゃないか！

リオルはタツベイに俺を取られたと勘違いして俺の手を引っ張るし！

なにこの子！可愛すぎて萌え死にしちゃう！

…ふと思つた事が1つ。

俺は最初、リオルを貰つた時強くなるためにリオルをルカリオに進化させようとずっと考えていた。けど…

俺、リオルのまま育てたい！リオル可愛すぎて進化させたくない！

「なありオル…俺、リオルが進化するの嫌だ。リオルは進化したいと思ってるのか？」

リオルは俺の顔を上目遣いで更に少しだけ涙目で見ながら首を横に振る。

その角度で上目遣いは反則！ほんつとう…可愛いんだから！

「良かった俺、リオルが好きだから。このままリオルのままでいてほしい」

そう言つたらリオルは顔を赤くして俯いた。

…あ、俺、今…

俺もトマトと同じくらい顔が赤くなつてしまった。

この火照りを鎮めたいけど、タツベイとリオルが俺の手を離してくれないので公開処刑中である！

「そ、そうだ。タツベイ、改めて聞くけど、俺と一緒に来ないか？」

タツベイは嬉しそうに頷き空いているモンスターボールに頭を付けてボールの中に入っていた。タツベイGETだ。

「タツベイGET。もしかしてタツベイってメスだったりするのかな？」

俺がそう言うのとリオルが頷いた。

え？マジで?!だからリオルがヤキモチ妬いたんだ。

もう、リオル大好きだあああ！

リオル・レベル23（メス）

特性不屈の心

技電光石火、カウンター、まねっこ、発勁

コイル・レベル20

特性頑丈

技スパーク、マグネットボム、光の壁、ソニックブーム

タツベイ・レベル18（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

このタツベイ…

シャドークロー何で覚えているの!?

え？デイスクみたいなのに頭をぶつけたら仕えるようになった？

技マシンじゃん！この世界にもあるんや！

## 初Z技!

## 11話

カーラエ湾ですつとりオルを撫でてでも良かったが、まだ昼になるまで長いしタツベイの特訓をする事にした。

今回は海繋ぎの洞穴経由で帰る。

その洞穴にはコイキングがいるから。勿論、このカーラエ湾にもいると言うか、どこにでもいるけど…

一応、ズバットとデイグダが俺を襲ってくるかの検証も兼ねているのだ。

と言う訳でやって来ました海繋ぎの洞穴。うん！寒いわ！

ちなみに、入口付近に屯っていたズバット達は俺を見るやいな、もの凄く速さで洞窟の奥に逃げていった。ちなみに、地面も揺れていたのでデイグダも居たのであろう。

逃げたと言うよりは安全圏に向かったと言っておいた方がいいのかな？

この洞穴、上の方に湧き水がありそこに水ポケモンが住んでいたはずだ。

案の定いたし…

その後は恒例の2時間特訓コース！コイキング狩りをしつかりやりました♪



コイキングも素早さの努力値稼ぎ出来るから、弱いけど美味しいのだ。  
まあそこでも少し問題発生したけどね！

ねえ…知ってる？コイキングの進化系。

うん。カーラエ湾で会ったあのギャラドス。コイキングの進化系なんやで。

アレからコレに進化するって可笑しくない？え？ゲームは何でもあり？

それを言っちゃお終いだよww

と言う訳で、ハイ…出て来ましたよギャラドス！しかも番いで！！

だってさ…青と赤のギャラドスだよ？

うん。色違いのギャラドスだね！GETしなかったけど。

だってさ！破壊光線連発って、ゲームじゃあり得ない事ばかりぶっ放して来るんだよ

!?

速攻コイルを出して応戦したけど！ここのギャラドスだけタフだったんだよ！

何回傷薬でコイルを回復したか…

途中、コイルが俺の鞆から磁石を取り出してドッキングした後、コイル無双が始まっ

たのは内緒…

ギャラドスが出たおかげで更に1時間戦闘した時間が増えたのは仕方無いね。

海繋ぎの洞穴から出たときには空腹感ヤバかったよ。

でも、まだメレメレの花園なんだよね……ここを出れば3番道路。

そこを通り抜けてポケモンセンター。うん……先が長いし適当に木の実でも食って腹満たそう……

そしてこの花園。オドリドリ共が俺を見た瞬間襲って来やがった!

しかもあの時とは違い倍の20体で!更にモンメンとアブリーまで連携して襲ってくるってあり?ゲームじゃないから仕方無い?

つて事で更に追加戦闘始まりましたよ!

もう今回はフルバトルでリオルも戦闘に出して戦いましたよ。

コイルもタツベイもギャラドス戦で疲れてるハズなのに凄く頑張ってくれて……

「リオル!Z技使うぞ!」

リオルは力強く頷いて構える。

「俺達の!全力!全開!行くぞ!全力無双激烈拳!」

Z技のポーズを取り終えリオルにパワーが譲渡させた瞬間、俺は多大な体力消費に陥った。

リオルは拳のオーラの連撃を的確に襲ってくるポケモン共に当てていき、最後の一撃で全て倒しきった後、直ぐに俺の元に駆け寄ってきた。

「だ、大丈夫だから……」

ごめん。嘘。全然大丈夫じゃない……てか、体力限界……俺は力なく地面に倒れ込んだ。

リオル、タツベイ、コイルが必死に鳴いている声を聞きながら俺は目を閉じた。

リオル・レベル25（メス）

特性不屈の心

技電光石火、カウンター、まねっこ、発勁

コイル・レベル22

特性頑丈

技スパーク、マグネットボム、光の壁、ソニックブーム

タツベイ・レベル20（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

## 看病

## 12話

俺は目を開けるとベッドの上にいた。

直ぐ側に温もりを感じるので見るとリオルが横で寝ていた。その時にタオルが落ちたので、俺の額にあったのだろう…

リオルが俺の看病をしてくれていたみたいだ。

コイルとタツベイは見当たらない。どこかに行っているのか？

俺がそんな事を考えていると開いていた窓からポケモン達が木の実等を持って室内に入ってきた。その中にはタツベイとコイルもいた。

「お前達…」

俺の声に反応したのかりオルは直ぐに起き上がり顔を覗いてきた。

その後、リオルは皆の前で大泣きしながら俺にしがみついて来た。

あゝ皆に心配を掛けてしまったな…

俺は優しくリオルを撫でて謝った。

その後、持ってきてくれたオボンとオレンの実をポケモン達が女医さんに預けて食べ

やすいように加工して貰い食べた。

その後、俺の体力も回復し動けるようになった。

「乙技…かなりの体力を消費するみたいだ。俺も特訓するぞ」

その後、ポケモン達にお礼を言い再び島巡りを開始しようと思ったが、外を見ると月が綺麗に見える夜だった。

「そうか…俺は暫く寝ていたんだな」

リオルは軽く頷くと落ちたタオルを洗い再び額に乗せてくれた。

「ありがとう」

お礼の言葉を言った後、再び睡魔が襲ってきたので俺は寝ることにした。左右にはリオルとタツベイが腕にくっついてるので寝返りは出来ない。

翌朝、目が覚めるとコイルはコンセントの所でまだ寝ていた。

リオルとタツベイは俺の横で寝ている。

う〜ん！よく寝た…

俺が起きるとリオル達も起きて一緒に部屋を出た。

ちなみに、俺をここに運んでくれたのはデイグダ達だった。

リオルがデイグダに頼んだみたいだ。

その後の看病もリオルがずっとしてくれたらしく、仕方等は女医さんに教えて貰ったらしい。コイルとタツベイはその間、ポケモン達と木の実を集めに行ってたらしい。

全て女医さんから聞いた。

「ポケモン達から愛されていますね」

「俺もこの子達を愛してますので」

俺は照れながらそう言うとりオルが飛びついてきた！

「もうリオルく可愛い奴だな」

俺は微笑みながらリオルを撫でてあげるとタツベイがチラチラとこつちを見ていた。

「ほら、タツベイもおいで」

その言った時のタツベイの表情が満面の笑顔に変わったので、ちよつと笑ってしまった。

「あらあらく本当、ポケモンに愛されていますね」

「えへへへ」

その後、コイルも合流し再び島巡りを開始したかったが、お腹が空いていたので朝ご飯を食べてから出発した。

目指すは2つ目の島、アーカラ島だ！

リオル・レベル25（メス）

特性不屈の心

技電光石火、カウンター、まねっこ、発勁

コイル・レベル22

特性頑丈

技スパーク、マグネットボム、光の壁、ソニックブーム

タツベイ・レベル20（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

# リオルの回想その1

## 13話

私の名前はリオル。

まだタマゴから孵って間もなかった私をリヨウタが貰ってくれた。

優しい人なんだろうなあって思っていたらまさかの展開に…

この人…鬼！

だって！レベル1の私を初戦闘でいきなりレベル4のツツケラよ!?

死にもものぐるいで電光石火の一撃離脱のくり返し。何回かツツケラの攻撃が当たりそうになったけど、紙一重で躲して反撃！

凄く大変だったけど、レベル6の時に覚えたカウンターって技のおかげで戦闘が随分楽になったわ。本当、良かった…

ツツケラ狩り1時間コースは地獄だったけど達成感が気持ちよくて頑張って良かったって思えた。攻撃力の努力値がもの凄い稼げたし…

その後戦ったトレーナーのポケモンなんて相手にすらならなかった…

リヨウタが新しいポケモン欲しがっていたからコイルのGET協力する気満々だった



たけど、あの大群に私一人で戦うと思っていたら、死ぬ気で行くしかと思つて覚悟を決めたわ。

だけど、違つた：リョウタは私だけ戦わせずにリョウタ自身も戦闘に参加して、何回か死にかけていたけど、必死にコイル達に立ち向かつた。

私感動して途中、涙で前見えなかつたのよね。だから、途中から目を閉じて戦つていたわ。

その時、何故か目を閉じているのに、相手の位置が分かつた時は凄く驚いたわ。

そのまま戦闘が終わつてコイルをGET出来たので、終わつて良かったと思つたわ：コイルつて殆どが特性頑丈だから一撃で倒せないのよ！

その後コイルも私がやっていた地獄の2時間コースを受けた時は頑張れしか言えなかつた。

そう言えば、イリマつて人のポケモン。そこまで強くないのね。

ヤングースが地面に潜つても場所丸わかりだし、遅いし、体力も少ない。負ける要素無かつたわ。

その後も弱いグループと戦つたけど、話しにならないから省くわ。

：それにしても、やつぱりこの人つて鬼？

デイグダ狩り3時間コースよ！おまけにズバットも同時に出て来るからコイルも巻

き込まれたけど：正確には、デイグダ&ズバット3時間地獄コース。

疲れまくった状態で洞窟から出ると、夕日が綺麗で疲れが半分ほど吹っ飛んだ感覚になったわ。歩いた瞬間元に戻ったけど：

後、リーリエって綺麗な女の子。

見た事ないポケモンと居たけど、リョウタは何か知っていたみたい。

まあ、私のリョウタを取らないならどうでもいいけどね。

その後、一晩テントでリョウタ（コイルもいた）と寝た時、寝顔が凄く可愛くてキュンってなっちゃった。

翌朝は島キングと戦って勝ったけど、あのマケンカニとの戦い、我ながらファインプレーだと思うの。

マケンカニのグロウパンチをまねっことで瞬時にコピーしてあの拳を叩き付けて、更に回し蹴りよ！更に初撃で決めたグロウパンチの効果で攻撃力が上がった状態での、グロウパンチアッパー！

勝ってた時、緊張感が解けて上手く力が入らなかつたから小走りでリョウタの所に行く  
と腕を広げて待ってくれた！

もう飛び込むしかないわよ！

リョウタは私を抱きしめてくれて、更に頭なでなで！もうご褒美♪

私、頑張つてよかった！

けど、あのタツベイ。

私がリヨウタとラブラブしていると、リヨウタがタツベイにも甘やかし、更にGETしちやった…まあリヨウタの良さを一番理解しているのは私なのだから。分かるっちや分かるけど…

その後、リヨウタから愛の告白を受けたわ。恥ずかしくて俯いちやっただけど、チラッと上を見るとリヨウタも顔が赤くなっていたので、可愛かったわ。

帰りはタツベイの強化も含めて海繋ぎの洞穴でコイキング2時間コースを実施したわ。

相手がコイキングだからイージーモード。もの凄く優しいコースよ。

タツベイ。こんな事でへばっっちゃこの先やってられないわよ。

それにしても、色々問題だらけ…コイキング狩りは順調に進んでいて、もう終わり間近だったその時、青と赤のギャラドスが出て来たのよ！しかも、私だからわからないけど、あの2体のレベル…32よ！

私のレベルでまだ25。コイルもタツベイもそれ以下。結構ヤバい敵だったけど、一撃離脱作戦で何とかなかったわ。

コイルは特性頑丈の効果で、私達が避けきれない攻撃を身を挺して庇ってくれた。

リヨウタはその都度、傷薬を使って回復してを繰り返す。

コイルの電気ショックをスパークに変えなければ薬に終わったけど、リヨウタが技をそれにしたので、私達はそれに従うだけ。

多分、リヨウタもやらかしたと思ったと思うわ。

私達はギャラドスを倒した後、花園に到着して帰ろうとしたら、オドリドリ共の待ち伏せに遭ってしまった！

リヨウタも苦虫を噛みつぶした表情で睨み付けた後、直ぐに手持ち全員を出して戦闘に入った。

そして、事態は起こった：

「リオル！乙技使うぞー！」

遂に乙技！

私もやる気に満ちていたので、力強く頷いたわ。

…そう。この時、私が頷かなければ…

「俺達の！全力！全開！行くぞー！全力無双激烈拳！」

リヨウタが私に乙技の力を譲渡した瞬間、確実に体調が悪化した！

私は直ぐにでも助けに行きたかったけど、リヨウタのくれたこの力を無駄には出来ない！

私は一度目を閉じ、波動の力で敵の居場所を的確に当て、最後の一撃に残っていた乙技の力全てを乗せぶつけてやった!

相手は全滅出来たので、急いでリヨウタの元に向かったわ!

リヨウタはその場で倒れ「だいじょうぶ」って言っていたけど、全然大丈夫じゃないじゃない!!

私は必死に名前を呼び続けたけど、リヨウタは目をゆっくり閉じてしまった!

私は直ぐにコイルにオニスズメとオニドリルに木の実を持ってくるよう指示を飛ばし、タツベイにはデイグダを早く連れてくる様に指示を出した。

私はその間、倒した彼奴が目を覚まし再び襲ってくるのを、1人で戦い続けた。

30分程でデイグダ達は来てくれたので、直ぐにリヨウタをポケモンセンターに連れて行くように指示を出し、タツベイは私に加勢してくれた。

オドリドリ達は私達に阻まれ、また一齐に攻撃を仕掛けてきたその時!オニスズメとオニドリル達が助けに来てくれた!

「ここは我らに任せろ!木の実はポケモンセンターの所に置いてある!」

「ありがとう!」

オニドリルにお礼を言い、私は残り僅かしかない体力でタツベイと一緒にポケモンセンターに向かい女医さんにリヨウタをお願いした。

女医さんは私も直ぐに治療すると言ったのだが、私は先にリヨウタを治療して欲しかったので、拒み女医さんも気持ちをつかってくれたらしく、直ぐに治療に取りかかってくれた。

治療が終わった後、私は直ぐにリヨウタの所に行き、看病を続けた。

やり方も女医さんが様子を見に来た時に教わってからもやっている、気がついた時、私は寝ていたみたい。

リヨウタが目を覚ました時は、何故か感覚で分かり直ぐに起きると、安堵と喜びで泣いてしまったけど、仕方無いよね？

だって：一番リヨウタを愛しているんだもん。

相思相愛って言うのかしらね？

## アーカラ島編

## イーブイGETのために

## 14話

遂に来たぜ！アーカラ島！

いや〜メレメレ島より暖かい島だなあ

この島のマツプをとりあえず手に入れるか…

と言う訳で、やって来ましたポケモンセンター！

ここって色々便利なのだ！ポケモンの回復、道具のショップ、カフェ等様々な事をやってるから。

俺は早速マツプを買い何処に何があるのかを軽く見渡した。

この隣の道が4番道路か。

フフフ…遂に来たぜ…イーブイの生息地!!絶対GETしてやる!

そこからの俺は速かった。

速攻4番道路に行きイーブイを探しまくって早1時間!

…何故みつからない!!!!

そう…イーブイが全く見つからないのだ！

だがしかし！俺は諦めん！！

イーブイ搜索を更に続行し早2時間！それでも見つからない！！

何故じゃー！！

リオル、タツベイ、コイルもイーブイ搜索を手伝ってくれたが全然見つからない！

俺は、最終手段を使う事にした…

ゲームではマップ上の所しか行けないが、ここは俺のもう一つの現実世界！

故に！マップ上には無い場所でも通ることが出来るのだ！

俺はリオル達を一度ボールに戻し、道無き道を通りまくった。

その途中、急に沼に填まったり、背丈ぐらいある雑草の中を彷徨ったり、虫ポケモンの巣窟に入ってしまったい命の危機に陥ったり…

色々あったが、成果はあった！

道無き道を抜けた先には開けた土地があり、その中央には石で出来た丸いステージ？

的な物があった。

その石の舞台上に銀色のイーブイが丸くなって寝ていたのだ！

遂にイーブイに会えた…

苦労に苦労を重ねて会えたイーブイ…



しかも、会えたのは通常のイーブイではなく、色違いのイーブイ！

この機会を逃せば、もう2度と会えない！

俺が静かにイーブイに接近する途中、後ろから爆音が轟いた！

その音にイーブイが気付くと直ぐに起き上がり逃げて行ってしまった！

誰が…俺の邪魔をしたああああああ!!!

俺は音がした方向を見ると…

…は？

なんでおるん？

俺は怒りよりもそのポケモンに驚いた。

ポケモンの名はラランテス。

しかも、通常のラランテスとは違い…

「主ポケモンのオーラか!？」

大きさも通常より大きい。更にゲームと一緒に赤かオレンジ色か分からない主ポケモン特有のオーラを放ってやがる！

俺は道無き道を彷徨い、シエードジャングルに来てしまったらしい…

主ポケモンのラランテスは鎌を大きく振り上げ威嚇してきた！

今の俺では此奴には勝てない…

俺は直ぐにその場から逃げようとした時、視界の端の方に先ほどのイーブイがカリキリ共に取り囲まれていた！

「イーブイ!? 彼奴等く!!」

俺がイーブイの方に走り出した時、後ろからラランテスも追って来た！

やはり付いて来るか！

「リオル！ 悪いがラランテスの足止めを頼む！」

俺は走りながらリオルを出しラランテスの足止めを頼んだ。

更に俺はタツベイを出し、龍の息吹を命じて取り囲んでいるカリキリの内1体を吹き飛ばした！

カリキリ共は直ぐにタツベイの方を向き一斉に襲い掛かって来た！

「タツベイ！ カリキリ共を倒せ！ 俺はイーブイを助けに行く！」

タツベイは龍の息吹を使い俺に一番近いカリキリを吹き飛ばした！

俺はタツベイに感謝しながら、チラッとリオルの方を見る。

やっぱ、俺のリオルは最高だ。

ラランテスの攻撃を最小限で避け、更に発動を使い確実にダメージを与えてる。

ラランテスは全然当たらない攻撃に怒り、大声で仲間を呼びやがった！

俺は直ぐにイーブイの方に掛けより攻撃を受けた箇所がないか見ると大丈夫そう

だった。

「イーブイ！今の状況で言うのもなんだが、俺のモンスターボールだ。その中に入ればお前は助かるが、俺の仲間になるって事にもなる。

もしそれが嫌ならそのまま逃げてくれても構わない。俺は、俺の大事なポケモンを守る事で精一杯なんだ」

俺はそれだけ言うとりオルとタツベイに技を命じ始める。

イーブイは俺の顔を見た後、モンスターボールに手を当てボールの中に入った。

GETした音が鳴った後、イーブイは自分からボールを出て俺のZリングにクリスタルを填めた！

「これは!？」

イーブイは頷くと俺の前に出て構える。

「分かった。行くぞイーブイ！Z技！ナインエボルブースト!!」

俺がZ技の構えをする間に、イーブイは手助けの技を使い俺のサポートをしてくれた。

その後、Z技の力がイーブイに注がれた瞬間、いつもよりも体力の減りが少なく俺はイーブイに感謝した。

りオルもタツベイも俺がZ技を発動するためのポーズをとった瞬間、止めようとこつ

ちに走って来ようとしていたが、イーブイの手助けを見た後、自分の相手に向き直った。

説明しよう！（天の声）

イーブイのZ技は、イーブイの進化系が集まりイーブイに力を与える技なのだ。

能力値が2倍に増加される強力な技！

手助けはゲームとは違い、攻撃力も上げるがトレーナーの体力増強効果もされるのだ！

イーブイの鳴き声が辺りに響いた瞬間、四方八方からイーブイの進化系が集まり、8色のオーラがイーブイに注がれた。

更にイーブイが、集まった進化系達と一緒に戦えと命令を出したのか、進化系達は立ち去らずイーブイと一緒に戦闘態勢に入った！

それと同時にラランテスの仲間達も四方八方から集まった。

それから約2時間：戦いは終結しラランテスを倒せた。

リオルがラランテスにトドメをさせ、呼び出して来たケララツパやポワルン達は、イーブイの進化系達が戦ってくれた。周りにいたカリキリ共はタツベイとイーブイで戦った。

ラランテスがひたすら仲間を呼びながら戦うので、もの凄い数のポケモン共が来たが、それら全てを倒し尽くしたので戦いが長引いたのだ。

ちなみに、ケララツパ、カリキリ、ラランテスは攻撃力の努力値を稼げるので地味に美味かった。

ポワルンは体力の努力値を稼げるのだが、うん…まあ良かったのかな？

なんかかんやで終わったバトル。

イーブイの進化系達の体力を傷薬で回復させた後それぞれの場所に戻って行った。

リオル、タツベイ、イーブイの体力も回復させた後、ラランテスが起き上がった。

俺達は直ぐに戦闘態勢に入ったが、ラランテスは膝を着いて頭を下げた。

…色タイレギュラー過ぎるんだけど！

ラランテスは負けを認めて、俺に草の乙クリスタルを渡そうとしていたのだ。

「ラランテス…それはお前が持つていてくれ。俺に草タイプのポケモンも居なければ草タイプの技を覚えているポケモンも居ない。お前が大事に持つていてくれれば俺はそれでもいい」

俺はラランテスの手を軽く握りそう言った。

ラランテスは深く頭を下げると立ち去って言った。

さて：：どうやってここから抜けよう。

リオル・レベル30（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

コイル・レベル26

特性頑丈

技スパーク、ソニックブーム、光の壁、ミラーショット

タツベイ・レベル24（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル25（メス）

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

# グラジオ登場

## 15話

俺は再び道無き道を彷徨い、道に出たときには既に昼を越えお菓子の時間でお馴染みの15時になっていた。

出て来た場所は5番道路の岩が数カ所点在している場所だった。

やっと出て来れた…

「そこにいるのは誰だ!」

急に話しかけられビクツと驚いてしまったじゃないか! チクシヨウ!!

声のした方向を見ると…

あゝ確かに此奴居たわ…

グラジオだ。

「俺はリヨウタ」

「ん? あ、名乗ってて意味じゃなかったんだが…俺の名前はグラジオ」  
名乗ってて意味だと勘違いしてしまった…

それと、やっぱグラジオのポケモンはタイプ・ヌルか…

「ここに何のようだ？」

「道に迷って、抜けて来たらここに」

「なんだ。ただの迷子か」

ただの迷子ってなんだよ！

しかも何故かどや顔で言ってくるし！

「グラジオは何でここにいるんだ？」

「俺か？俺はこいつの特訓をしていたんだ…」

「タイプ・ヌルの強化ね」

「何故、名前を知っている!?!」

やらかしたあ…

そう言えばまだポケモンの名前、言ってるわ

「直感で？」

「あり得ないだろ！貴様は危険だ。連行させて貰う」

「それは勘弁！」

「なら強行手段だ。タイプ・ヌル、リョウタを捕まえる！」

「危険分子は閉じ込めるってか！リオル、頼んだ！」

俺は直ぐにリオルを出して、タイプ・ヌルの足下に発勁を喰らわした！



タイプ・ヌルは足に麻痺を負い上手く歩けなくなってしまう。

「こしやくな！」

「小柄なポケモンにしか出来ない事もあるんだよ！更に発勁！」

リオルは上手く動けなくなっているタイプ・ヌルの足全てに発勁を喰らわせダウンさせた。更にダウンした時の重さを活かして、タイプ・ヌルの首元に発勁を喰らわして戦闘不能にさせた。

「そ、そんなばかな……」

「攻撃を指示してないお前が悪い」

「俺は……」

グラジオはタイプ・ヌルを手持ちに戻して去って行くこうとした。

「グラジオ。1つ聞きたいんだが、俺を捕まえて何をしたかった？」

「捕まえるだけだ。俺のポケモンは極秘だからな」

「それ、教えて良かったのか？」

「あ……」

グラジオはそのまま地面に手を着いて項垂れた。

「おいおい……グラジオってもっとクールなイメージだったんだが……」

「なんか、面白い奴だな。」

「安心しろ。俺は誰にもタイプ・ヌルの事は話さない」

グラジオは俺の方を見るとゆっくりと立ち上がった。

「本当か？」

「当たり前だろ？人には知られたくない秘密の1つ2つ有るってもんだ」

リオルは俺の顔を見ると抱っここのポーズを取った。

「おいおい。今のこの状況でか……」

「可愛いからするけどな！」

俺はリオルを抱き上げるとなでなでしながらグラジオの話しに戻った。

「リョウタもポケモンを愛しているんだな」

「もって事は、グラジオも愛しているんだな」

「ああ」

俺とグラジオはお互い微笑み会い握手を交わした。

「まだどこかで会おう」

その後、グラジオと別れポケモンセンターへと向かった。

リオル・レベル30（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

コイル・レベル26

特性頑丈

技スパーク、ソニックブーム、光の壁、ミラーショット  
タツベイ・レベル24（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル25（メス）

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

## スイレン登場

## 16話

ポケモンセンターを出た後、せせらぎの丘に向かった。

ゲームではこの丘で水の試練をしていたからな。

間違っていないければ、この丘にスイレンもいるはず。

…って事でやって来ましたせせらぎの丘！

そして、丘にある湖に居ましたよスイレン！

スク水姿…？じゃない…だと？

あのスイレンが…ビキニだと!?

スイレンは軽く準備運動すると湖の中にダイブした。

おおい…スイレンってスク水のイメージしか無かったんだが…

しかもフリル付きビキニ…ヤバい。ヤバいよ！鼻血止まんないよ！

俺が鼻を伸ばしていると、リオルが俺に腹に発勁を喰らわせてきた…

「グハッ…俺の生涯に一片の悔い無し…」

後悔あります！あります！あります！ですけど言ってみたかったこの台詞！

はい：リオルから叱られました。

ちなみに、俺がこの台詞を言ったので、リオルは本当に死んでしまうと勘違いしたらしく、色々と介抱してくれた。

俺がリオルと戯れているとスイレンが湖から出て来たが、何故か前を隠しながら出て来た。

辺りをキョロキョロ見渡すと安心したのか、隠した場所をさらけ出した。

もうお分かりだろう！

はい：水中で何があったか分からないが、水着消えましたとき！

そしてラツキー主人公！

鼻血を盛大に噴き出して貧血で倒れました！

だってしょうがないだろ!?

俺、そんな経験した事なかったし！

リオルは驚愕の表情を、スイレンは俺が居た事が分かって慌てふためき：

なんか：色々あったな。俺の人生：

俺の最後はスイレンの：プハッ！

俺の腹に強烈な痛みが走った瞬間、俺の意識は目覚めた。腹を見るとリオルが笑顔で発動を喰らわせていた。

その隣にはスイレンが苦笑いしながら見ている。

「君、いやらしい夢でも見たんでしょ？」

「いや！決してそんな事はございませぬ！」

「嘘をつかなくてもいいよ」

スイレンは俺の…

あゝ!!!チクシヨウ！静まってくれ!!!

結局、俺はリオルにもう一発、発勁を貰いました。

後、リオルとスイレンに土下座して謝りました。

ちなみに、スイレンはスク水に着替えております…

残念、無念…

後から分かった事だが、スイレンは何回かビキニにチャレンジしていたらしい。

人が来なさそうなこのせせらぎの丘で…

ちなみに、大きさが合わないのか湖に飛び込んだ時に外れる事が多いそうなの…

せせらぎの丘…

水の試練に使う場所じゃないの？

「そっただけ…この場所は私の許可が無いと入れないんだ」

「え？簡単に入れたけど？」

「嘘!?だって、入口に強面の人居たでしょ?」

「試練受けに来ましたって言ったら笑顔で通してくれたぞ?」

「そ、そんなあゝ」

スイレンは手を地面に着いて項垂れた。

「安心しろ!あのす…」

俺が言い終えるより先にスイレンとリオルのダブル攻撃を受けました…

ハイ…もう言いません。

リオル…突っ込みキャラにチェンジしたのか?

いやいや!違うよね?違うと言ってくれえゝ!

リオル・レベル30 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

コイル・レベル26

特性頑丈

技スパーク、ソニックブーム、光の壁、ミラーショット

タツベイ・レベル24（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、嘯み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル25（メス）

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール



## 水の試練！

## 17話

色々あったが、スイレンは水の試練を受けさせてくれた。

試練内容はゲームと一緒に、この湖の主ポケモンを倒せば試練達成と言う事だった。

ちなみに、俺には何故か知らんが、ハプニングが付きまとうらしい！

水の試練始まって直ぐに、ヨワシの群れが俺を襲いに来やがった！

此奴等、ヨワシのくせに俺に喧嘩ふっかけて来やがったんだぞ！

ヨワシ？何処がヨワシじゃ！！

まあ、コイルが無双してくれたおかげで大丈夫っちゃ〜大丈夫なんだけども…

「君、凄いね」

「スイレンの方がすごかった…」

リオルがボールから出て来たので何も言わない事にした。

言わないって言ったでしょ？的な顔をしているリオルが可愛かったから癒やされた。だつて！ほっぺたを膨らませて腰に手をあてて前のめり！

更にリオルって事もあり、可愛さ倍増！いや、3倍増！！故に可愛い！

ちなみに、俺は今ラプラスの上に乗っている。

水の試練はこの湖のどこかにいる主ポケモンを倒す事なので、ラプラスが力を貸してくれているのだ。

俺は出て来たりオルを抱きかかえ、なでなでしながらコイル無双を見ることにした。それにしてもコイル：凄く活き活きしているなあ

ヨワシが襲ってきた瞬間、その後もスパークを出し続けて攻撃し、一撃で沈めていく快感が良いのだろうか…

その倒されたヨワシが湖の一部の所に集まっていくのが見えた。

「コイル！その場所から離れろ！」

「…あの変態さん。意外とやるね」

コイルは俺の指示に従い直ぐにその場から距離を取った瞬間！直前まで居た場所にヨワシの魚群の姿が大口を開けて強襲して来た！

この魚群の姿こそが、ヨワシの最強状態。

ちなみに：主オーラを纏っているので間違い無く、此奴が今回の標的だ。

「コイル！そいつを倒せば試練達成だ！気を引き締めていくぞ！」

コイルは先ほどまで少し調子に乗っていたが、主ポケモンを見てからはしっかりと緊張を感じている。

ヨワシは大口を開けると水鉄砲を放って来た！

ヨワシの魚群の大きさの水鉄砲は広範囲！避ける事は不可能だ！

「光の壁！」

コイルはいつも通り光の壁を斜め上に展開し水を反らす！

「ミラーショット！」

コイルは輝く弾を発射しヨワシに放った！ヨワシは避ける為に水面に潜ろうとしたが、動きが遅く何体かのヨワシを倒した。

「思ったより遅いな…コイル、スパークだ！」

コイルは電気を纏いながらヨワシに突撃する！

ヨワシは避けられないと判断し大口を開けて食らいつこうとした！

勝負あったな…

「スパーク、最大解放!!」

コイルはそのままヨワシの口の中に入りスパークを最大解放して魚群で集まったヨワシを全て倒した！

その後、ラプラスに陸まで行って貰い降ろして貰った。

「お見事。まさかこんなに強いなんて思っていなかったよ」

「コイルが頑張ってくれたからね」

俺はコイルに手招きし撫でてやった。

俺がコイルを撫でてしていると抱きかかえていたリオルが「キューン」って鳴いた。

「リオルも撫でて欲しいんだな」

俺は笑顔でそう言い、リオルを撫でてやるとすつごく嬉しそうな笑顔になり、コイルは少し不服そうだ。

更には、イーブイとタツベイも出て来て撫でてアピールをする始末…

「お前達なあゝ可愛すぎるわ!」

「羨ましい…」

…ん?今のはスイレンか?

「撫でてやろうか?」

「いいの!?!」

「おう」

スイレンが俺の前に座るのを待った後、頭を撫でてやった。

「ふああ…」

なんて事だ…

スイレンがとろけそうな顔をしているではないか!

「リョウタ。頭撫でるの上手い」

「ありがとう」

俺がスイレンの頭から手を離すとパツと手を握られた。

「だめ。もつとしてほしい」

「スイレン…」

俺が再び撫でてやるとスイレンは笑顔になった。

ちなみに、リオル、タツベイ、イーブイはもの凄く不服そうだ。

コイルは性別が無いのでそこまで不服そうでは無いが、まだ撫でて欲しそうにしていた。

その後、約1時間と言った所か…

ずっとそれが続いた。ちゃんとポケモン達も撫でてやったので不満はないだろう。

「なでなで、ありがとう。後、試練達成の証」

「ありがとう」

俺はスイレンから証を受け取ろうと手を伸ばした時、スイレンが俺の手を握ってきた。

う〜んと？…どゆこと？

「私…：リョウタと一緒に島巡りしたい！」

…はい!?

「ちよつと待つて!! スイレンはキャプテンだろ? 大丈夫なのか?」

「大丈夫じゃない…けど! 私、リヨウタと一緒に居たいの!」

愛の告白!?

え?! ちよつと! めつちや嬉しいんだけど!!

「あ、う、うん…俺もスイレンと一緒に居たいけど…」

俺は少し頭を下げると、スイレンが自分の胸を見た。

「私じゃ…胸が小さいからダメなの?」

なぜそこ?! いや、まあ大きいのが好きなのは好きだけど!

普通にスイレンサイズでもいいと思うんだ!

って! 俺は何を考えているんだあああ!!!

そもそも、俺は何故、そこを見てしまったく!!

「だ、ダメじゃないぞ!! うん! 全然大丈夫だ!!」

「ほ、ほんとう?」

「本当だ!」

「じゃあ…なんで一緒に行つちやダメなの?」

スイレンは泣きそう顔をしながら俺を見つめる。

「キャプテンは、あまり地元から離れちやダメだと思ったから…」

「じゃあ…リヨウタが、この島を巡り終わるまで一緒にいたい。これじゃダメ？」  
「そ、それなら、俺はいいぞ」

「やった〜！」

ちなみに、リオル達はすごく不服そうにしていた。

「これからもよろしくね。リヨウター！」

スイレンは俺の頬に軽くキスをした後、腕にくっついて来た。

今の…キス!?

俺は空いてる方の手でキスされた場所を触ってみた。

「嫌だった？」

「え? いや! 全然! むしろ嬉しい!」

「良かった♪」

スイレンは更に抱きつく力を強くしながら笑顔で俺を見た。

あゝスイレンってこんなにも可愛かったか? いや、最初から可愛かったな!

「そ、それじゃあ行こうか？」

「うん!」

「リオル、タツベイ、イーブイ、コイル。お前達も行くぞ」

リオルは俺の足を軽く蹴り、タツベイは俺の尻に軽く頭突きをし、イーブイは俺の腰

に軽く尻尾を当てて、コイルは俺の頭を小突いた。

「もしかして、怒ってる?」

「多分、私がリヨウタにくつついているから。けど、離れないよ」

「え?」

「だって、私。リヨウタの事、好きになったから」

リオル・レベル30 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

コイル・レベル29

特性頑丈

技スパーク、ソニックブーム、光の壁、ミラーショット

タツベイ・レベル24 (メス)

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル25 (メス)

特性適応力



技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

# バトルロワイヤル

## 18話

スイレンの愛の告白を受けた後、一緒に島巡りを開始した。ちなみに、スイレンにはまだ返事をしていない。

スイレンはこの気持ちだけでも伝えたかったと言いつつ、返事は別にいいよって言ってくれたのだ。

その後はイチャラブしながらロイヤルアベニューへと向かった。

その先にあるベラ火山の頂上、ゲームと一緒になら火の試練がある場所へと向かうためだ。

話しは少しずつれるが、先に言っておく：

俺がこつちの世界に来る前まで進んでいた場所、それは：4つめの島、ポニ島である。伝説ポケモン、ソルガレオをGETする所までだ。

スイレンと俺はロイヤルアベニューへと向かう間にポケモン達と何かやりとりをしていたみたいで、リオル達と仲が良くなっていた。

それと、ロイヤルアベニューへと向かっている最中にまた雑魚トレーナー達にバトル

を挑まれたのでリオルの電光石火で片付けた。

だって：それだけで相手、戦闘不能になるんだもん。

スイレンは苦笑いしながらバトルを観戦していた。

そして来ましたロイヤルアベニュー！

ここにバトルロワイヤルと言う施設があり、4体同時でバトルし生き残った者が勝者と言う面白い事をしている施設があるのだ。

だが、俺は行かん！

だって！俺の可愛いポケモン達をあんなむさ苦しいバトルに出せるか！

：と言う訳で俺はポケモンセンターで体力を回復させた後、そのままスイレンを連れてベラ火山へと向かおうとした時：

やっぱ俺って：行く所全てにイベントおこるん？

はい！やっぱり来ましたプロレスラーロイヤル（クワイ博士）！

今は面倒くさいからマスクと呼ぶ。

「その君！バトルロワイヤルをしようではないか！」

「嫌です」

俺はそれだけ言うとしスイレンを連れて立ち去ろうとした。

「ちよつと待ってくれ！今、参加人数が少ないから協力してほしいのだ！頼む！」

「リヨウタ…参加してあげよう？」

「俺の可愛いポケモンを参加させると？」

絶対やだね！俺のポケモンを参加させるぐらいなら最初から出ないよ！

「それじゃ！俺のポケモンを使うのはどうだろうか！？」

「リヨウタ…手伝ってあげよう？」

「しよすが無いなあ…貸してくれるポケモンを見せて下さい」

マスクはボールからワンリキーを出した。

「このワンリキーでどうだろうか？」

「…申し訳無いですが、自分のポケモンの方が鍛えられています」

このワンリキー…レベル20もいってないぞ…

俺は勝負するなら全力でやる。仕方無い…リオルに頼むか。

「リオル。バトルロイヤルに出てくれるか？」

俺はボール越しにそう言うとりオルが出て来た。

リオルは力強く頷く。

さて…とつとと終わらせるか。

「君のリオル…うん！今回のロワイヤルは白熱しそうだ！」

マスクは笑いながら俺を連れて会場に向かった…

会場には既に2人が待っており、何故かグラジオがいた。

もう1人はカキだ。ベラ火山にいると思っただが、こっちに來ていたとは…

「それじゃあ会場に向かおうか！今日のロワイヤルはこのメンバーだ！」

マスクはそう言うのと全員を見渡した。グラジオは俺の顔を見た瞬間、少し嫌そうな顔をしたが、直ぐに元に戻した。

「グラジオ。バトルでは手加減しないぜ」

「当たり前だ。今回は最初から倒しに行く」

「お互い頑張ろうな」

「もちろんだ」

俺とグラジオは握手を交わした後、マスクに付いていった。

そして始まったバトルロワイヤル。

俺はリオル。

グラジオはニューラ。

カキはガラガラ。

マスクはイワンコを出した。

「先手は頂くぜ！電光石火でガラガラを攻撃！」

「出遅れるなニューラ！電光石火でイワンコを攻撃！」

俺とグラジオはそれぞれ別のターゲットを狙い同時に動いた！

「ガラガラ！ホネ混紡で攻撃しろ！」

「イワンコ！砂かけだ！」

ガラガラは持っていたホネでリオルを攻撃しようとしたが、遅いわ！

「リオル！発勁だ！」

リオルはガラガラの懐に潜りこみ、電光石火を解除した瞬間発勁を使いガラガラの喉元を叩き飛ばした！ガラガラは地面に倒れ込み戦闘不能になった。

ニューラはイワンコの砂かけが目に入り攻撃を避けられていた。

「イワンコ！岩落とし！」

「リオル！発勁！」

イワンコが岩落としを発動する前にリオルはイワンコの腹を発勁で叩き付ける！イワンコは吹き飛ばされ戦闘不能になった。

「そんなバカな!？」

「これが現実です。さあ、グラジオ。行くぞ！」

「来い！」

俺とグラジオの一騎打ちは俺の勝利で幕を下ろした。

まあ：アレだ。

リオルの発動でニューラを倒した。

そう言えば、アローラのガラガラってゴーストタイプ入っていたハズなのに、何故格闘技が効いたんだ？

…え？リアルでは関係ないって？そんなバカな…

…ん？正確にはホネに発動を当てたから問題無いって？ハハハ：そう言う事にしておくよ。

見事バトルロワイヤルに勝った俺はバトルポイント（BP）貰ったが、別に入らないのでマスクに渡した。

マスクはただでは受け取れないと言い、炎の石を貰った。

説明しよう！（天の声・いや〜久しぶりの登場じゃ…）

炎の石とは、特定のポケモンを進化させる事が出来る特別な石なのだ！

「ロイヤルさん。俺、水の石の方がいいから、返すね」

「え…」

「ちよつと待てリヨウタ。俺にその石をくれないか？水の石と交換しよう」  
「良いのか？」

「ああ。逆に俺は炎の石が欲しかった」

「よし！交換だ！」

俺はグラジオと石を交換し終わると、挨拶を済ませて会場を出た。

説明しよう！（天の声）

水の石とは、特定のポケモンを進化させる事が出来る特別な石なのだ！

俺は水の石を観客席で応援してくれていたスイレンにあげた。

「わあ！水の石！ありがとうリヨウタ!!」

スイレンはハグからのキスをしてくれた後、撫でて欲しいと言われたので撫でた。

その直後、リオルもボールから出て来て2人一緒に撫でてあげた。

もう！なにこの子達!?

可愛いを通り越して天使なんですけど!?

いや？女神？



リオル・レベル30（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

コイル・レベル29

特性頑丈

技スパーク、ソニックブーム、光の壁、ミラーショット

タツベイ・レベル24（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル25（メス）

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

## 火の試練

### 19話

俺がスイレんとリオルとイチチャラブしていると、カキガリザードンに乗ってベラ火山に向かったのを見た。

俺はスイレんに試練を受けに行くと言い、ベラ火山へと出発した。

その道中に海があり、スイレんが凄く泳ぎたそうにしていたので、行かせてあげた。

「ありがとう！行つて来ます!!」

スイレんは着ていた服を直ぐに脱いで海に走り出した。

びつくりしたく！急に服を脱ぎ出すから、またあの姿を見れると思つてドキドキした

よ！

もう一度言おう！見れると思つてだ！

…どうせなら見たいじゃん!?

え？スク水なのかって？ちゃんとスク水の中に着ていたよ…

15分程スイレんの楽しそうな顔を見ながら待つていると戻つて来た。

「ふく楽しかった！待つてくれありがとう！」

スイレンはスク水を脱ぎながら近寄ってきたので直ぐに目をそらした。そうしないと俺の息子が元気になるから…

「ん？別にリヨウタなら見られてもいいけど？」

スイレンはそう言うとそのままりヨウタに近づいてきた。

「と、とりあえず服を着てくれ！」

「はい」

俺は適当に服をスイレンに渡そうと手を伸ばした時、柔らかい物に当たった。

「本当は触りたかったんだ」

「ぎ、ごめん！」

顔が火照っているのが自分でも分かるぐらい、熱くなっていた。

スイレンは俺を弄りながらもちゃんと着替えを済ませ俺の前に来た。

「ちゃんと着替えたから安心して」

「う、うん」

「ちよつと期待してたりしたの？」

「そ、そんな事ないよ？」

「ふん？」

スイレンはそう言う俺の手を引いた。

あの感触……やっぱアレだよな？

やべえよ！ドキドキ止まんないよ！

「火の試練、受けに行かないの？」

「行く！」

俺はそれだけ言い、スイレンと共にベラ火山を登っていった。

さあやって来ましたベラ火山頂上！

カキもガラガラと一緒に腕を組んで試練を受ける者を待っていたと思っただら稽古していた……

「火の試練を受けに来ました！」

「先ほどのロワイヤルの選手か。（イチチャラブ：羨ましい）」

カキはガラガラと一緒に近づいて来ると手を出した。

「改めて、俺はカキ」

「俺はリョウタ」

俺はカキと握手をするとそのまま試練内容を聞いた。

試練は主ポケモンを倒す事。

そのポケモンはエンニュート。ヤトウモリの進化系だ。

やっぱ此奴か…面倒くさい奴なんだよなあ…

俺はいつも通りリオルを出した。

さて…始めるか！

エンニユートは一気に距離を詰めてきた！

「発勁！」

リオルはエンニユートの動きをしつかりと見て、最小限の動きでエンニユートの身体をすり抜け発勁を脇腹に喰らわせた！その時、エンニユートが自身の身体に毒毒を纏わせており、発勁で当てた猛毒の場所が飛び散りリオルを猛毒状態にさせた！

リオルは片膝を着き、苦しそうに咳き込む。

「リオル戻れ！」

俺は直ぐにリオルを手持ちに戻し、リオルを休ませる。

彼奴…今まで戦って来た能筋達とは違うみたいだな…

まさか、自身に毒を纏わせるなんて…

「コイル！出番だ！」

エンニユートは弾ける炎を出て来たばかりのコイルに放った！

「クソ！光の壁！」

コイルは正面に光の壁を発動させ弾ける炎を防いだが、エンニユートはその光の壁を

横切り2発目の弾ける炎を放って来た！

「なんて素早さだ！コイル、ミラーショット！」

コイルは直ぐに輝く弾を発射し、弾ける炎にぶつけ爆発させた！

エンニユートはトドメとばかりに爆煙の中から現れ、コイルを踏みつけた！

「なに!？」

エンニユートの口から漏れている炎は確実にコイルを捕らえていた。

「戻れコイル！」

俺は直ぐにコイルを戻し弾ける炎の攻撃を強引に終わらせた。

エンニユートは憎らしげに俺を睨み付ける、

毒と炎タイプ…水タイプを捕まえるべきだった…

「行けるか、タツベイ?」

タツベイはボールから出て来て力強く頷いた。

エンニユートは再び自身の身体に毒を纏わせ迫って来た！

「タツベイ！シャドークロー！」

エンニユートはタツベイのシャドークローを技と至近距離で当たるようにして、猛毒をタツベイに浴びせた。

勿論、自身にもそれ相応のダメージが入るが、一番確実な戦法と分かっているのだ。

タツベイは嘔吐しながら地面に這いつくばり苦しそうにもがき始めた。

「戻れタツベイ！」

このままでは、確実に負ける…

だが、あのエンニユートの猛毒を当たらないようにするには…

「イーブイ！頼んだ！」

エンニユートは弾ける炎を発射するとしやがみ込んだ。

やはりか！こいつ、最初の1打目は罠だ！

「イーブイ！躲した後、電光石火で攻撃だ！」

イーブイは火球を躲した直後、電光石火で構えてたエンニユートを攻撃した！

エンニユートは猛毒を纏わせる余裕が無く、腕をクロスにして威力を弱めた。

「イーブイ！スピードスター！」

イーブイは後ろにジャンプしながら尻尾を振りスピードスターを発射した！

エンニユートは弾ける炎を発射しスピードスターを爆砕した直後、ベノムトラップを吐き出しイーブイの着地地点に発生させた！

リョウタ視点からは、爆煙によりトラップがあることに気付かない！

イーブイは地面に着地した瞬間、毒は飛び散り状態異常に掛かってしまう。

「イーブイ！電光石火！」

イーブイは直ぐに攻撃しようとするが、毒による体調不良が原因で咳き込んでしまい隙が生じてしまう！エンニュートがその隙を逃すわけがなく、弾ける炎を放った！

「戻れイーブイ！」

リヨウタは直ぐにイーブイを戻し、攻撃を間一髪で避ける事に成功した。

ヤバいな…此奴、強すぎる。

「すまないリオル。俺はお前に懸ける」

俺はリオルを戦闘に出し、命じる。

使う技は起死回生！これで一発逆転を狙う！

「リオル！起死回生だ！」

説明しよう！（天の声）

起死回生の技は、自身の体力が少ないほどダメージがあがる技だ！

リオルは黄色く光る拳を維持しながらエンニュートに突貫する！

エンニュートは猛毒を自身に纏わせ、更に爪にも猛毒を纏わせた。

流石のエンニュートも幾十に纏わせる猛毒で状態異常になったが、エンニュートはそのままリオルに突貫する！

リオルは迫って来る猛毒の爪を右に避け、更に尻尾からの追い打ちをジャンプで避けた瞬間、先ほどの猛毒で体力が一気に減った！リオルは目眩を起こし倒れそうになるの



を我慢しながら、起死回生の一撃を決めようと頑張る！

この時、黄色かった色が赤色に変わった！

エンニユートはもう一撃で！と空中にいるリオルを斬り裂こうとしたその時！リオルはその迫って来る爪を回し蹴りを使い爪の軌道を強引に変えた！リオルは地面に着地したと同時に拳を振りかぶる！

この時、赤く輝いていた拳はリオルの体力は1割を切り虹色に輝いていた！

「いっけええええ!!!」

リオルは虹色に輝く拳をエンニユートの腹に決めて吹き飛ばした！それと同時に毒が回りリオルは戦闘不能になった。

吹き飛ばされたエンニユートは岩壁に当たるとそのまま地面に横たわり戦闘不能になった。

「回復の薬だ。飲んでくれリオル」

俺は直ぐにリオルに掛けより回復の薬を飲ませた。

「お前達も出てこい。何でも直しで毒を治療する」

俺は直ぐに何でも直しを使い、毒を受けたポケモンを治療した。

そして…

「お前も回復してあげるよ」

俺は主ポケモンのエンニユートも回復の薬を使い回復させてあげた。

「リョウタ……」

「おまえ……」

エンニユートは回復をしてくれた俺を見る。俺の周りには満足げにしているリオル、タツベイ、イーブイ、コイルがいる。

「いいバトルだった。ありがとう」

俺は手を差し伸べ、エンニユートを起こしてあげた。

エンニユートは俺を見ると一度頷き、片膝を地面に着かせもう片方に手に炎のZクリスタルを掲げた。

「ありがとう、エンニユート」

俺はそれを受け取ると皆の前に掲げた。

「炎のZクリスタルGETだぜ」

その瞬間、スイレンとカキから拍手を貰い、リオル達にはハイタッチをした。

そして、エンニユートともう一度握手をした後、ベラ火山から出た。

リオル・レベル31（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

コイル・レベル29

特性頑丈

技スパーク、ソニックブーム、光の壁、ミラーショット  
タツベイ・レベル24（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル25（メス）

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

## ライチ登場

### 20話

ベラ火山から帰る時、海に通りがかった時のスイレンがまた入りたそうにウズウズしていたので行かせてあげた。

今の時刻は既に17時を回っているので他の人達も居なく、貸し切り状態だった。

そのせいもあるのか、スイレンは何も着ずに海に入ってしまった。

だから…目のやり場に困るんだってば…

スイレンは俺も来いと呼ぶので行くことにしたが、そのだな…先ほども言ったが、色々困るのだ…

そのうち慣れると良いのだが…

スイレンは俺が海に近づいて来た時に思いっきり水を掛けて来た！

「うわっ!?!…やったなあああ!」

俺は直ぐに海に入り水をスイレンに掛けてやった！

「やったなあ〜それ〜!」

「おりゃあ!」

俺とスイレンは水を掛け合い夕日が照らす海で楽しく遊んだ。その後、ポケモンセンターの宿泊施設で就寝した。

翌朝、この島のクイーンであるライチの所に行くことにした。

「もう…この島でやることもクイーンを倒すだけだね…」

「そうだな」

スイレンは寂しそうに俺の手を繋ぎながらそう言った。

あゝ楽しかったなあ…

この島の旅も、もう終盤か。

既に木の試練も達成していることは、ポケモンセンターの時に話している。

「島巡りを終えたら、またここに戻って来るね」

「絶対だよ？」

「当たり前だろう？」

「うん♪」

スイレンは笑顔でそう言い、俺の唇へキスをした…

…いい、ま…どこに？

……く……ち？

俺はフリーズしてしまった。

スイレンはちよつと照れくさそうな顔をしながら俺の顔を見る。

「誓いのキス」

だそうなの……

「必ず戻って来てね？」

「ああ」

「必ずだよ？」

俺はスイレンに近づき唇にキスをした。

流石のスイレンもされると思っていなかったらしく、キョトンとしていた。

「誓いのキスだ」

「もう……」

スイレンと俺は、はにかみながら目的地へと歩いて行った。

そしてやって来ましたコニコシティ！

島クイーン・ライチがいる町だ。

この島の最後の試練。

…やっぱり緊張するなあ

スイレンがライチの居る所に案内してくれると言ってくれたので着いていくことにした。

その場所は宝石店。

色とりどりの宝石が店内に飾られていた。

石屋じゃなかったの!?

まあ。宝石も石つちやゝ石なんだが…

その宝石店のカウンターでライチが和やかに俺達を見ていた。

「あらあら〜スイレンにもどうとう出来たのね〜」

「えへへ〜あ、リヨウタが大試練受けたって」

「よろしくお願ひします」

「うん。それじゃあ、支度するからちよつと待つてね〜」

ライチはそう言うと、近くに居た従業員に仕事を任せ、俺達を試練の場所である命の遺跡の舞台まで案内してくれた。

その後、大試練の儀式みたいなのをライチが行った後、試練の内容を教えてくださいました。

試練内容は島クイーン・ライチを倒す事。

実にシンプルでいい！

「試練内容、シンプルでいいでしょ？」

「はい！」

ライチは笑顔でそう言い、ノズパスをボールから出した。  
ノズパスか。

ゲームと一緒になら麻痺を狙ってくるな：

「出てこいコイル。俺達の力を見せてやろうぜ！」

コイルは力強く返事しノズパスを見る。

この勝負、必ず勝ってみせる！

リオル・レベル30（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

コイル・レベル29

特性頑丈

技スパーク、ソニックブーム、光の壁、ミラーショット



タツベイ・レベル24 (メス)

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル25 (メス)

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

## 島クイーン・ライチの大試練

## 21話

島クイーン・ライチの大試練が始まった。

ライチはノズパスを、俺はコイルを出した。

「行くぞコイル！ミラーショット！」

「ノズパス、岩雪崩れ！」

ノズパスが発動した岩雪崩れがコイルの頭上に雪崩れ込んできた！

ツフ：甘いな！俺のコイルはリアル同様、彼奴等を狩りまくったから、努力値は並大抵では無いのさ！

コイルは頭上に突如現れた岩雪崩れの間を縫うように避けて行きながら、無数のミラーショットを撃ち放ち、次々にノズパスに当てていく！

ノズパスはミラーショットを連続で受け戦闘不能になった。

「なんてデタラメな…戻ってノズパス」

ライチはノズパスを戻した後、ガントルを出してきた。

やっぱりガントルか。ライチのポケモンはゲームと一緒だな。

「コイル。まだ行けるな?」

コイルは力強く頷き構える。

「行くわよガントル! ロックブラスト!」

「コイル! スパークだ!」

ガントルは自身の周りに無数の岩石を創り出し乱れ打ちしてきた!

コイルは電気を纏いそれらの岩の間を縫うように躲していきガントルにスパークを当てた!

「そのままミラーショット!」

ガントルが姿勢を整えるよりも早く、コイルはミラーショットを放ちガントルを戦闘不能にさせた。

「コイル: 尋常じゃない強さね。戻ってガントル」

ライチは最後のポケモンであるルガルガンを出した。

出て来たなルガルガン。此奴に勝てば勝利だ!

「最初から本気で行くわ! Z技・ワールド: 「させない! コイル、ミラーショット!」つな!」

俺はライチが構えを取ると同時にコイルに技を命じ、ミラーショットを発射させた! ルガルガンは急な展開で避ける事が出来ずに直撃する。

やってやったぜ！さて、次でラストだ！

「コイル！トドメの…」やり返すわ！ルガルガン、ストーンエッジ！」やり返された…」  
ルガルガンは無数の尖った岩を創り出し発射してきた！コイルは軽く動きながら全ての岩を避けきる。

「なんで当たらないの!?!」

「ルガルガンの攻撃が遅いからです。コイル、ミラーショット！」

「ルガルガン！もう一度ストーンエッジ！」

ルガルガンはコイルの放ったミラーショットに岩をぶつけ、更にコイルを攻撃しようとしたのだが…

「そんなんで相殺出来るとでも？」

俺のコイルは並大抵の育て方してないんだよ！軽く岩を当てたぐらいで相殺出来ると思うな！

コイルが放ったミラーショットはルガルガンの岩を粉々に粉碎していき、そのままルガルガンを攻撃した直後大爆発した！

ルガルガンは大きく吹き飛ばされ、地面に横たわり戦闘不能になった。

「3連勝！良くやったなコイル！」

「お見事としか言いようがないわ…」

ライチが苦笑いしながらルガルガンをボールに戻した後、コイルの身体が光り出し進化した。

「おお！レアコイルか！やったぜ！」

「おめでとう。それと、これが私を倒した証よ」

俺はライチから証を受け取り、握手した。

「ありがとうございます」

「おめでとうくりヨウタ!!」

スイレンはライチとの握手が終わると同時に飛びついてきた！

「おう！やったぜ」

「もう、行っちゃうの？」

「そうだな。午後には出発するよ」

「そっかあ…」

スイレンが寂しそう顔をするので唇にキスをした。

「あらあら～私の前で盛大にいちやつかないでほしいわね…」

ライチは若干怒った感じでそう言い腕を組んだ。

もしかして、ライチさんって彼氏いないのか？

「ライチさん…もしかして？」

「そうよ！私に彼氏なんて居ないわ！悪い!？」

「いい、いえ！」

ライチはプンスカ怒りながら帰って行った。

「あくあく怒らせた〜」

スイレンはそう言うとりヨウタに更にくつつく。

そのだな…スイレンがくつついてくれるのは凄くありがたいのだが。

「スイレン。さつきから当たっているのだが」

「当ててるんだよ？」

「つなあ!？」

スイレンは満面の笑顔でそう言いリヨウタにまたキスをした後、離れた。

「さー行こー！」

「お、おう」

俺はスイレンに手を引つ張られながら遺跡を出て、そのままスイレンの家に行った。

それから午後になるまでスイレンとイチヤコラした後、船に乗りウラウラ島に向け出発した。

…スイレン。良かったなあ。

これで現実世界ではDTだった俺も遂にか…

俺は船のデッキで風に当たりながら考えていると、後ろからバトルを申し込まれたので、受けてやった。

その後、乗っていた船で無双していたのは内緒の話。

リオル・レベル33（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

レアコイル・レベル33

特性頑丈

技スパーク、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

タツベイ・レベル28（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル28（メス）

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

## リオルの回想その2

### 22話

私よ。

え？名乗れって？

リオルよ、リオル！

隙あらばリョウタになでなでして貰う為、ボールからちよくちよく出て来てしまうの

よね…

だって、他のポケモンにリョウタを取られたくないじゃない！

勿論、邪魔してきたら速攻排除するわ。

そうそう。リョウタがね…アーカラ島のマップを見た後、イーブイを手に入れてやる  
よ！

って言った後から4番道路に行き1時間程探したのよ。

だけどね、全然見つからなくて…けど、リョウタは諦めないで更に2時間も探したの  
よ。



それでも見つからないので、私達も協力して探したわ。

その間、色々なポケモン達に襲われたけど、勝手に狩ってしまうのは努力値に影響が出ると思ひ撃退しかなかったわ。撃退の方が大変って、私も大概ね…

それにしても見つからないわね…

私達も協力して探し回ったのに全然イーブイは見つからなかった。

リョウタは最終手段だ！って言い出して、道無き道を進み始めたわ。ちゃんと私達をボールに戻してからだけどね。

その間、リョウタは大変な目に遭ったけど…

急に沼に填まったり…

背丈ほどある雑草の中を彷徨ったり…

一番酷かったのは虫ポケモンの巣窟に入ってしまった時だったわ…

その後、漸く開けた場所に出たら、後に仲間になる色違いのイーブイが丸くなって寝ていたわ！

なんなのよ！私達があんだけ苦労して探してたのに！寝てるですって!?

リョウタは興奮気味だったけど、ちゃんと起こさないように近づこうとした時だった

：

ほんつとうに！誰が邪魔したのよ!!!

後ろから爆音が聞こえイーブイが起きて逃げたじゃない!!

リヨウタが振り返ると、主ポケモンのラランテスがそこにいたわ!

ほんつとう! ムカつくわね! 絶対に此奴の相手は私がしてやるわ!!

リヨウタはラランテスを見ると直ぐに周りを見た。

周りに此奴の仲間がいるか確かめているのね。流石だわ!

その後、リヨウタはイーブイを発見したが、あの雑魚共!!

カリキリ共がイーブイを取り囲んで攻撃しようとしていた。

リヨウタは直ぐにイーブイを助ける為に走り出したわ。流石、愛しの人。

私はリヨウタにラランテスの相手を任せれたわ。

勿論、戦う気MAXの私に足止めなんて生ぬるい事しないわ。狩ってやる!

イーブイの方はタツベイが相手をするみたいだから問題ないわね。

私は襲ってくるラランテスの鎌を避け、発勁を喰らわせる。

此奴、デカいだけで大した事ないわね。動きが遅いから攻撃受ける事もないわ。

私が着実にラランテスを追い詰めていると、仲間を呼び始めた!

面倒くさい事するわね!

リヨウタの方をチラッと見るとイーブイをGETしたらしく、イーブイがリヨウタの

Zリングにクリスタルを填めた!

彼奴！何勝手なことを！！

私は直ぐにリョウタを止めようとした時、イーブイが手助けを発動してリョウタを強化したわ。

なんだ…このイーブイ、分かっているじゃない。

私は私の敵を倒す事だけに集中しますか！

リョウタがZ技を発動し、イーブイの仲間達が集まり、イーブイを強化した後、進化系達も一緒に戦ってくれた。

正直、私達だけじゃ時間がかかるから、大分助かったわ。

その後、2時間ほどかしら？ラランテス共を全滅させる事が出来たわ。

正直、もうクタクタよ…

後から分かったけど、このラランテス。草の試練の主ポケモンだったみたい。

その後は、スイレンと言う女性が湖にダイブした時だった。

あの子、湖から出て来たらなんで何も着ていないのよ！可哀しいでしょ!?!  
リョウタはリョウタで大変な事になってるし!!

色々あったけど、スイレンの試練は簡単で主ポケモンを倒すだけ。しかも水タイプだから、コイルに任せれば大丈夫ね。

案の定、コイルが無双して私とリョウタはラプラスの上に乗って眺めるだけで終わっ

た。

いや、リヨウタに甘えられて幸せだったわ。

試練が終わったらスイレンがリヨウタに告白してきた時はびっくりしたけど、思いを伝えるだけで、リヨウタからは返事を貰っていない。

それもそうよ！リヨウタの相手は私なんだから！

その後、リヨウタがこの島にいる間だけ一緒に旅をする事になったけど、残念ね。

リヨウタの攻略速度じゃ、1日しか時間はないわ。

リヨウタが火の試練を受ける為に向かった町ではバトルロワイヤルって所に参加させられる事になったし：

私が無双したから、どうでもいいけど。

その後、またスイレンがやらかしたわ！

あの子、絶対にリヨウタを惚れさせるためにやってるわね！

直ぐに服を脱いで海に向かって行ったわ！

ちゃんと水着を着ていたけど、リヨウタが何故かガツカリしていた。

あの姿を見たいと思ってしまったのね：

やっぱり、男の子なんだ：

スイレンが軽く遊び終わった後、火の試練に挑み勝つ事が出来たけど、あの主ポケモ

ンのエンニユート…凄く嫌らしい戦法で大分苦戦したわ！

毒よ！毒！しかも猛毒！

吐き気が収まらなくてもう、気分のコンドーションも最悪！

だけどね…仲間達が傷付き毒で犯されていく所を見たく無いと思った後、私…

何かが吹っ切れて、苦しいけども、もう楽になりたいと思っただけでも…

私、頑張ったわ！

起死回生の一撃でエンニユートに勝った時、私の体力も底を尽きて倒れたけど…

バトル後に、リョウタが直ぐに私を回復してくれて、体力を戻してくれた。

今回のバトルで傷付いたリョウタのポケモン達も回復して。

更に、主ポケモンのエンニユートも回復させた。

流石は愛しの人。寛大なお心です。

私達は満足げにリョウタの周りに達、エンニユートを見つめる。

エンニユートも満足げに一度だけ頷き、リョウタを手を取り立ち上がった。

その後、火のZクリスタルを渡して立ち去って行った。

その後の帰り、またスイレンがやかした!!

スイレンは行きに行った海で、今度は何も着ずに遊びに行ったのよ！

リョウタはリョウタで、目のやり場に困っていたし…

ちよっと可愛かったけど。

その後、スイレンがリヨウタを呼び、水をかけた！

リヨウタは何かスイッチが入ったのか直ぐに海に入っただけでいき、仕返しをし始めた。スイレンも更に水を掛けたりして、結局は2人とも海で遊んでね。

リヨウタ。普通にスイレンを見ていたようにも見えたけど……もう慣れたのかな？

色々あったけど、スイレンも一応良いやつだし私達はスイレンとも仲良くした。

そして、この島のクイーンであるライチと戦い、見事勝利した。

ライチとのバトルでは私が活躍すると思っていたのに……まさか、コイルが無双するとはね。

しかも、バトル後に進化して。

まあ、私は進化なんてしないから、レアコイルに頑張つて貰いましょう。

今回、長くなったけど、呼んでくれてありがとうね。

それと、私はリヨウタの事、心の底から好きだから。

間違えたわ。大好きだから。

その所、よろしくね！

## ウラウラ島編

## ウラウラ島上陸！

## 23話

遂に来たぜウラウラ島〜！

あの試練の方は、あまり乗り気ではないが。ゴーストタイプの…

あく！幽霊なんて嫌じやああああ!!!

俺はポケモンセンターでマップを買いながらそんな事を考え、ポケモンセンターを出たときだった。スカル団の連中がマリエ庭園に入って行った。

その中にスカル団を纏めているグズマと言う男も見かけた。

おいおい…

アレは確実に何かやらかすだろ…

俺はスカル団を追いかけマリエ庭園へと入って行った。

マリエ庭園ではスカル団の連中が水中にいるポケモンを驚かせたりして迷惑を掛けていた。

おいおい…

やらかすと言うか、子供のイタズラじゃないか…

俺は戦う気を無くしてしまったので庭園から出ようとした時、スカル団の連中が行く手を阻んできた。

「おいおい！俺達を見てとんずらかか？」

「目が合ったらまずはバトル！」

「ここを通りたければ勝つか金を払え！」

うぜえ！

つてか、勝つか金を払えつて？

勝つに決まってるじゃん。

「んじゃバトルだ。スカル団。俺が勝ったら有り金全て貰うからな」

「ふん！生意気なガキだぜ！」

俺はそのままスカル団の連中と戦い完勝した。

勿論、有り金は全て頂いたぜ。

「お前等どけえ！おい、そのガキ！俺とバトルだ！」

凄く態度のどかい奴が出て来たと思ったら、グスマだった。

「いいけど。俺が勝ったら何かくれる？」

「俺が負ける訳ねえが、もし負けたら俺のアブソルをやるうじやねえか」



「いいの!?!」

「つたりめえよ!男に二言はねえ!」

ラッキー!!!

俺、悪タイプのポケモン持ってなかったから丁度良かったぜ!

「あ、ちなみに俺が負けたら?」

「勿論、お前のポケモンの内1体を俺が貰う」

ああ…

まあ、そりゃあそうだよな。

「わかった。バトルしよう」

「おう!」

グズマが出したのはグソクムシヤ。

やっぱりか…

俺はレアコイルを出した。

「先手必勝!出会い頭く!!」

やっぱり使ってきたか!

「レアコイル!スパークだ!」

レアコイルは電気を纏い、襲ってくるグソクムシヤの攻撃を完全に見切つて回避しスパークを放出させグソクムシヤを攻撃した!

「なあ!？」

「そのまま決めるぞ! ラスターカノン!!」

俺は拳を勢いよく突き出し決めポーズをとつてみた。

レアコイルは輝く鋼の光線をグソクムシヤに0距離から当て吹き飛ばした!  
地面に落ちたグソクムシヤは戦闘不能になった。

「そんなバカなあ!!」

グズマはグソクムシヤをボールに戻し直ぐにアリアドスを出してきた!

「蜘蛛の巣で動きを止めろおお!!」

アリアドスは大きな蜘蛛の巣を放つて来たが…

「レアコイル、光の壁」

レアコイルは光の壁を展開し蜘蛛の巣を防いだ。

「くつそが!!アリアドス、影打ちだ!」

「トライアタック!」

アリアドスの影が揺らめくと同時に、レアコイルは3つの属性の攻撃、トライアタックを発動させた。炎、氷、雷だ。

その内の雷を影の方に発射させ、眩しい光で影をアリアドスの真下だけに留まらせた

！

残りの2属性の攻撃がアリアドスに当たり戦闘不能になった。

「そんな、バカな…」

「2連勝！ 次のポケモンは？」

「もういい。お前の勝ちだ。持っていけ」

グズマはポケモンをボールに戻した後、約束していたアブソルのボールを手渡した。

「本当にいいの？」

「当たり前だ。それか、あれか。自分のボールじゃなきゃ嫌って事か？」

「別に」

「なら受け取れ」

グズマはそれだけ言うと仲間達と去って行った。

何はともあれ新しい仲間を手に入れた。

リオル・レベル33 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

レアコイル・レベル33

特性頑丈

技スパーク、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

タツベイ・レベル28（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル28（メス）

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

アブソル・レベル23（メス）

特性プレッシャー

技電光石火、アイアンテール、噛み付く、燕返し（つばめがえし）

# 雷の試練

## 24話

さて：恒例の特訓コースやりますか！

今回は圧倒的にレベル差を感じるアブソルだ。

基礎能力は普通に良いと思うのだが、努力値稼ぎで更に底上げをする。

つと言う訳で、引き続きマリエ庭園に留まりやりました、やりました！

攻撃&素早さの特訓3時間コース！

いや〜もう慣れましたわ。俺の厄災？ハプニングの嵐！

最初にアローラニヤースを狩りまくる事1時間。

事態はもう起こりましたよ！アリアドスの大群&トサキントが湖から連携攻撃して

きたんですよ！

アブソルの電光石火で全て躲しながら燕返しも使い、アブソル無双しましたけどね。

いや〜やつぱ大群相手は儲かります稼げます！努力値祭り最高ですね！

アブソルのレベルは23だったのですが、なんと！レベル29にまで上がりましたよ

！

やっぱ、この特訓方法は最高ですね！

最初の方はバテ気味だったアブソルを限界突破させ、3時間コースを終わった後、更に襲い掛かってくるポケモン共は流石にリオル達に任せましたが。

その後、頑張ったアブソルをベタ褒めするとアブソル。俺に超懐きました。リオルは先に俺に甘えてましたがね。

貰ったポケモンでも、懐いてくれて嬉しいです！

アブソル。メスだそうな：

俺の手持ちポケモン。レアコイル以外メスって！

いや、別にいいんだけどね!?

何故かメスに偏ってるなあ〜って思っただけですよ。

アブソルの特訓が終わった後、ホクラ二岳（だけ）に向かう最中、やっぱり挑んでくる雑魚トレーナー共。

育成結果を見るために全てアブソルで戦った結果。やっぱり無双でしたわ。殆どが電光石火だけでやられるので面白くなかった。

そしてやって来ました！ホクラ二岳！

ここの天文台に雷の試練があるので、その担当者を探していると、ゲームと一緒に本当にマーマネがやっていたよ。

こんなに小さい子でもキャプテンなんだな。それを言ったらお終いか？

マーマネは快く試練を受けさせてくれた。

試練内容はクイズを解き、正確していく事。全問正確した後主ポケモンと戦う。ゲームとまんま一緒じゃないか！

って事で、クイズは簡単過ぎたのでサクツと終わらせ、主ポケモン登場！

主ポケモンはクワガノン。

やっぱ、主ポケモンだけあってデカいわ〜

俺は久しぶりにタツベイにも頑張つて貰う為、戦闘に出した。

「行くぞタツベイ！」

タツベイは力強く頷き構える！

並大抵の育て方をしていない俺のポケモン。

ある程度の速さなら全て止まっているように見えるようになっていて、強ポケモンだぜ！

さ〜て！タツベイにも無双してもらおうぜ！

クワガノンは開始早々、仲間を呼び出しデンヂムシを呼び出したが、タツベイのシャドークローで出て来た瞬間狩り取った。

クワガノンは仲間が倒されて激昂しスパークを発動させて突っ込んできたが、タツベイの石頭で頭突きを喰らわせ、逆に怯ませた。

トドメにシャドークローで斬り裂いたが、意外としぶとく耐えきったので、反撃が来る前に龍の息吹でトドメをさした。

クワガノンを倒した後、タツベイはコモルーに進化した。

「完封勝利！&コモルー！進化おめでどう!!！」

俺はコモルーをなでなでしながら勝利を喜びあつた。

「凄く過ぎて何も言えないよ…とりあえず電気Zのクリスタル渡すね」

「おう！」

俺達は電気Zを受け取りホクラニ岳を下りて行つた。

「あの人…強すぎだよ」

「まあまあ、アレはもう人外。ポケモン達はあるの人に育てられ、鬼の育て方をされているんだらう。普通のトレーナーと違いポケモンが強すぎる」

「そうだね…ねえ知ってる？あの人、島巡り開始してまだ5日目らしいよ」

「なんて事だ…」



マーマネとマーレイン博士は苦笑いしながら下りて行ったりヨウタを見ながら話していた。

リオル・レベル33（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

レアコイル・レベル33

特性頑丈

技スパーク、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

コモルー・レベル30（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル29（メス）

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

アブソル・レベル29（メス）

特性プレッシャー

技電光石火、  
アイアンテール、  
辻斬り、  
燕返し（つばめがえし）

## ゴーストの試練

## 25話

雷の試練を終え、コモルーの防御力を鍛える為、ホテリ山まで歩いてきました。  
いや〜やっぱ、ホクラニ岳からだと言わいねえ！

その道中、何度も雑魚トレーナーに挑まれては倒す事をしていると、ケンタロスがボールから出て来た。

ケンタロスが俺に乗れてジエスチャーしたので、ホテリ山まで乗せて貰った。  
忘れてたわケンタロスの事！そう言えば居た！居たんだよ！

今までずっと歩いていたけど、ケンタロスに乗れば速かったじゃん！  
俺のバカ〜!!

ホテリ山に到着した後はコモルーの防御上げの楽しい特訓コース2時間を開始した。  
倒した相手はイシツブテ、ゴローンだ。

てか、普通さ…ゴローンなんてゲームじゃ出なかつたはずなんだよ！

でもさ、イシツブテを狩りまくってたらゴローンが山の上から大量に転がって来たんだよ！死ぬかと思つたわ！

レアコイルが光の壁で片方を防ぎ、もう片方はコモルーが頭突きでゴローンを逆に吹き飛ばした。

普通にびつくりしたよ！コモルーがああゴローンを吹き飛ばすんだよ！？

あの重たい石の塊だよ！？目が点になったわ！

その後、ちゃんと2時間まで特訓をしてね？さっさと山を出たよ。

だってさ…デカイ地響きがしたんだよ…

立って入れなくなるぐらいの…

時間は2時間になった時だったからさっさと山を下りて振り返ると、意味分かんない

：

ハガネールが出て来たんだよ！

いや〜たまげたわ〜

とりあえず、防御の努力値は稼げたので、頭突きの強化完了！

レベルの33にアツプだぜ！

思念の頭突きを覚えるのは35の時だったから、後もう少しだったんだけど。

その後はカプの村に立ち寄りポケモンを回復させた後昼ご飯を食べた。

いや〜こここのコックは何故こんなにも美味しい料理を作れるんだ！

え？元々3つ星レストランのシェフ？

納得のいく美味しさだわ。

だってさ？金額もお高いお高い！一品5000円からだったから！

昼飯を食べ終わり、外に出ると何故かアセロラがいた。

「ご飯食べ終わったみたいだね」

一応初対面だし名前を聞いておくか。

「君は？」

「私はアセロラ。一応、キャプテンをしてるよ」

やっぱりキャプテンのアセロラか。

…ゴースト（幽霊）のあの試練を受けるのか…

「君を迎えに来たんだけ」

「試練のため？」

「うん。それじゃあ行くよ」

「おう」

アセロラはリョウタを連れてスーパーメガ安！の跡地に連れて来た。

うわあ…実際に見ると確実にいるだろうと思わせる廃墟だよ…

夜に來なくて良かった。

アセロラは試練内容を教えると本を読み始めた。

試練内容は中にいる主ポケモンを倒す事。

だけしか教えられなかった。

ちよつと!!それぐらい分かってたけど!ね!?

観念して早く行けって?

わかったよ…

俺は廃墟の扉を開くとギギギって音が…錆びすぎ!

中は蜘蛛の巣やら散らかり放題の品物やらがあった。

もう嫌!帰りたい!けど、試練なんだよなあ…

俺は1歩1歩歩いていて、後ろから風が吹いた。

「ヒィ!?!」

後ろを振り替えと何もいない…

俺は恐る恐る前を見ると…何も居なくてホツと一息ついたその瞬間!目の前にゴ—

ストが現れた!

「うわああああああ!!!」

俺は悲鳴を上げながらス—パーをダツシユで走り抜けて行き、一番奥の扉の所まで来

てしまった。

後ろを振り返るのは怖すぎて前しか見れない…

俺は恐る恐る扉に手を伸ばした瞬間、扉が勝手に開き…

『ハーイーレー』

幽霊が俺を呼び、や、がった…

俺の体は何か操られているかのように自動的に奥の部屋に入っていく。

俺は必死に抵抗するが全くの無駄だった…

奥の部屋は小さな絵があり、それ以外何も無い部屋だった。

『オマエモ…ワレラノーナカマニ…ナルノダ!!』

その声が聞こえた瞬間！主ポケモンのミミツキユが襲い掛かって来た！

俺が悲鳴を上げた瞬間、ボールからアブソルが出て来て辻斬りでミミツキユを斬り裂

いた！

その瞬間、ミミツキユの顔が90度以上曲がった…

「ギャアアアアアア!!」

俺はアブソルに戦闘を任せたといい、アブソルを信じ待つ事にした。

アブソルはミミツキユを睨み付けると、襲い掛かって来た！

アブソルは燕返しを発動して下から一気にミミツキユを斬り上げるとミミツキユは空中で体制を整えシャドークローで襲い掛かる！アブソルは辻斬りを発動しシャドークローを避けながらミミツキユを再び斬り裂き、そのまま壁に叩き付けた！

ミミツキユは壁に埋まり身動きがとれなくなつた後、アブソルを睨み付けシャドーボールを放つて来たが、辻斬りで斬り裂かれる。

アブソルはそのまま近づき辻斬りでトドメをさした後、ミミツキユは空気のように消えていった。

その場所にはゴーストのZクリスタルが落ちていた。

アブソルはリヨウタに近づき、口に啜えて運んできたクリスタルをリヨウタに渡した。

「アブソル。ありがとう!!!」

リヨウタはアブソルに抱きつき鳴き出した。

だつてさ！ゲームなら別に大丈夫だけど！

現実で幽霊なんて出て来たら…怖すぎて無理!!!!!!

俺はアブソルに助けられながら廃墟から出た。

「あら？そのクリスタル。終わったのね」

「お、おう」

「泣いたんだ」

「しょうがないだろ…」

俺はアセロラに軽く文句を言って、ポケモンセンターに向かった。



いや〜廃墟から絶叫が聞こえまくるこの快感！

大好き！もう、たまらない！もう一度連れて行きたいわあ

アセロラは密かにそう思い、次いつ連れてくるかを考えていた。

リオル・レベル33（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

レアコイル・レベル33

特性頑丈

技スパーク、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

コモルー・レベル30（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル29（メス）

特性適応力

技手助け、電光石火、スピードスター、シャドーボール

アブソル・レベル30 (メス)

特性プレッシャー

技電光石火、アイアンテール、辻斬り、燕返し (つばめがえし)

## 地獄の特訓・・・

## 26話

無事に帰って来ましたポケモンセンター！

もう廃墟なんて行きたくない！

まだ時刻はお菓子の時間の3時過ぎ…

もうそんなに経っていたの!?

いったい廃墟で何時間居たんだ…

ポケモンを回復させた後、ここですることはそう残っていないので島キング・クチナ

シに会いに行くことにした。

場所は既にアセロラから教えて貰っている。

17番道路にある交番だ。

やっぱりクチナシのおっさんは交番にいるのか。

じゃあ…やっぱりポートタウンにスカル団のアジトが有りそうだな。

その前にもう一度俺のポケモンを鍛え直しておくか。

今日は半日コースだ！

と言う訳で、やって来ましたウラウラの花畑!!

ここで半日、ずっとポケモンと戦い続けました。

いや〜どこに行っても特訓しているとハプニングが起きるものですね。

今回はアブリボンとアリアドス狩りをしていると、いや〜来る奴はとことん来るんですね! ハガネールよ!!!

普通、ここに出てこないぞ!?

更に、このオドリドリ! 仲間をひたすら呼ぶわ呼ぶわ!

お前等はクルペッコかつちゅうねん!!

至る所からポケモンが出て来て襲ってくるし!

ハガネールは凄いい大暴れするからリオルでノックアウトさせたが:

まあそのおかげもあってか、半日で努力値はもうバカスカ上がりまくり、俺のポケモンは全て素早さ特攻させくの、ポケモンに合わせて攻撃より特攻よりのコモルーに限っては面白い事したので防御も振り:

いや〜半日と言わずに1日コースでも良いかなって思ったりもしたけど、嫌われたくないから止めとこ:

特訓が終わった俺のポケモンは地面に横たわっていた。

一度ポケモンセンターに戻ってポケモン達を回復させた時にはもう夜になっていた

が…

「お前達。体力は回復したな？もう一回行くか！」

俺は凄く良い笑顔でそう言い、15番水道で朝までひたすらポケモンを狩りまくった。

海だと陸地では限界のある筋力増加も海の力で更に引き出すためにここを選んだ。

そして、俺のポケモン達は元々凄く速い素早さを誇っていたが、それは努力値をひたすら上げた為であり、今回は筋力その物を上げまくり、更に俺自身の体力、筋力など様々な特訓をして…俺達は限界突破を果たした。

…と言うか、お腹が空きすぎて集中力が皆、途切れ始めたので終わる事にしたのだ。いや〜やつぱ海の力もとい、水の力は凄いわ！

普段鍛えられない筋力を鍛え、更にポケモンを狩っているので、努力値も稼げ一石二鳥！

リオル・レベル43（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

レアコイル・レベル43

特性頑丈

技放電、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

コモルー・レベル40（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル39（メス）

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、スピードスター、シャドーボール

アブソル・レベル40（メス）

特性プレツシャー

技サイコカッター、アイアンテール、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

## 島キング・クチナシの大試練

## 27話

さてさてさくって！やっ来て来ました！7番道路！

クチナシのおっさんがいる場所だ。

いや〜それにしても速かったな。1週間でここまで来たぜ！

そして、俺はクチナシに試練を申し込んだのだが…何故断る!?

え？お前にはまだ、俺の試練を受けるには速すぎる？

試練を受けたければ、隣にあるポータタウンにいるスカル団を壊滅させてこいだあ!?!  
やってやろうじやねえかああああ!!

と…言う訳で！

いや〜暴れましたよ〜

俺のポケモン達がりミッター解除したのか、スカル団のポケモン達を全て一撃で沈めた。攻撃させる前に攻撃してね。

奥の家で寛いでいたグズマなんて、家から出て来たしな！

それで、またグソクムシヤと戦ったが、まあ…しようがないよ。

リオルがグソクムシヤの出会い頭で攻撃されるよりも早く電光石火でグソクムシヤをKO!させたからな。

1日特訓コースが凄く活かされてるわ。

ポートタウンに居たスカル団の連中は僅か30分で、いやそれよりも早く片付いていた。

その後、クチナシのおっさんの所に行った時の時間が30分だな。

流石に驚かれたわ：

で、試練を受けさせてくれたんだけど：

クチナシのおっさんってこんなに弱かったっけ？

クチナシの最初のポケモンはヤミラミだったんだ。それは別にいい。

俺はまだ大試練を経験していないイーブイを出した。

そして、バトル開始早々にクチナシのおっさんが定番の猫だましを使ってきたんだが、俺のイーブイ、怯まなかったんだよ：

これには俺もクチナシも驚いたよ。

更にイーブイは、いつの間にか覚えていたアイアンテールでヤミラミを上段から尻尾を叩き落としてヤミラミを一撃で倒した。



「凄じくないかイーブイ！」

イーブイは可愛い鳴き声をあげて返事をしてくれた。

クチナシは何も言わずヤミラミを手持ちに戻しながら少しボールを見つめていた。

「はあ……これはヤバいな。ワルビル出番だ」

クチナシはワルビルを出すと直ぐに、地震を発動させた！

イーブイは地震の最小限しか揺れていない場所に移っていきながらワルビルに接近する！

「アイアンテールだ！」

イーブイは尻尾を鋼鉄化させワルビルの頭に勢いよくアイアンテールを叩き込んだ！

ワルビルは一撃で倒された。

「はあ……地震の攻撃を見切るか……」

クチナシは呆れながらワルビルを手持ちに戻した後、アローラのペルシアンを出した。

「俺の最後のポケモンだ」

「速攻で倒します」

「俺もだ。ペルシアン、Z技・ブラックホールイクリプス！」

クチナシはZ技を発動しようとポーズを取りだしたが…

「電光石火だ!」

イーブイはZ技を発動しようとしているペルシアンよりも先に攻撃を当て軽く突き飛ばす。

「そのままアイアンテールだ!」

イーブイは鋼鉄化させた尻尾をペルシアンの真下から叩き上げ吹き飛ばした。

ペルシアンは地面に横たわり、戦闘不能になった。

「おいおい…Z技中は攻撃しないでくれよ」

「勝つためです。Z技は隙が多いので、それを補えるようにならない限りあまり使いた

くはないですね」

「そうか」

クチナシはペルシアンをボールに戻した後、悪のZクリスタルを渡した。

「いつか、使う時が来るだろう」

「はい。その時は決めてやります」

クチナシはリョウタと握手を交わした後、去って行った。

その後、グズマが戻って来て一緒に来て欲しいと言ってきた。

場所はエーテルパラダイス。

なんでも、ルザミーネと言う女性が何かを企んでいるみたいだ。  
多分ウルトラビーストだな。

ゲームと違い、グズマのこの慌てぶり：何かあったのは違うのか。  
俺はグズマの、スカル団の船に乗り込みエーテルパラダイスへと向かった。

リオル・レベル43（メス）

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

レアコイル・レベル43

特性頑丈

技放電、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

コモルー・レベル40（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル40（メス）

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル40 (メス)

特性プレッシャー

技サイコカッター、アイアンテール、辻斬り、燕返し (つばめがえし)

## ウツロイド登場！

## 28話

さてやって来ましたエーテルパラダイス！

本当に白い建物だなあ…

しかも規模がデカイ！

俺はグズマと共にエーテルパラダイスに入ると受付で止められた。

「俺の相棒だ。通せ」

「畏まりました」

グズマがそう言うのと受付の人は通してくれた。

グズマって以外と凄い人なのか？

それと、この頃天の声聞かないなあ

(説明しよう！が言えなくて寂しいぞ) by 天の声

俺はグズマとそのまま奥の方に行き、庭園へと出た。

そこにルザミーネがザオボーと一緒に待っていた。

「ようこそ、我がエーテルパラダイスへ。私が代表のルザミーネです」

「俺は支部長のザオボー」

「俺はリヨウタ」

俺も名乗り、グズマを見る。

グズマは俺に、ルザミーネが今からする研究の協力者になって欲しいと言ってきた。

その研究内容は、ウルトラビーストを出現させる事。

そのウルトラビースト、略してUBを捕まえ生態調査をするのが目的だと説明された。

やっぱUBか。

ゲームでしか見てないし、多分、此奴等のポケモンじゃ彼奴等には勝てないだろうな。

俺は研究に協力する代わりに、何か貰えるかを聞いた。

そしたら、捕まえたUBの研究が終われば俺にくれると言ったのだ。

これは嬉しい！是非協力しよう！

俺は2つ返事で承諾した。

その後、研究員達が庭園の一番広い場所で作業を始めた。

「とうとう、これで…」

ルザミーネがそう呟き、研究員達を見た後手を前に翳し開始の合図を送った。

研究員達は機械を作動させ、1点の場所に光線を放ち続けると…ウルトラホールが出

現した！

「遂に！遂に来るのね！」

「俺の研究の成果よ！来るのだ!!」

ルザミーネとザオボーは興奮しながらそう言い、グズマも俺も何も言わないが凄く興奮している。そして遂に：

ウルトラホールからUBのウツロイドが姿を現した!!

これが生で見るウツロイド：

本当にクラゲみたいな姿なんだな。

ウツロイドに目があるかは知らんが、俺を見るとパワージェムを放って来た！

「出てこいレアコイル！光の壁！」

俺は直ぐにレアコイルを出し光の壁を発動させ技を防いだ。

「ラスターカノン！」

レアコイルはラスターカノンを放ちウツロイドを攻撃して吹き飛ばした！

「リョウタ君！このボールが研究に研究をか…」説明はいいから早くボールを！」わかったわ！」

俺は長くなりそうな説明を強引に終わらせ、ボールを貰った。

「レアコイル！彼奴から一度距離を取れ！」

レアコイルが直ぐに距離を取った瞬間、レアコイルが直前まで居た所に触手が襲ってきた!

ウツロイドは激しい鳴き声を上げるとレアコイルに迫って来る!

攻撃を躲された事が相当悔しかったみたいだな。

「レアコイル! 放電!」

ウツロイドがレアコイルを飲み込もうと大きく体を広げた瞬間、放電を発動させウツロイドに大ダメージを与え地面に落ちた。

俺は直ぐにウルトラボールを投げウツロイドをGETした。

「終わった…」

「「おおおおお!!!」」

俺がウツロイドをGETした後、研究所の人達、ルザミーネ含めみんなが歓声をあげた。

「良くやったわりヨウタ君!」

「君のおかげで研究がはかどるよ!」

「良かったです」

俺はレアコイルにお礼を言いながらボールに戻し、ウルトラボールをルザミーネに渡した。



「リヨウタ君。この支部の幹部になってくれないかしら？」

はい？ 幹部？

いやいや！それはねえ？

「すみませんが、お断りさせて頂きます」

「そう？ 残念だわ」

ルザミーネはそう言うと、またねと言い研究員達と立ち去って行った。

「幹部ならなくて正解だぜリヨウタ」

急にグズマから声を掛けられたんだが、幹部ならなくて正解って？

「どういう意味ですか？」

「幹部って役職を付け、扱き使うのがエーテルパラダイスだ。俺も一応幹部なんだぜ」

「そうだったんですか!？」

「ああ…もうヘトヘトだがな。ルザミーネの笑顔を見ると頑張ろうって気持ちになれるんだ」

「好きなんですな」

「ああ…って何を言わせやがる！」

「貴方が勝手に言っただんでしょ!？」

俺はグズマと喋りながらエーテルパラダイスを出て船に乗った。

「次はポニ島だろ?送っててやるよ」

「ありがとうございます!」

グズマって、結構優しい性格してた!

むしろ:エーテルパラダイスの関係者になってから悪者になったりして:  
俺はグズマにポニ島に送って貰う間、色々考え事をした。

リオル・レベル43 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

レアコイル・レベル43

特性頑丈

技放電、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

コモルー・レベル40 (メス)

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル40 (メス)

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル40（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、アイアンテール、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

## リオルの回想その3

## 29話

リオルよ。

今回はちゃんと先に名乗ったからね！

さて、遂にやって来たウラウラ島。

まさか、着いて早々にリョウタがスカル団と戦うとはね。

しかも、グズマって言う明らかに偉そうな奴！え？雑魚はつて？

別にいいじゃない。雑魚の事を話しても面白くないでしょ？

まあグズマって人もそこまで強くなかったから、言わなくても良いと思っただけね。

グソクムシやってポケモン知ってる？あのクソ生意気な虫！

出会い頭って技で先手狙ってくる嫌らしいポケモンよ！

まあ…私達は鬼の訓練を受けているから、普通の特訓を受けているような者達に負ける訳ないわ！

今回、私は戦わずにレアコイルが戦っただけだね。いや〜面白かったわ。

あのレアコイルが出会い頭を避けるんですもの！更にそこから反撃の嵐で倒すって

!

もう笑っちゃったわ!

あらいけない、はしたない。リヨウタにこんな所見られたら嫌いになられちゃう!

落ち着いて私!スーハー×3

あくそうそう!グズマを倒した後、アブソルが仲間に加わったわ。

勿論、その後は新人さん大歓迎祭り(鬼の特訓)が始まってアブソルが大分お疲れになつていたけどね。

その後、ホクラニ岳つて所で雷の試練をしたわ。

今回も私の出番はなく、タツベイが出たけど、まさか:あんなに硬い頭だなんてね:

主ポケモンのクワガノン。あの石頭に負けたんですからww

ダメよ私!笑っちゃダメww

とりあえず石頭のタツベイは置いといて、リヨウタ。幽霊が嫌いだね:私も嫌いよ!アブソルが大活躍したわ。なんで怖くないのよアタタ?

え?グズマの所に居た時からそう言う所に行かされてた?あくドンマイ。

まあそのおかげでリヨウタは知らない間に試練が終わって助かったけどね。

私は怖すぎて目を閉じてたから内容知らないわ。

試練の後はまだ:地獄だった。

リョウタがね…私達を1日地獄特訓コースをさせたのよ！この鬼く！

前半は陸上で…後半はもつとしんどかった海！

海はほんつとうに大変だったわ！陸上と違って使う筋肉が違うから最初、上手い事泳げなかったのよ！アブソル、イーブイ、更には進化出来たコモルー達も、もう必死で最初に泳ぎを頑張ったわ。勿論私も！レアコイルは飛んでいるからと思つて油断していたみたい。

リョウタが引き釣り込んだのよw

あの時のレアコイルの慌てぶりは皆が笑ったわw

ま…そのおかげもあつて、私達は普段使わない筋肉も強化されて全体的に強くなれたわ。

そして、ウラウラ島の島キングのクチナシ！

あの人、リョウタと戦いたくないからつて、スカル団と相手させる事ないじゃない！  
まあ、リョウタが直ぐにスカル団の所に行ったから、スカル団の相手してあげたけどね。

私達の強化された力で蹴散らしてやろうじゃない！

つて事で、あつさりスカル団を倒した後、グズマも倒したわ。

もう、私達の素早さ…並大抵のポケモンだと止まつて見える程になったからね。

時々、野生のポケモンのハズなのに、めっちゃ強い個体いるときは凄く楽しいバトルが出来るので嬉しいわ。

挑んでくるトレーナーは今の所、話しにならないわ。

その後にクチナシと戦ったけど、いつになったら私を戦わせてくれるの!?

クチナシとのバトルはイーブイがしたのよ!

思ってたより強かったから少し驚いたけどね。

クチナシの最初のポケモン、ヤミラミだったのよ。

そのヤミラミをイーブイがアイアンテールで一撃で沈めた。

しかも、初手で猫だましを使われていたのに怯みもなかった。流石にびっくりよ:

その次のワルビルのバトルでは、地震を使われていたけど、最小限の揺れの場所を把握してダメージをほぼ受けずにアイアンテールで沈める。見事だわ。

最後のポケモンとしてペルシアンが出て直ぐにZ技を発動されそうになっていたけど、これも電光石火で吹き飛ばした後、アイアンテールで沈めると言うコンボ技。

あれを決められたら防ぎようないわ。

その後、グズマが戻って来てリョウタをエーテルパラダイスに連れて行った。

UBってポケモンを捕まえる為みたいだけど、どれほど強いのかしらね?

そして出て来たUB。クラゲみたいな姿の奴の相手はレアコイルだった:

まさか、リョウタは私をバトルに出さないようにしているのかしら？

怪我をさせない為？もしそうだったら、なんて優しい！

レアコイルの戦闘は圧倒的。UBが奇襲を仕掛けて来たけど光の壁で防いでからの攻撃で相手は何も出来ずにGETされる。

まあ、ただ浮いているだけの相手に私達がやられ訳もないけどね。

今回の出来事はこれぐらいかしら？

そろそろ、私もバトルしたいんだけどなあ…



## ポニ島編

## ポニ島上陸

## 30話

さてやって来ましたポニ島！

グズマに海の民の村に送って貰いました。

俺はいつも通りポケモンセンターでマップを買い、島クイーン・ハプウに会うため海の民の村を出発した。

とりあえずはポニの古道を目指して歩く事にした。

それまでの道中でまたまた雑魚トレーナーから挑まれては返り討ちにして行つた後、何故か野生のポケモンの群れに遭遇した。

しかも相手は、グランブル：

いや〜普通に恐ろしいし、雑魚トレーナーよりも野生ポケモンの方が格段に強いんだよ…

俺はリオルでグランブルの顎を攻撃してKO！させるつもりだったが、いやはや…この島のポケモン達はタフだわ。

全然倒れないし、群れのグランプルは弱った仲間を庇う戦い方するし、その間にオレンの実やらを食って体力回復させて再び戦うし…

流石にリオルだけじゃ厳しそうだったから、アソルも出して戦い約2時間…

グランプルの群れを狩り終える事が出来たけど、ポケモンを回復させる為にポケモンセンターに戻るハメになった。

その時、女医やどうでも良いトレーナー共から感謝された。

なんでも、俺が倒したグランプルの群れは、ポニの古道に行く者達を邪魔していたみたいだ。俺にお礼を渡そうとしてくる者達が大勢いたが、俺はそれらを受け取らず、ポケモンが回復すればそれで良いと言った。

…まさか、それで更に人気？に拍車が掛かるとは思わなかった。

一生着いて行きますって言う人も出て来たし…流石に断ったよ!?

俺にはスイレンがいるし。

…俺はこの先のストーリーを知らない。

何がどうなるのかも知らないし、頑張つて島巡りを終わらせよう。

俺はポケモンセンターを出て再び、ポニの古道に向けて出発した。

流石にもう、グランプルの群れは居なく、挑戦してくるトレーナーも居なく、更には

野生のポケモン達からも襲われなかった。

少しぐらい襲ってくれてもいいのに……返り討ちにしてあげたのになあ

俺は何事も無く道を進んでいきポニの古道に到着した。

そこにある古い遺跡後らしき物の近くにハプウが居た。

俺はハプウに声を掛け、試練に挑戦したい事を伝えると、彼岸の遺跡（ひがんのいせき）に行き、儀式をしたいと言われたので着いて行く事にした。

場所はある程度分かるが、この島に1番詳しいのはクイーンであるハプウだからな。

彼岸の遺跡は海が一番近い洞窟にあり、螺旋状の階段を下りていくと広い部屋に出たが、その足場が所々壊れていた。

「前にスカル団の連中が悪さをしてのお……足場が危険過ぎて修復出来ていないんじゃない」  
「俺に任せてください」

俺はポケモン達を出すと、一度外に出て海岸にある岩をリオルに砕いて貰い、イーブイとアブソルに貝殻を集めて貰った。それ以外にも色々と材料を調達しコンクリートの材料を揃えた。それと、ある程度の大きさに砕いた岩と、作ったコンクリートの材料を遺跡に持っていく、半日ばかりで遺跡の足場を修復した。

「お主……凄いな」

「色々とバイトしていたので」

「バイト？」

「あくお仕事です」

「その若さで仕事とは、凄いの！」

ハプウはそう言つて俺を褒めてくれた。

後、コンクリートが乾くまでは通れないので、一度遺跡を出てハプウの家で休憩することになった。

外は既に暗くなつており、そのままハプウに家でお世話になることになった。

その日の晩ご飯は凄く豪勢だった。

なんでも、遺跡を修復してくれた感謝だそう。

リオル・レベル46 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、起死回生、まねっこ、発勁

レアコイル・レベル43

特性頑丈

技放電、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

コモルー・レベル40（メス）

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロー

イーブイ・レベル40（メス）

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル44（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、アイアンテール、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

## 島クイーン・ハプウの大試練

### 31話

翌朝、ハプウと共に彼岸の遺跡の行き、足場が完全に修復されている事を確認した。

ハプウはお礼を言い、そのまま俺と一緒に奥の部屋にある祭壇に行き、儀式をしてから遺跡を出た。

「これでハプウさんの大試練受けますよね？」

「そうじゃな。では、私を倒せば試練達成といこうじゃないか。私は4体のポケモンを使うぞ」

「わかりました！ちなみに俺は5体です」

「わかったのじゃ」

俺とハプウは十分バトルが出来る広さの場所に移動して、大試練を始めた。

周りは何も無い本当に広々とした場所だ。

森が近くにあれば良かったんだが…

ハプウとのバトル。

必ず勝って島巡り終了だ！

4つの島の証を持って帰ってスイレンに早く会いに行こう！

俺はこのバトルに必ず勝つと心に決めて腰のボールを掴んだ。

「私の最初のポケモンは、出ておいでダグトリオー！」

ハプウの最初のポケモンは、アローラのダグトリオ。

「リオル。頼んだ！必ず勝つぞ!!」

リオルは力強く頷き、構えた。

「ダグトリオ、地震じゃ！」

「リオル、躲してまねっこ！」

ダグトリオは地震を発動させ辺り一面を襲うが、リオルは空中に高く飛び、技をコピーした。

「まずい!!ダグトリオ、トライアタックじゃ！」

「もう遅いですよ！リオル、いつけえええええ！」

リオルは地面に着地し地震を発動した！

ダグトリオに大ダメージを与えたと思ったが、直前に放っていたトライアタックが地面に当たっており、地震の規模を最小限に抑え威力を軽減していた！

「リオル！電光石火で距離を詰めろ！」

「アイアンヘッドで迎え撃つのじゃ！」

リオルが一気に加速しダグトリオに距離を詰めると同時にダグトリオは頭を硬化させ迎撃態勢に入った！

「そのまま発勁だ！」

「なんと!？」

！  
リオルは電光石火のスピードを乗せた発勁をダグトリオに当て大きく吹き飛ばした

ダグトリオは地面に落ちると同時に戦闘不能になった。

「凄いのお……」

ハプウはダグトリオをボールに戻すとフライゴンを出した。

フライゴンか……空中で移動されるのはキツいな……

「リオル、このまま戦うが、目を閉じて波導で戦うぞ」

俺はリオルにそう言い、目を閉じさせた。

「ふむ……リオル特有の戦法じゃな。では、行くぞ！フライゴン、砂嵐じゃ！」

「リオル、電光石火だ！」

フライゴンが翼を羽ばたかせると同時にリオルはフライゴンの羽に拳の一撃を叩き



込んだ！フライゴンは砂嵐を無理矢理発動させ飛び退こうとしたその時！

「発動!!」

リオルの発動が飛び退こうと頭を少し下に移動させたフライゴンの顔に直撃した！

フライゴンは1回転して地面に倒れ込んだ！

「フライゴン！その場で大地の力！」

「させるな！発動でトドメだ！」

フライゴンが大地の力を発動させようと力を入れた瞬間、リオルが発動を喰らわせ戦闘不能にさせた。

「リオル！その場から直ぐに離れろ!!」

リオルは俺の指示に従い直ぐに飛び退こうとしたその時だった！

「もう遅いのじゃ」

フライゴンが既に大地の力を発動しており、その力が放出されたのだ！

リオルはその力の放出に巻き込まれ大きく吹き飛ばされた！

「リオル!!!」

俺は落ちてくるリオルに向かって走りキャッチした。

「大丈夫かリオル!?!」

リオルは戦闘不能にはなっていないが、多大なダメージを受けてしまっていた。

「一度休んでくれ」

俺がリオルをボールに戻そうとした時だった。

リオルはボールを拒みそのまま戦おうと再び立ち上がってくれたのだ。その時、見たことがない現象が起こった。

リオルから波導の力が溢れ出し、リオルの耳が揺れていた。

この力は、いったい？

「リオル。俺の声は聞こえるか？」

リオルはしっかりと頷き、答えてくれた。

ハプウもこの現象は初めてだったらしく、フライゴンを手持ちに戻した後、待っていてくれた。

「お待たせしました。俺はこのままりオルで戦います」

「ふむ。では、行くぞトリトドン！」

ハプウがトリトドンを出し技を命じる！

「濁流！」

「電光石火！」

トリトドンが波を起こそうと体を仰げ反らす時だった。

リオルは今までによりも更に速い速さで、トリトドンを攻撃して吹き飛ばしていた！

リオルの青い波導は線を描いていた。

この強化状態。先ほどの大地の力で目覚めたのだろう…

リオルは拳同士の隙間に波導を凝縮した。波導弾だ！

「覚えたのか！」

リオルは頷きトリトドンを見る。

「波導弾発射！」

「濁流」

トリトドンはしっかりと濁流を発動させ波を発生させた！リオルは波導弾を撃ち放ち濁流に攻撃した瞬間、波導弾が破裂し濁流を掻き消した！

「なあ!？」

「凄いぞリオル！電光石火でトドメだ！」

リオルは青い線を残し、トリトドンに拳を当てそのまま吹き飛ばして戦闘になった。

「これは…凄すぎるのお…」

ハプウはトリトドンを手持ちに戻して、最後のポケモンを出した。

「最後のポケモンじゃ！行くぞバンバドロ！」

「リオル！俺達の力、ハプウさんに見せてやろうぜ！」

ハプウと俺は同時にZ技のポーズを取り…

「バンバドロ！」

「リオル！」

「Z技！」

「ライジングランドオーバー！」

「全力無双激烈拳！」

バンバドロが地面を割りリオルを落とそうとした！だがしかし！

リオルは空中に大ジャンプし、青い拳のオーラの連撃をバンバドロに叩き込んだ！最後に溜めに溜めた最大級の拳のオーラを発射してバンバドロに当てた瞬間！割れた地面からライジングランドオーバーのフィニッシュ攻撃の爆発の爆風が空中にいるリオルに襲い掛かった！

リオルは爆風に襲われ大きく吹き飛ばされ地面に落ちていく！

バンバドロはリオルの最後の一撃により戦闘不能になった。

俺は直ぐに走り出しリオルの落ちてくる場所に急いで向かったが、間に合わない！

俺はそれでも必死に走っている時、ボールからアブソルが出て来て落ちてくるリオルを受け止めた！

アブソルはリオルをそつと降ろしてあげると汚れた場所を営めてあげた。

「ありがとうアブソル。助かったよ」

アブソルは一鳴きすると、ボールに戻った。

リオルは戦闘不能になっていたが、バトルも終わり一応少しだけだが動けるようであった。

「回復の薬だ」

俺は回復の薬をリオルに使い回復させた。

リオルは直ぐに元気になり俺に抱きついて来た。

ハプウはその光景を眺めながらバンバド口を回復させていた。

「もう大丈夫だからなりリオル」

リオルは可愛い鳴き声をあげ俺に甘えてくれる。

俺はリオルを抱きかかえハプウの元に向かった。

「試練達成じゃ。おめでどう」

「ありがとうございしました！」

俺は頭を下げ、リオルも頭を下げてくれた。

ハプウは地面のZクリスタルを俺に受け渡し、4つの島を巡り終えた事をたたえられた。

俺達はポケモンをちゃんと回復させる為、ポケモンセンターに向かおうとした時だった。

山の方から聞いたことのない雄叫びが響いたのだ!!  
ハプウは直ぐに山の方を見た後、用事があると言ってバンバド口に乗って行ってしまった。

リオル・レベル48 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

レアコイル・レベル43

特性頑丈

技放電、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

コモルー・レベル40 (メス)

特性石頭

技龍の息吹、頭突き、噛み付く、シャドークロ

イーブイ・レベル40 (メス)

特性適応力

技捨て身タックル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル44 (メス)

特性プレッシャー

技サイコカッター、アイアンテール、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

## 主ポケモン・ジャラランガ!

### 32話

俺はあの雄叫びの正体を知りたくなり、ハプウの後を追うことにした。

マツプを見るとポニの大峽谷。まさか、その山頂に雄叫びの正体がいるんじゃないや…

俺はポニの大峽谷に入って行つた。

…なんでこうなるんだああああ!!!

俺は大峽谷に入つて直ぐに、洞窟に住んでいるポケモン達に襲われた!!

ゴルバットにはレアコイルを、ガントルとメレシーにはリオルを、ヤミラミにはイーブイを、ダグトリオにはアブソルで戦い、次から次へと押し掛かってくる此奴等を全て倒して行くと、3時間を超えていた。

一撃で倒されないほどのタフさを持つ此奴が大量に襲い掛かってくるのは、相当疲れる。

それと、レアコイルがジバコイルに進化したぜ!

こここの谷でレベル上げれば進化したんだな。

小休憩を終えた後、洞窟の奥を進んでいくと吊り橋がある外に出てこれた!



のはいいんだが：今度は空中からエアームドに襲われたのでジバコイルで戦い、更にルガルガン、真夜中の姿と真昼の姿両方が共闘して襲い掛かって来やがった！

おかしいだろおおおお!!!

しかも群れだ！もう俺は誰が誰を相手にと言うのはポケモン達に任せ全て狩ることにした。最初から狩るつもりだったから、アレだ：うん。

問題ない！

と言う訳で、ここでも4時間ほど時間掛かりました：

だつてさ!?

ここだけのポケモンだと思っていたら、洞窟からもまたポケモンが出て来たんだぞ！もう可笑しいを通り越して、厄災だ！

(お前が来ている時点で、ポケモン側は厄災来たぞと言われてるぞ) by天の声  
まじか・・・

流石の俺のポケモンも相当疲れたらしく、回復の薬を何個も使ったその時だった！

大峡谷の上の方からあの雄叫びが響いてきた！

どつかで聞いた事あるんだよなあ：

俺達は小休憩を取り終えた後、再び頂上を目指して歩き出した。

もう、ポケモン達をボールに入れずに一緒に歩いている。

幾つもの吊り橋を渡り終えた後、再び洞窟に入って行った。

…なんでおるんく?

出て来ました主ポケモン:

ジャラランガ!!!

そして、このジャラランガ、主オーラがレインボー(虹)!

まさか:全ステータス上げしてるとかないよね?

ないと言ってください:お願いします。

とまあ、現実はその願ひ叶える事も無いわけで:

バトルが始まりましたよ。

ジャラランガの奴、スケイルノイズ使って来やがって!

洞窟内だと音が反響するやろうがああああ!!!

ジバコイルは耳が無いので平然としているので、ジャラランガにラスターカノンを食べ

わせようと命じたら、意味分かんない:

ジャラランガの奴もラスターカノンを放って来てジバコイルのラスターカノン押し

返しやがった:ジバコイルは間一髪避けきったが、どうしよ:

これ、アカン奴やん:

更に悪夢は続きましたよ！

此奴！仲間呼びやがった！

次々に沸いて出て来るハッサムにジャランゴとジャラコ：

地獄以外の何者でも無いですよん：

とまあ、ここで逃げ出したくもないのでやりきりましたよ！

主ジャラランガのバトルの間、あの雄叫びが近くまで何度も聞こえて来たけどね！

あの雄叫び、絶対にバトルしてやがる！多分、こんなに続いているって事はその相手

も結構強いぞ：

俺達とジャラランガのバトルは3時間強も続き勝つことに成功はした。

野生ポケモンは体力回復出来ないからな。そこが勝因だろう。

Z技はイーブイのを使い、あの時同様進化系達が助けてくれた。

あの時の助けがなかったら、更に時間は掛かっていただろう：イーブイズに感謝を。

後、ジャラランガとのバトルの時、コモルーが進化してポーマンダになった！

ポーマンダになってからは、ジャランゴとジャラコ共を一掃してジャラランガに集中

出来たのは大きい。

ハッサム共はイーブイズに任せていたから。

色々とジャラランガのバトルで消耗はしたが、回復の薬、PPMAXをポケモン達に

使い全開状態にさせた。

俺は適当に食事を取り、体力回復もぼっちり!

後から龍のZクリスタルが俺の鞆の中に入っている事がわかった。

俺はポケモン達と一緒に洞窟を出た:

リオル・レベル65 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル63

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル62 (メス)

特性石頭

技ドラゴンクロー、火炎放射、捨て身タックル、思念の頭突き

イーブイ・レベル60 (メス)

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール  
アブソル・レベル61（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

# UBマッシュブーン!

## 33話

洞窟を出るとびつくりしましたよ…

なんで貴方達がいるん!?

ねえ…ルザミーネ代表?ザオボーさん?

後、この白いポケモンと紫のポケモン、めっちゃデカいけど…

アレだよね?うん…

ソルガレオとルナアラ。

そして、今まで戦い続けられていた訳が分かったよ…

カプ達だ。

カプ・コケコ

カプ・テテフ

カプ・ブルル

カプ・レヒレ

道中会うこと無かった守り神のポケモン達。

そして太陽と月の伝説ポケモン。  
会えるものなんだな。

ソルガレオとルナアーラは俺を見るとテレパシーを使い話しかけて来た。  
『汝は敵か？身方か？』

これがテレパシーか…

頭に直接語りかけてくるこの感じ、ちよいと嫌だな。

俺は一度ルザミーネを見るが、様子がおかしいと言うか…

ウツロイドが何故増えている!?

つてか…あくもう！あの2人、完全にウツロイドに操られているんやん!!!

「俺はお前達の味方だ。助けに来た」

『そうか。あのポケモンは…』

「ウツロイドだろ？それぐらい知ってる」

俺はソルガレオ達の前に立つとカプ達を見る。

「俺はリョウタ。守り神様。ソルガレオ様とルナアーラ様を守って頂きありがとうございます」

俺はカプ達に感謝しお礼を言い頭を下げた。

もし、この2体が倒されていたら俺が住んでいくこの世界がどうなるか、わかったも

んじやない!

てか、マジでどうなるんや!!!

俺はポケモン達と一緒に伝説ポケモン達の前に立った。

「話はお済み?」

「ああ。とりあえず、ウツロイド。その人達から離れろ」

「無理よ」

ルザミーネ(ウツロイド)がそう言うのと、プクリンを出してきた。

それと同時にウルトラホールが出現しマッシブーンが出て来た!

「やつと来たのね…何時間待たせるつもりなんですか?」

『マッシブーン!!』

…筋肉もりもりの此奴、マッシブーンって言うんか。

初めて見た感じが筋肉の塊+ハエか。

動きが遅そうと思った俺を誰か殴ってくれ…

マッシブーンが急に俺の前に移動して来たんだよ!

俺は腰が抜けて座り込んだと同時に太い腕が俺の真上を通り過ぎた!

死ぬ!俺、死んじゃう!!!

マッシブーンが避けられたと分かった瞬間、6本ある足で俺を蹴ろうとして来たその



瞬間！カブ・コケコが俺を掴み後退させてくれた。

俺のポケモン達も既に後ろに下がらせていた。

『マツシブーンが来るとはね…もう分かったと思いますですが尋常じゃない素早さの持ち主で、攻撃力も馬鹿でかいのよ』

「身をもって知りました…」

そう言えば…最初に行ったハプウが見当たらないけど、どこ行ったんだ？

俺が周りを見渡すと…

あゝそゆことね…

よく見るとウツロイドは3体。

もう分かると思うが、3体ともそれぞれのトレーナーに付いている。

…ハプウもウツロイドに取り憑かれていましたよ！

何やってるんですか!!!

幸い、俺がハプウのポケモンを倒したおかげで、バンバドロしか使ってこないみたいだけど。この2人は違うだろうな。

俺と伝説ポケモン達とのUBを倒すためのバトルが始まった！

リオル・レベル65 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル63

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル62 (メス)

特性石頭

技ドラゴンクロー、火炎放射、捨て身タツクル、思念の頭突き

イーブイ・レベル60 (メス)

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル61 (メス)

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し (つばめがえし)

## 対決マッシブーン&amp;ウツロイド！

## 34話

俺が立ち上がると同時に俺のポケモン達も前に出て来た。

「行くぞお前達ー！」

俺がそう言った直後、マッシブーンが急接近し拳を振りかぶる！

リオルは発勁を喰らわせ軌道をずらせ、更に手首を麻痺させた！

俺達の連携攻撃が始めるぜ！

イーブイが電光石火でマッシブーンを攻撃すると同時にアイアンテールで脇腹を攻撃する！マッシブーンは雷パンチを発動させイーブイを攻撃しようとしたその時！カブ・コケコが雷パンチを発動させマッシブーンを攻撃を相殺した！

イーブイがその場から離れると同時に、ボーマンダの火炎放射がマッシブーンを襲う！カブ・コケコはボーマンダの攻撃が来る前に既に待避している。

マッシブーンが体を高速回転させ炎を振り払った直後、ルナアーラのシャドーレイと、ジバコイルのラスターカノン、更にカブ・レヒレのハイドロポンプの同時攻撃が当たり大爆発して吹き飛ばされた後、空中で体制を整え着地した。

『貴殿のポケモン。なかなかの素早さを誇るな』

「俺達の特訓の成果です」

ソルガレオはそう言うのと戦いに参戦する。

もしかして：ソルガレオは俺を守ろうとしてくれていた？

ソルガレオは前に出ながら体を光らせていく。メテオドライブを発動したのだ。

「プクリン、破壊光線よー！」

「フリーデインもです！」

「バンバドロ、ストーンエッジ」

3体のポケモンがソルガレオに攻撃しようとした時、カプ・ブルルが守るを発動し攻撃を防いだ！ソルガレオは真上に飛び上がるとメテオドライブでプクリンを攻撃し戦闘不能にさせた。それと同時に、リオルの電光石火でバンバドロを攻撃した後、まねっこでマネをしたシャドーレイを放ち戦闘にさせた。

カプ・テテフは自然の怒りを発動させ真上からの拳の一撃でフリーデインを沈めた。

3体のポケモンがそれぞれのボールに戻った直後、カプ・ブルルが3人の真下に大樹を生やし拘束した。ウツロイドは大樹が生えた時に3人から離れ巻き込まれるのを躲したが、その先には離れるのを待っていたアブソルが辻斬りで構えていた。

ウツロイドは直ぐに攻撃しようとしたがもう遅い。

特訓で鍛えた素早さで、アブソルは黒い線を描きながらウツロイドを斬り裂き、更にトレーナー3人を拘束している木の部分だけを斬り裂き解放した。

ウツロイド共は地面に落ちたが直ぐに浮上しようとした瞬間、ソルガレオのメテオドライブとルナアラーのシャドーレイで攻撃され戦闘不能になった。

マツシブーンは直ぐにウルトラホールをこじ開け逃げ出した。

逃がしたか…

とりあえず、ウツロイドを捕まえなくてはならないな。

俺はルザミーネが持っているだろうウルトラボールを探すため、倒れているルザミーネを調べた。

…凄いとこころにボールを入れてるんだな。

ちよいと失礼…

数日前の俺だと無理だったが、これもスイレンのおかげか。

俺はルザミーネからウルトラボールを取りウツロイド共をGETした。

此奴等も何か理由があつて動いたと思うが、今回のは此奴等が悪い。

だが、管理仕切れなかつたルザミーネも悪いから、此奴等は俺が預かるう。

『汝にその3体を任せる。我らはマツシブーンを追うことにする』

『戦闘の協力感謝します』

この2体だけでマッシュブーンを相手するのか。

大丈夫だと思っけど心配もあるんだよな…

「俺もマッシュブーンを追う手伝いをさせてくれないか?」

『いいのか?』

「当たり前だよ」

『感謝する』

その後、ルナアアラがウルトラホールを開キルザミーネ達の事はカプ達に任せて俺達は出発した。

リオル・レベル65 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル63

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、光の壁、ラスタカノン

ボーマンダ・レベル62 (メス)

特性石頭

技ドラゴンクロー、火炎放射、捨て身タツクル、思念の頭突き

イーブイ・レベル60（メス）

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル61（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

## それぞれの場所

### 35話

ウルトラホールの中は多重次元の空間になっていた。

俺はルナアーラの背中に乗って移動をしている。

ここがウルトラホール…

色々凄いとしか言いようが無い場所だなあ

そのウルトラホールを進んでいくと違和感のある穴を見付けた。

「ルナアーラ、あそこの穴」

『良く見付けましたね。マツシブーンが逃げ込んだ場所です』

大きさはそれほど大きくは無かった。多分、閉じかけていたのだろう。

ルナアーラはその穴を広げ通れるようにした。

『それでは、行きますよ』

「了解！」

俺達はその穴の中に入って行った。



穴の中は自然豊かな森の中だった。

その森の中にある巨大な大樹の窪みにマツシブーンが寝ていた。

多分、体力回復か傷を癒やす為だろう…

「マツシブーン寝てるけど…」

俺が2体に聞こうとした時、ソルガレオがメテオドライブを発動してマツシブーンに攻撃した！更にルナアールがシャドーレイを放ち追撃をする！

ちよつと待って!?

急に攻撃しちゃうの!?

倒す事に変わりは無いけど…

俺は直ぐにリオルを出してマツシブーンの動きを確かめた。

マツシブーンは大樹の窪みの中で仰向けで横たわっていた。

2体は更に攻撃しようとしていたので、俺は止めた。

「ちよつと待ってくれ！これ以上したらいくらポケモン、UBでも死んじまうじゃないか？」

『危険は排除しなければならぬ』

『邪魔をするな』

邪魔するなって…

俺は殺しの協力なんてしない！

「ルナアーラ、ソルガレオ。俺は殺しの手伝いなんかごめんだぞー！」

『邪魔をすると言う事だな？』

「邪魔をするんじゃない。此奴を、マツシブーンを助けようと言ってるんだ」  
『助けるだど？』

ソルガレオは俺の前に立ちそう言ってきた。

「ああ！マツシブーンを助けて、共存出来る世界と一緒に作っていこうよ！」

2体はお互いの顔を見た後、微笑んだ。

『共存出来る世界か』

『良かろう。我らも力になろう』

「ありがとう！」

俺は2体にお礼を言った後、マツシブーンに近づいて回復の薬を使い元気にさせた。

「マツシブーン。俺と一緒に来ないか？」

マツシブーンは俺を見た後、少し考える素振りをしてから頷いた。

「よし。それじゃあ、このボールがお前のボールになる。これからよろしくな」

マツシブーンは拳をウルトラボールに当て中に入った。GET完了だ。

『それじゃあ帰ろうか少年』

「ああ！」

俺はソルガレオに乗り元の世界に戻って来た後、2体と別れた。

「お帰りなさいリヨウタ」

「ただいまです」

戻って来た時、ルザミーネがザオボーとハプウと一緒に待っていてくれた。

カプ達も一緒に。

「UBはGET出来た？」

「出来ましたけど、もう渡しませんよ？」

「もう貰う気は無いわ。リヨウタのよ」

「ありがとうございます」

ルザミーネはそう言う俺を抱きしめてくれた。

「良く返って来てくれたわね。ウルトラホールから帰ってこないと思ったわ」

「返って来ますよ。俺には大切な人がいますから」

ルザミーネはちよつと以外そうな顔をして俺を見てくる。勿論、後ろの2人も：

「あらまあ…もうそんな相手もいるのね？」

「ちゃんといますよ」

俺はそう言うルザミーネから離れカプ達を見る。

「みんなを助けてくれてありがとうございます」

俺はカプ達にお礼を言い頭を下げた後、3人も頭を下げた。

カプ達は一鳴きするとそれぞれの場所に戻って行った。

「それじゃあ、私達も帰りましょう」

「そうですね」

俺達はそれぞれの場所に帰って行った。

リオル・レベル65（メス）

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル63

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル62（メス）

特性石頭

技ドラゴンクロー、火炎放射、捨て身タックル、思念の頭突き

イーブイ・レベル60（メス）

## 特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール  
アブソル・レベル61（メス）

## 特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

## 島巡りの終わり

## 36話

俺はスイレンがいるアーカラ島に戻り、手持ちオーバーとなつてしまったポケモンをどうするかスイレンと相談した。

相談の結果は、スイレンの実家は広大な土地を所有しているらしくそこでのびのびと放し飼いをするのはどうかと言う事だった。

俺は直ぐに賛成して、アーカラ島の一部の土地を譲り受けた。

一部と言っても、アーカラ島に所属している無人島を譲り受けたのだ！

無人島1つ貰うって：

しかもそれが1部って、スゲえな：

それと、俺が島巡りしている間に、スイレンが親に俺と一緒に暮らしていく…結婚すると言っていたみたいだ。

なので、土地を譲り受ける時に挨拶しに行くと、成人を迎えればいつでも歓迎してくれると言ってくれた。

なんて優しい人達なんだ！

俺自身、この世界では親など居なく、独り身。

なので、スイレン家の暖かい温もりがジーンと来た。

その後は、無人島に移りポケモン達をボールから出してあげた。

UBのウツロイド達とマツシブーンはウルトラホールに行くと思っただが、この無人島が気に入ったらしく、ウツロイドは綺麗な洞窟に、マツシブーンは島にある一番大きな大樹を住処とした。

俺とスイレンは、無人島にある別荘で住むことにした。

先住人が残した物で、俺達は1週間掃除し続け綺麗にした。

リオルは俺達と一緒に別荘で住み、イーブイ達はそれぞれ自分にあつた場所を見付け暮らした。

ポーマンダとジバコイルは山に居る事が多く、イーブイは星が綺麗に見える草原地帯に居て、アブソルは森に住んでいる。

1日に何回か俺の所に顔を見せに来る此奴が凄く好きだ。

後、この島にも野生ポケモン達は住んでいて、皆と仲良くしている。

UBも何もしなければいい奴等なのだ。

マツシブーンなんて、大木が倒れて困っていた小さなポケモン達を助けてあげたりしていたし…

ウツロイド達は洞窟のポケモン達と宴会状態になっていたし：

俺とスイレンはね？ずつとイチャラブさ！

それと風の噂で、アローラ地方にもポケモンリーグを建設する予定があるらしい。

まあ：リーグが出来たら挑戦しに行けばいいや。

俺はスイレンとポケモン達と平和で楽しい日々を過ごせればそれでいい。

この世界で平和に生きていくんだ。

リオル・レベル65（メス）

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル63

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、光の壁、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル62（メス）

特性石頭

技ドラゴンクロー、火炎放射、捨て身タックル、思念の頭突き

イーブイ・レベル60（メス）



## 特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール  
アブソル・レベル61（メス）

## 特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マツシブーン・レベル60

## 特性ビーストブースト

技雷パンチ、冷凍パンチ、爆裂パンチ、飛びかかる

ウツロイド・レベル60×3体

## 特性ビーストブースト

技パワージェム、ベノムトラップ、ベノムシヨック、神秘の守り

## リオルの回想その4

37話

やつほ〜！

リオルよ♪

遂に最後の島、ポニ島にやって来たわ！

早速この島のトップに会いに出発した所、やっぱりリョウタはトラブルメーカーだったわ。

グランブルの群れに遭遇するってどんな確率よ…

まあ、グランブルの顎に一撃かましてやったけどね。いつものならこの一撃で倒れるのに此奴、倒れないのよ！

しかも、初戦で戦うグランブルに会った瞬間から力が抜けていく感じがして嫌になるし！

嫌な相手だったわ。

その後は順調に進んでいって、島クイーンのハプウとバトル出来たわ。

初戦の相手はダグトリオ。

まあ普通に倒せる相手だから問題ないわ。

その次の相手が問題なのよ！

その相手がフライゴン。

砂嵐使おうとしたから電光石火で翼を攻撃してやったわ！けど、無理矢理砂嵐を使われたから目を閉じたの。目に砂が入るのを防ぐ為にね。居場所は波導で分かるから大丈夫。

追撃する為、発勁をフライゴンが飛び立つ前に当ててやると地面に倒れたわ。

トドメとして発勁をもう一度喰らわせると、リョウタから離れろと命じられて飛び退きながら目を開けると、地面が光っていたわ：私は大地の力の放出に巻き込まれたのね。

気がつくとりョウタに抱きかかえられていたわ。

リョウタは私を直ぐに戻そうとしたけれど、拒んだわ。

私の中の波導が激しく脈打ってるもの：

私はリョウタから少し離れると体の中から溢れ出るエネルギーを解放したわ。すると：

私の中の波導の力が体を包み込み強化されたわ。

全てが研ぎ澄まされたような感覚になり、手と手の間にエネルギーを溜めるように意

識したら、波導弾を打てるようになったわ。

大地の力がきつかけみたいね…

そこからの私は凄かったわ。

フライゴンは発勁の攻撃で倒しているから大丈夫。

次のトリトドンは濁流を使って来たから波導弾を撃ち放ち濁流を掻き消してやったわ。

その後電光石火で終わり。

バンバドロとはZ技で決めてやったわ。

流石にバンバドロのZ技は防げないから攻撃を受けてしまつて私も負けたけどね。

流石、島クイーンと言った所かしら。

今までの中のトレーナーで一番強かったわ。

その後、山の方から大きな鳴き声が聞こえてきて、ハプウは先に行ったわ。

勿論、リョウタもそれに続き行ったけど、もう…

なんでリョウタはそんなにトラブル起こすの！

ポケモンの群れの戦い3連戦って…結構満身創痍よ…

まあ…流石に1戦ずつ休憩はくれたけどね。

最後の洞窟に何故か主ポケモン・ジャラランガが居た時は終わったと思つたけどね…

すつごく大変だったけど、勝てた時は安堵したわ。

その後、洞窟を出ると伝説ポケモン、ソルガレオとルナアーラ。更に島の守り神カプ・コケコ・テテフ・ブルル・レヒレが居た時は驚いたけど、戦っていた相手はあの時のクラゲとトレーナー3人。

なんでこんな人とクラゲに手間取っているのよ…

リヨウタは挨拶とお礼を言った後前に出て戦おうとしたら、ウルトラホールから赤い虫のポケモンも出て来たと思ったたら、もの凄い速さでリヨウタを攻撃しようたあの虫！絶対に許せない！

私達の連携攻撃＋伝説ポケモン達の連携攻撃で虫に大ダメージ与えたけど逃げられたわ。

ウツロイド3体は連携攻撃で瀕死間近にさせた後、リヨウタがGETしたわ。

その後、伝説ポケモンが虫を追いかけるって事になったからリヨウタが着いて行つたわ。

伝説ポケモンとウルトラホールの中に入って虫を追いかけた時、リヨウタが穴を見つけてそこを通ると森の中に出たわ。

しかも凄く自然豊かな森。

その森の中心部辺りかしら？大樹があつて、その窪みに虫が寝ていたわ。

伝説ポケモン達は同時攻撃して虫に大ダメージを与え更に追撃しようとした。

これを喰らえば虫は死ぬわね。

そう思っただけで見ていると、リョウタが伝説ポケモンを説得して攻撃を止めさせ、虫をGETした。

その後、私達は元の世界に戻りそれぞれの場所へと帰って行ったわ。

新たな仲間も加わり、私達はリョウタとアーカラ島へと行ったわ。

リョウタの恋人？のスイレンに会いにね：

まあ：スイレンとは仲も良いし、ポケモンの私じやリョウタを娶うことも出来ないものね：スイレンとくつついて貰わなきゃダメね。

私のポジションは愛でて貰う事！それでいいわ。

そう言えば、スイレン家ってお金持ちだったのかしら？

リョウタに無人島って島を渡したみたいだけど、この島を好きに使って良いみたいよ。

私達はそれぞれ住みやすい場所を見付けて、先に住んでいた野生ポケモン達と仲良く暮らすわ。

ちなみに、私は絶対にリョウタから離れないけどね。

スイレンとイチャラブしているときは散歩しに行ったりはするけど。

ちやんと、そこら辺の空気は読むわよ？

ま、短い期間でここまでの事をした人のポケモンである私達。

平和って幸せってだなあって思ったりしたわ。けど、鍛錬は欠かさずにするようにしているわ。

リョウタがいつか、旅に出る時の為に。

## リーグ編

### リーグ誕生!

#### 38話

無人島に暮らして数年。

スイレンが成人になり正式に結婚して更に数年。

俺達に2人の子供が出来た。

名前はレンタとハルカ。

レンタは先に生まれた元気で活発な男の子で、俺とスイレンの名前を使って名付けた。  
た。

ハルカは春に生まれた優しく思いやりのある女の子で、スイレンと一緒に名前を考えて名付けた。

それと、無人島だった俺の島のポケモン達はいつも優しい。

後、リオルがこの島で一番強くなった。

相性的に不利なボーマンダにも勝てる。

ボーマンダがとどかないだろうと空から攻撃していると、リオルが跳躍して攻撃した



時は目を疑ったぞ！

スカイウォークって知っているか？

空気を蹴り跳ぶんだ。

一番分かりやすく言うとなんピースでサンジが使っているアレだ。

リオルはスカイウォークをマスターしてたんだよ！

この島で最初の数年間過ごしている時、ボーマンダに挑んでも負けていたけど、この技術をマスターしてからのリオルは凄まじく強くなった。

空から安全に攻撃していたボーマンダもリオルに負けてからはしつかりと自分磨きもしている。それでも今のリオルには勝てないが…

それと、リオルは毎日波導の鍛錬もしており、フライゴン戦の時に解放された波導のオーラを自在に操れるようにしていた。

一部だけオーラを纏えるようにしたり、全身を覆い鎧みたいにしたり、オーラを伸ばして尻尾を作ってみたりと色々な事を出来るようにしていた。

この波導のオーラ。防御力、攻撃力、素早さも格段に上げることが出来る事が判明した。

後、リオルと一緒に島のポケモン達と集め、100体1のバトルをした。

結果はリオルの圧勝だった。

最初、リオルは足に波導を纏わせ超高速でポケモン達に手刀の一撃を首に当て気絶させて行き、近くに居たポケモン達の攻撃は腕に波導のオーラを纏わせ防ぎつつ、空いている手の平を腹に当て真空波で吹き飛ばし、四方八方からの同時攻撃には、技と技の間を的確に通り返し波導の拳で殴り飛ばす。

全身波導のオーラは消耗が激し過ぎるので、本当に避けきれない時と、俺を守る時にしか使わないのだ。

ちなみに、100体1の最後の方は、電光石火（既に神速の域）を使い反撃の余地すら与えずに倒した。

この時に使った手刀と真空波は鍛錬中に編み出したリオル専用技となっており、ポケモン技には含まれていない。

マッシブーンはバトルよりも自然が好きみたいだ。

挑まれたら戦うぐらいで、普段は小さなポケモンや森の安全を見回っている優しい奴だ。

だが、怒らせると凄まじく怖い…

ある時、ポケモン達の大喧嘩で森の木々が数本傷ついたり倒したりした時、マッシブーンが鬼の形相で更に、ビーストブーストをフル活動させた状態で大喧嘩をしたポケモン達を瞬殺（倒した）して終わらせた時があった。

あの時以来、ポケモン達の間では『自然を大切に!』を重視するようになった。

ウツロイド3兄弟(性別分らないけど)の内1体はバトルが好きみたいで、日々鍛錬をしてリオルに勝とうとしている。

残りの2体は完全にバトル嫌いだ。

操ったりするのは好きみたいだけど、普段は散歩したり昼寝したり、夜になったら洞窟で皆と宴会したりしている。

それと、ちゃんとポケモンが困っている時は助けてあげたりもしている。

俺のポケモン達もリオルには勝ちたいらしく、いつか勝てる日が来るまで鍛錬を欠かさずしていて、3日に一度は挑みに行つては負けている。

一番いいバトルをしたのはイーブイで、満月の夜だけイーブイは最強になっていた。

基礎ステータスが満月の光を浴びて格段に上がっているのだ。

その時のイーブイは銀色に輝いている。

が：リオルを追い詰める事が出来たのはこの夜だけ。リオルは一度使ってきた戦略を全て覚えているのだ。その対処法も研究して更に知識を高め強くなっていく。

後、年に数回だが、ソルガレオとルナアラ、カプ達も島に遊びに来てはリオルと戦つたりしている。

その伝説ポケモンですら、今のリオルには勝てない。

伝説ポケモンの破壊光線を波導弾で相殺したり、ギガインパクトを発動で押し返し返し蹴りで吹き飛ばしたり：カプ達の自然の怒りを全身鎧で完全に受け止めた後、電光石火で急接近した瞬間、発動で完全麻痺状態+連撃を喰らわせ終わらせたり：

伝説ポケモン達すら圧倒するほどのリオルはこの島の女王だ。

そのリオルがいつも俺に甘えてきてくれる。可愛い奴だなあ！

スイレンは家の事や子供達の世話をして忙しいが、ポケモン達が手伝ってくれているのでいつも助かっている。

月日は随分と経ち、数年。

遂にポケモンリーグが設立されたと言う報告が舞い込んできた。

俺はスイレン達とポケモン達を直ぐに集めリーグに行くと言いポケモン達を俺の側に待機させた。

皆、やる気に満ちている。

スイレンはやっぱりと言った感じで俺に近づき、キスをくれた。

レンタは必ず優勝してねと満面の笑顔で言いグーの手を伸ばして来たのでそれに応えた。

ハルカは無茶しないでねと言ってくれた。

勿論、無茶はしない。

それと、優勝して帰って来る。

この時のレンタは8歳。

ハルカは6歳だ。

スイレンは25歳になり、俺は28歳だ。

俺のポケモン達も年数を積みレベルはリオルを除きレベル90以上になっている。  
リオルは当然レベル100だ。

俺はポケモン達と一緒にウラウラ島に向かった。

それと俺がリーグで使用するポケモン達を載せておく。

リオル・レベル100（メス）

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル96

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル97 (メス)

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル95 (メス)

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル96 (メス)

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し (つばめがえし)

マッシブーン・レベル98

特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## リーグ参加者

## 39話

さあやって来ましたポケモンリーグ！

いやあくやっぱ変わるね！色々変わってるね！

後、ロワイヤルでマスクで出て来たククイ博士。忘れてないから安心して！

リーグ設立の代表と言う事で演説していました。

後、ハウ達に会うことが出来た。

ハウは俺に勝つため島巡りを終えた後、色々な地方に行きポケモンを強くしていたみたいだ。リーグではとっておきもあると言っていた。

リーリエとは、ほしぐもを救出した時以来だなあ。

島で暮らしていたから知らなかったが、今は女優をしているとの事。

凄い人気で世界中から人気がある今一番輝いている人だそうなの。

リーリエはリーグには出ないで観客として見ると言っていた。

後、木の試練を担当していたマオもいる。なんか、露出度多くね!?

え？これが普通の姿？もうみんなが見慣れてるって？

そうか：

マオは最速で島巡りを終わらせた俺と戦いたいらしく、色々と特訓をしていたみたいだ。

カキは凄くかつこよくなっていた。

今回のリーグ戦で必ず俺を倒すと言ってくれたので、俺もそれに応えよう。

俺の悪夢の試練を担当していたアセロラもいた。

アセロラ：マオ達に劣らずいい女性になっていた！紫が合う！そして美人！

スイレンに叶うことはないがな！

アセロラもリーリエと一緒に試合観戦する事になっている。

あ、マーマネは研究に没頭しているらしく、リーグに現れなかった。

後、島キング・クイーンも勢揃いだ。

そのキング達、このリーグ戦に出るって笑っていたぞ！

それと、別の地方から島巡りを終えた少年少女も数人いると聞いた。

まあ：リーグが出来た事もあり、観客も凄い大勢になっていた。

ちなみに、リーグと言ってもゲームみたいな塔になっている訳ではなく、東京ドーム

みたいな形の場所となっている。

予選をまずは勝ち進まなければならず、島キング達も今回はトレーナーとして参加



するので、全員平等に初戦から当たっていく。

ブロック別はされているが、島キング達の内1人は俺のブロックになるだろう。俺はワクワクしながらリーグに参加した。

選手控え室にはやけに豪華なメンツが：

島キング達の控え室に案内されたんだよ！

みんな笑顔で近寄ってくる：

ちよつと待って！怖いよ！怖すぎるよ!!!

リーグが始まるまで俺は島キング達とじやれ合うこととなった：

後、スイレンとの馴れ初めをめっちゃ聞かれた：

それと、島キング達もポケモンも既にレベル90を超えていると教えてくれた。と言うか、俺のポケモンのレベルがそれぐらいだろ？と言われた！

後、島キング達のポケモンも相棒はレベル100に育てあげたそうなの。

リオル・レベル100（メス）

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル95

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル96（メス）

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル92（メス）

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル94（メス）

特性プレツシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マツシブーン・レベル98

特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## リーグ1〜4戦目

## 40話

遂に始まったポケモンリーグ1ブロックの1戦目！

ちなみに、参加者が多すぎて5ブロックに別けられている。

島キング達が凄く嫌そうな顔してたのは見なかった事にしとこ…

1ブロックに10人。さて、蹴散らすか！

初戦の相手は自称ドラゴン使いと名乗るマントを羽織った男性。名前はリュウ。特に知らせる程の事がないので簡単に纏める。

1体目はガブリアス。俺はマッシュブーンの爆裂パンチを高速連打させ倒す。

2体目はブーストの効果で攻撃力を上げる。

3体目はオノノクス。毒突きを顔に当て怯ませ、腹に毒突きを当て倒す。

4体目はブーストで更に攻撃力強化。

5体目はボーマンダ。雷パンチでワンパン。

6体目はブーストで更に攻撃力強化。

7体目はサザンドラ。毒突きが急所に当たりワンパン。

ビーストブーストで更に攻撃力強化。

5体目はカイリユウ。雷パンチでワンパン。

ビーストブーストで攻撃力強化終了。

マッシブーンの驚異的素早さと攻撃力に相手は絶望。

6体目。最後のポケモンはジャランガ。爆裂パンチ高速連打させ倒す。

結果、1戦目で完全勝利を収めると同時に拍手喝采を貰った。

実況者からは、優勝候補者だと言われる。

優勝候補者って：

俺は優勝しか狙ってねえ!!

2戦目の相手はフェアリータイプを中心に使ってくる女性トレーナーのフィーリア。

1体目はプクリン。俺はまたマッシブーンを出し腹に高速3連毒突きを炸裂させ倒

す。

ビーストブーストで攻撃力強化。

2体目はアローラキュウコン。高速で近づき、爆裂パンチでワンパン。

ビーストブーストで更に攻撃力強化。

3体目はフラージェス。毒突きでワンパン。

ビーストブーストで更に攻撃力強化。

4 体目はメレシー。爆裂パンチで吹き飛ばして毒突きで仕留める。  
ビーストブーストで更に攻撃力強化。

5 体目はミミツキユ。毒突きで化けの皮を剥がし瞬間、シャドークローの反撃を受けるが、マツシブーンは素手でその攻撃を受け止め地面に叩き付けた。そのまま躊躇無く毒突きで終わらせ、ビーストブーストで攻撃力強化終了。

6 体目はサーナイト。

相手のトレーナーが腕を振り上げ何か言おうとしたが知らん。毒突きでワンパンしたった。

3 戦目は色々なタイプを使ってくる男性トレーナーのゲンジ。

1 体目はギヤラドス。俺は再びマツシブーンを出した。

ギヤラドスは破壊光線を撃ってきたけど、直線攻撃なんて避けるの簡単でね…

サクツと躲して雷パンチで終わりよ。

ビーストブーストで攻撃力強化。

2 体目はガブリアス。爆裂パンチの連撃で倒す。

ビーストブーストで更に攻撃力強化。

3 体目はボスゴドラ。爆裂パンチで倒す。

ビーストブーストで更に攻撃力強化。

4体目はジバコイル。速攻で電磁波を使われ、マッシュブーンが麻痺状態となったが、爆裂パンチで混乱させ自滅させた。

ビーストブーストで更に攻撃力強化。

5体目はルカリオ。波導弾を撃ってきたが、拳を振り払い波導弾を破壊したその時！ルカリオがインファイトでマッシュブーンに攻撃してきた！

マッシュブーンは避けきる事が出来ずに攻撃を受けたが、ルカリオの攻撃が弱いのか、あまり効いていなかった。マッシュブーンはルカリオを頭を鷲掴み地面に叩き付けた！そして、爆裂パンチを当て倒した。

ビーストブーストで攻撃力強化終了。

6体目はカイロス。ゲンジが『メガ進化！』と叫び、メガカイロスに変わった。

…もしかして、さっきのサーナイトの人、メガ進化させようとしていたのかな？

(そのようだな) b y 天の声

メガカイロスはハサミギロチンを発動させマッシュブーンに急接近した！

マッシュブーンは爆裂パンチを発動させ、接近してくるメガカイロスの腹目掛けアッパー攻撃して空中に吹き飛ばした！

(ギリギリだったぞ…) b y 天の声

流石にハサミギロチンは不味いつて…

メガカイロスは空中で直ぐに体制を整え、自身の周りにストーンエッジを発動させ一斉発射してきた！マツシブーンは高速移動しながら全ての岩を躲した直後、勢いよく地面を蹴り空中にいるメガカイロスに急接近した！

メガカイロスは再びハサミギロチンを発動させ、マツシブーンを大きく旋回した後、背後からハサミギロチンで一撃で仕留めた。

流石に空中では、マツシブーンもキツイか…

(メガカイロスのハサミギロチンは気を付けろ) by天の声

ああ。ボーマンダに任せよう。

俺がボーマンダを出した直後にメガカイロスはストーンエッジを発射してきた！

ボーマンダは直ぐに鋼の翼を発動して自身の前に翳し無数の岩を防いだ後、火炎放射を放った！メガカイロスは青みがかかったギガインパクトを発動し火炎放射を押し返しながらボーマンダに迫ってきた！

「こうなったら…ボーマンダ！空に急上昇!!そして…流星群だ!!!」

「メガカイロス！ギガインパクトで追え！」

ボーマンダは直ぐに急上昇しながら流星群を発動した！

無数に降り注ぐ流星群はこちらに迫って来るメガカイロス（ギガインパクト発動中）に当たると、全て砕け散りそのままボーマンダを攻撃して大爆発した！

メガカイロスは爆煙から出て来てゲンジの前に降り立った。

ボーマンダは爆煙の中からそのまま地面に落ち、戦闘不能になった。

意外とやりやがるな…

俺はジバコイルを出した。

メガカイロスはインファイトを使いジバコイルに連撃を叩き込もうとしてきた！

「チャンスだ！電磁砲発射！」

ジバコイルは真つ直ぐ迫って来るメガカイロスに電磁砲を放ち大爆発させた！更に

ラストターカノンを放ちトドメをさせた。

ギリギリだったな…

（ああ。あまり油断はするなつて事だ） by 天の声

そうする…

3戦目も見事勝ち抜いた俺は4戦目の相手を見た。

そいつは不適な笑みを浮かべており、確実に俺に勝てると思つてやがる。

そして4戦目。先ほどの相手がお前に名乗る名前は無いと言ひ応えないので提示版を見た。

名前はアカネ。ちなみに男だ。

アカネは見るなあ！と叫ぶが見たものは仕方無い。後、笑ってしまった…



アカネの1体目はレジロック。俺は勿論マッシブーン。

アカネの考えは、準伝説ポケモンなら攻撃を受け止めれると思っただろう。実際は無理だと言うが：

レジロックは原始の力で岩を複数飛ばして来たが全て爆裂パンチで粉碎しながらで攻撃してレジロックに続けざまに連撃して倒した。

ビーストブーストで攻撃力強化。

2体目はレジアイス。吹雪を使って来たが飛びかかるで高くまで飛び上がり攻撃を避け、直ぐに急降下しながら爆裂パンチを発動し頭に叩き込み倒した。

ビーストブーストで更に攻撃力強化。

3体目はレジスチル。ラスターカノンを放って来たので避け爆裂パンチで倒した。ビーストブーストで更に攻撃力強化。

4体目はラティオス。良く捕まえたなあ：

んでも、毒突きで攻撃&毒らして弱らせていき、攻撃は全て躲して倒した。ビーストブーストで更に攻撃力強化。

5体目はもう予測出来た。ラティアス。俺の好きなポケモンでもあるので苦しませずに倒す。

雷パンチで急所を当て何もさせずに倒しビーストブーストで攻撃力強化終了。

ビーストブーストで攻撃力フル強化した状態だからこその一撃だった。

ここまでは本当、順調だね。でも、次のポケモンがね？

6体目、レックウザを出してきました。

ちなみに、観客からは伝説ポケモン使いを凄く応援している人が多い。

後、レックウザを出したアカネはドヤ顔。更に…乱気流が巻き起こったと思ったらレックウザがメガレックウザに変わってやがった…

マジかよ…

マッシブーンも一応準伝説になるのかな？けど、レックウザって普通に伝説ポケモンじゃあ…とりあえず、頑張って倒すか！

メガレックウザは画竜点睛を使い天高くまで行き、一気に急降下してきた！

面白い！俺はこれ待っていた!!!

今のマッシブーン最大の攻撃を見せてやるよ！そして、迎え撃つ!!

「マッシブーン！ビーストブーストで攻撃力強化したお前の力を見せてやれ！最大級の爆裂パンチで迎え撃て！」

マッシブーンは腰をしつかりと落とし、拳を腰辺りまで引き、ビーストブーストで攻撃力強化した力を全て拳に集めていくと拳に赤黒いオーラが巻き起こった…

その時、既に画竜点睛は会場の直ぐ真上まで迫っていた。スピード的には後2秒！

「倒せレックウザあああああ!!」

「殴り飛ばせマツシブーン!!!」

マツシブーンはメガレックウザが攻撃範囲に入った瞬間、溜めに溜めた拳を一気に突きだし画面点晴にぶつけた瞬間大爆発した!!会場にはもの凄い爆風が巻き起こり俺とアカネは吹き飛ばされ、会場の地面も割れていき、観客席を守る厚い鏡も割れて被害甚大になった。

気付けば俺は、会場の壁まで飛ばされていた。アカネも壁まで飛ばされて意識を失ったみたいだ。

俺はポケモン達と体も鍛えていたから無事だったんだな…

実況席の厚い鏡も亀裂が入るぐらいで収まったみたいだ。

もの凄い爆発&爆風が落ち着き、爆煙が晴れていくと2体のポケモンは共に地面に倒れていた。

俺は勝った…

ついでに、レックウザがトレーナーの手に収まると思えない。何かトリックでもあるのかな?それとも、伝説ポケモンと仲良くなつて力を貸したと考えるべきか?

もしかして、自力でG E Tしたとか?

いやいやありえんだろ…

とりあえず勝てて良かったけど、この被害のお金って…  
結果は、この分のお金は会社側が受け持つらしく、参加者は気にせずバトルに集中して欲しいとの事。

それと、ここまで激しいバトルは予想していなかったらしく、強度を上げ修復すると  
言っていた。1ヶ月は修理期間として待つて欲しいとの事だったので、俺は自分の島に  
帰ることにした。

リオル・レベル100 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル95

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル96 (メス)

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル92 (メス)

## 特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール  
アブソル・レベル94（メス）

## 特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マッシブーン・レベル98

## 特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## リーグ修理中・・・

## 41話

俺が島に帰ろうとした時、リーリエ達も一緒に行きたいと言ったので、リーリエ、カキ、マオ、アセロラ。更に島キング・クイーン達も一緒に連れて行った。

ちなみに、船は10人ぐらい乗れる船を既に作り上げている。操縦も俺だ。

この船。実は色々なシステムを搭載している。

ジェットエンジンを付けているので超加速も出来るし、潜水艦モードに切り替えれば、周りをガラス張りにして潜水モードに移行。水中の中を凄く綺麗に見ることが出来る。

この機能を付けた理由は勿論、スイレンの為だ。いつも素潜りしているスイレンの為に作り上げた自慢の船だ。

みんなもこの機能には喜んでくれている。

約1時間程で俺の島に到着した後、我が屋敷へと案内するために歩いた。

俺の屋敷は島の丘の上の方にあるので、海に行くときは殆ど車で移動しているが、今回は人数が多すぎるので歩いて行く事になったのだ。

意外と島が広いので大分歩く事になるが、その間島のポケモン達を観察出来るのでたまに良いかなと思っただ。

そして我が屋敷に到着！すると同時に、リオルがボールから出て来て早速甘えてきたので抱き上げてなでなでしてあげた。

それと、俺のポケモン達も全てボールから出してあげ、それぞれの行きたい所に行かせてあげた。

「ふむ…リョウウタはポケモンをボールには入れないのかな？」

「ボールの中だけじゃ退屈ですからね。それに、出してあげた方がストレス解消にもなるでしょう」

「そうじゃな」

ハラはニカツと笑うと満足そうに頷き、俺がポケモン達をボールから出しても大丈夫だと伝えるとみんな出した。

それぞれ遊びに行きたい所に行かせてあげ、俺は屋敷へとみんなを招き入れた。

「お帰りなさい貴方」

「パパ〜！お帰り!!」

「お帰りパパ」

スイレン、レンタ、ハルカが玄関でお出迎えしてくれた。

なんて良い子！良い妻なんだ！

言い忘れていたが、我が屋敷の大きさは甲子園球場ぐらいの大きさだ。住んでいる人数が少ないので部屋の空きは多い。

家自体が広いし2建てとなつていたので、掃除も大変つて事でスイレンの叔父様から住み込みの使用人達や庭園の管理人など様々な人を寄こしてくれた。勿論コックもだ。

ちなみに、我が屋敷に来てくれたコックは、五ツ星レストランのシェフだそうな・・・俺は妻と子供にただいまと言つた後、みんなを居間へと案内した。

居間で寛ぎながら島キング達に俺と対戦してみないかと聞いた瞬間、みんなの目の色が変わつた：

そう、みんなだ。島キング達だけではなく、リーリエを除くキャプテン達の間も変わったのだ。

「キャプテン達はすまないがスイレンに相手して貰つてくれるかな。俺は島キングとクイーンと戦いたくて」

「スイレンじゃなくて、俺はリョウタと戦いたいんだ！」

「スイレンに勝てないようじゃ、俺に遊ばれてお終いだぞ？」

「やってみないとわからないだろ！」

「しょうがない・・・」



俺はカキと家の前で1対1のバトルをして完勝した後、スイレンは和やかにシャワーズを呼んだ。

「私のシャワーズ。レベル100。相棒だよ。カキ、マオ、アセロラ。バトルしよう」

「「うん！」」

「わかった」

「それじゃあ、俺達もやりますか」

「「ああ！」」

「先にルールだけ。使用ポケモンは1体だけ。相手のポケモンを倒したらそこでお終い。俺とスイレンは勝ち抜き戦でいく」

「「了解」」

さて：：久しぶりに暴れますか！

結果だけ伝えよう。

スイレンはカキ達に圧勝し、俺もキング・クイーンに圧勝したと言っておこう。勿論、俺のポケモンはリオル。

青い波導のオーラ＋真空波＋電光石火の3点セットで大抵のバトルは圧勝する。

そうそう！今回の島キング・ハラとの戦いで新たなZリングが誕生したぞ！

青いZクリスタルにはリオルの模様。リオルZだ。

勿論、使いました！

いや、あれはヤバイね☆

リオルの波導の力が極限まで引き出せる効果だったんだ。

イーブイZのリオルバージョン的な？

俺と相棒の力の結晶だな。

その後、島キング達はそれぞれの島に戻るのかと思いきや、リーグの修理が終わるまでこの島に残りたいそうな：

俺は別にいいので許可した後、みんなはこの島を探検しに行った。

日が暮れる前には戻って来てみんなで晩ご飯を食べるルーティンがいつの間にか完成していたのは必然なのか？

みんなで食べる晩ご飯は美味しいので良いのだが：

：島キング達はこの島のポケモン達には勝てるみたいだが、キャプテン達は最終進化しているポケモン達には勝てなかったみたいだ。

みんな悔しかったらしく、リーグの修理が終わるまで、探検から特訓に変わったのは言うまでもない。

それから1ヶ月後リーグはしつかりと修理され、再び参加者達が呼ばれた。

更に観客席の量も増やしたらしく声援などが増しているという：

俺達はリーグへと再び向かった。

リオル・レベル100（メス）

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル95

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル96（メス）

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル92（メス）

特性適応力

技捨て身タックル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル94（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マツシブーン・レベル99

特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## リーグ5戦目

## 42話

さあ戻って来ましたよポケモンリーグの会場！

俺達が同等と会場に向かって歩いてみると、周りから凄いい声援と俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。俺は手を振り声援に応えると更に周りが熱気が上がった…

まあ…俺の周りには今を輝く大女優リーリエに、島のアイドル的存在マオ、熱い男で有名なカキ、美少女になったアセロラ。それに、各島のキング&クイーンが俺の周りにいるからな…仕方無いよね？

会場付近に近づけば直ぐに係員？いや、SP？黒いスーツを着た人達が直ぐにやって来て道を作ってくれた。

その道の先にはリーグ創設者ククイ博士が満面の笑みで立っていた。

「やあ。待っていたよ」

ククイ博士が和やかにそう言い、俺達を迎え入れてくれた後、軽く話しながら控え室に向かった。

最初の時の控え室より豪華って…

ククイ博士はイタズラが成功したみたいなの輝く笑顔で俺を見た後、みんなを中に入れた。

「とりあえずは、ここで待っていてほしい。時期に全開の続きの5戦目が始まるのでね」  
「了解です」

ククイ博士は手を振りながら立ち去るとみんなで楽しく喋りながら時間が来るのを待った。

さあやって参りましたリーグ5戦目！

今回の相手は手応えのありそうな女性トレーナーのランテル。

しかも、相手の感じからして相当な強者だ。

1体目はラグラージ。

俺はいつも通りマッシブーンを出して毒突きでラグラージに急接近したその時！

ラグラージはマッシブーンの真下から尻尾を振り上げていた！

「なあっ！」

流石のマッシブーンもこれは防げない！大きく吹き飛ばされた後、リョウタの前で着地したその時！ラグラージが既に接近しておりアームハンマーを振り上げていた！

直ぐにマッシブーンは爆裂パンチで応戦しようとしたが、踏み切りが甘くラグラージ

の攻撃に押し負け戦闘不能になった。

「貴方の戦い方、既に調べたわ。育て方も私と似たようなもの。本気で来なさい」

「ならば本気でいく！」

この女……俺と一緒に廃人野郎か。

俺はアブソルを出し電光石火で急接近した！

ラグラージは岩雪崩れを起こし上からではなく真正面から放って来た！アブソルは直ぐに真横に移動してもう一度加速しようとしたその時！真上から岩雪崩れがアブソルを襲って来たが、辻斬りを使い岩を切断してラグラージに接近した！

ラグラージは波乗りを使い大波を巻き起こしアブソルに迫った！アブソルは速度を落とさずそのまま辻斬りで波を横一闪！波を斬り裂きラグラージを波から落とすと同時に真下したからラグラージを斬り裂き戦闘不能にさせた。

会場は凄すぎる試合を前に言葉が出なくなっている…

「流石にラグラージだけじゃ勝てないか」

「全滅させますよ」

「その言葉、そっくりそのまま返すね」

俺とランテルは笑顔でそう言い次のポケモンを待った。

ランテルの2体目はジュカイン！

此奴…ホウエン地方の出身か？

ジユカインはリーフブレードを使い構えた。

アブソルは燕返しを使い構える。

「それじゃ、行くよ!!」

「来い!!」

ジユカインが一気に距離を詰めるとき、足が緑色に輝いた！

まさか…此奴もリオルと一緒に力を!?

ジユカインの驚異的スピードは緑色の閃光を残しアブソルを通り過ぎた瞬間爆発した！

アブソルはその場で倒れ戦闘不能になった。

アブソルの速さより上だと!?

「本気で来ないとジユカインで終わっちゃうよ?」

ランテルは余裕の笑みで俺を見て来る。

会場は驚異的スピードのジユカインに釘付けになっている。

島キング達もこの強さには驚いていた。

あの速さに対抗出来るのはリオルぐらいしかいないか？

いや、空からの攻撃で行けるか？



俺はボーマンダを出して直ぐに空に飛ぶように命じた。

「空だと安全と思うのは当たり前か」

「まさか…」

「私も君と一緒にかね」

ランテルはニコツと笑うと指を鳴らした。

ジュカインは音が鳴ると同時にリーフレードを展開し空を飛んだ！しかも空中を蹴り更に速度上げる！

「ボーマンダ…火炎放射で焼け！」

ボーマンダが放った火炎放射はジュカインに迫る！

ジュカインはその炎を避けようともせずそのまま迫って行き、炎を斬り裂き更に加速して緑色の閃光がボーマンダを通り過ぎた瞬間爆発した！

ボーマンダが地上に落ちて来ると同時に、緑色の閃光が真上から更に通り過ぎた瞬間2度目の爆発がした！

ジュカインがランテルの前に降り立つと同時にボーマンダは戦闘不能状態で地面に落ちて来た。

「空でも危険ってね」

此奴、相当やりやがる…

俺はボーマンダを戻し相手を見る。

少し考えた後、俺はジバコイルを出した。

「鋼ね…ジユカイン、瓦割り！」

「ジバコイル、バリアー！」

ジバコイルは直ぐに円形状のバリアを張りジユカインの攻撃を防ごうとしたが…

ジユカインは瓦割りを発動しながら緑色のオーラを手に纏わせ真上から一気に振り下ろしバリアを壊した！ジバコイルは直ぐに電磁砲を発射しジユカインを攻撃しようとしたが、腕に緑色のオーラを纏わせ電磁砲を弾き返しジバコイルに返して爆発させた！

更に発動させたままの瓦割りをジバコイルに当て戦闘不能にさせた。

「君の実力ってその程度だったの？1〜4戦、無双していたのに…」

ランテルは残念そうな顔をして俺の次のポケモンを待った。

これ程とは…

まだイーブイとリオルがいるが、このジユカインの実力…キツイか？

俺はイーブイを出して直ぐに電光石火を命じた。

ジユカインは急接近で迫って来るイーブイを動きを完全に見切り、手を前に出して攻撃しようとして来たイーブイを捕まえた。

「さよなら♪」

「イーブイ！ シャドーボールだ！」

イーブイがシャドーボールを放とうとエネルギーを溜めている間に、リーフブレードがイーブイを貫通した。

イーブイはそのまま戦闘不能になった。

俺はイーブイを直ぐにボールに戻した後、リオルのボールを掴んだ。

少しでも隙があればZ技を使えるが：

どうやって隙を作ればいいんだ？

「君にハンデをあげた方がいいのかな？」

「はあ？」

「Z技って言う必殺技がこの地方にあるんでしょ？使わせてあげるから見せてよ」

ランテルは笑顔でそう言いキラキラした笑顔で俺を見ってくる。

ジュカインは頭を掻きながら呆れている：

嘗められたものだな：

だが、Z技をさせてくれるなら好都合！

「行くぞリオル！」

俺はリオルをボールから出してZ技を発動させ、リオルの波導の力を極限状態にさせ

た。

「へえ〜！これが乙技!!」

「リオル専用だけだな。それじゃ、行くぞ!」

「うん!」

リオルが足に力を入れた瞬間、ジュカインの後ろに既に移動し終わっていた。その後青い閃光が光る…

「え?」

「これが俺の相棒の力だ」

ジュカインは立ったまま戦闘不能になっていた。

この瞬間、会場から一気に歓声が上がった!!

最終進化のジュカインが進化していない小さなポケモンに負けた事と、今まで見たことのない技の数々に観客が興奮したのだ!

「ありやくこれは予想外ね」

ランテルは笑顔を崩さず言いジュカインを戻した後、バシャーモを出した。

このバシャーモ…

明らかにジュカインより強い!

気を引き締め直して戦わなければ負けるな…

リオル・レベル100（メス）

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル95

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル96（メス）

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル92（メス）

特性適応力

技捨て身タックル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル94（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マッシブーン・レベル99

特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## 伝説ポケモン再び

## 43話

リーグ5戦目で、俺の最後のポケモン、相棒のリオルを出すまで追い詰められた。対して相手はまだ3体目で、バシャーモ。

4連勝しないと俺はここで負ける。

「それじゃ行くよ〜」

「俺達も行くぞ〜!」

両者のポケモンは直ぐに構え、赤い閃光と青い閃光がバトル場を巡った!

超高速で移動しながらリオルは発勁で的確にバシャーモの足を攻撃していき、対するバシャーモは炎の拳と足でリオルを倒そうとも、凄い速さの連撃を繰り返している!

だが、この体格差が勝敗を決する。リオルはバシャーモの大きな拳をしっかりと見切り、直ぐに足の攻撃が来るがそれを紙一重で躲してそこに発勁を喰らわせる。

更に戻そうとしている拳に手刀を決め、ダメージを蓄積させていく。

バトル場の赤と青の閃光は3秒ほどで収まり、両者のポケモンは初期位置に戻った。

リオルは溢れ出る青い波導に身を包み込んでおり、まだまだ戦える状態。

対するバシャーモは足を庇う姿勢を取っており、腕も上げずらそうにしていた。「私のバシャーモが素早さで負けた？」

ランテルは少し驚いた顔をしたけど、バシャーモの様子を見て笑顔に戻った。

バシャーモの体から炎が吹き荒れたのだ！

特性、猛火が発動したか？

バシャーモが咆哮を上げると同時に、ランテルがブラストバースを命じた！

バシャーモがフィールドを殴りつけると同時に辺り一面灼熱の炎が巻き起こり劫火の炎がリオルに迫って行く！

俺は電光石火を命じ、炎を避けながらバシャーモに攻撃を食らわせた！更に発勁の連撃コラボを決め戦闘不能にさせた。

「もう！調子こいて乙技させるんじゃないかった！」

「そうですね。一応必殺技ですし……」

ランテルは頬を膨らませながら怒るが、元々可愛い顔しているから全然怖くない。

むしろ可愛い……

観客席の男性陣からはランテルを応援する人が一気に増え、逆に女性陣から俺を応援する声が一気に増えた。

多分、あざとい女をぶっ飛ばせという事かな？



まあ：Z技を発動させた俺のリオルが負ける訳ないがな！

ランテルはバシヤーモを戻すと、真つ赤なボールを放り投げた！

そこから出て来てポケモンは：グラードン。

その瞬間からただでさえ温暖なこの地域に更なる熱さが増した：

肌を焦がすようなもの凄い熱さが周りを襲う。

観客席から再び無言の時が訪れた。

「グラードン：…本当の姿をお見せなさい。紅色の玉ー」

ランテルが真つ赤な玉を掲げた瞬間、玉が光り輝きグラードンの姿を変えた！

原始の姿：…本来の力が発揮されるグラードンの姿に変わったのだ！

更に：特性が日照りから終わりの大地に変わり、更に熱さが増し百熱の大地に変わっ

た：

会場にいる人全員：…この島にいる人達全員が汗だくになっている。

まさか：…レックウザに続き伝説ポケモンが出て来るなんて：

あれか？ホウエン地方は魔境なのか!?

リオル・レベル100（メス）

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル95

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル96（メス）

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル92（メス）

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル94（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マッシブーン・レベル99

特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## グラードン VS リオル

## 44話

遂にランテルの4体目に入ったが、相手が原始グラードン：

この百熱の熱さに何もしなくても体力が減っていく：

「地割れ！」

いきなり一撃必殺技か！

よく見ると、ランテルも凄い汗だけで服が透けて：

ヤバイ：：鼻血出て来たかも！

(おい！今は試合中だろ!?) by天の声

「リオル！ものまね！」

リオルはグラードンの地割れのコピーして、同時に地割れを起こした！

だが、リオルは直ぐにその場から離れ、地割れの影響下に入らないように待避した。

原始グラードンの発動した地割れは周りの地面全てを割り、リオルが発動した地割れを簡単に飲み込んだのだ！

更に：：グラードンが居るからなのか、地割れで割れた地面の下が：：全ての物質を溶か

すマグマと化していた。

「リオル！絶対に穴に落ちるな！」

原始グラードンはマグマの影響は一切受けない。

だが、この会場にいる人達は全員影響を受ける。早く此奴を倒さないと熱中症で倒れる人が出て来る！

リオルは足場になる地面、今はもう岩か：

その岩を飛び移りながら原始グラードンに迫って行く！

「ハアハア…原始グラードン。ハア…断崖の剣」

ランテルはもの凄い汗を出し、既に熱中症になりつつあった。

俺は島で色々修行を積んでいた事もあり何とか持ちこたえているといった所だ。

(ここで修行の成果が出るとはな。早くグラードンを倒さないと、対戦者もお前たちも全員倒れるぞ…) by天の声

ああ…

原始グラードンは咆哮を上げるとマグマから複数の尖った岩石の岩が出現していき、リオルに迫って行く！

「頑張って避けてくれ！」

俺は熱さで思考が停止しそうになるのを頑張って耐えながら、リオルに指示を飛ばす

が、避けるか：攻撃技を命じる事が出来なくなっていた。

リオルは次々に迫って来る岩を全て避けながら原始グラードンに迫って行き、波導を纏わせた発勁を原始グラードンの顔に当てたが全く効かなかった：

リオルはこの百熱の熱さで意識が朦朧としていたのだ！

更に波導を纏わせていたが、殆ど揺らぎきつており発勁も完全に力を発揮出来ない状態で、原始グラードンに触った感じに近い。

原始グラードン事態、既に超高温状態。リオルの可愛い手は大火傷を負ってしまったっていた：

リオルはふらつきながらもまだ岩の上に頑張つて立ち、原始グラードンを見るがもう体力も殆ど残っていない。

ランテルの方を見ると服が完全に透けており下着が丸見え状態になっていた。

(見るんじゃないぞ！今は勝負中だ！) by天の声

こんな状況下でも俺は見る物はしっかりと見てしまおうとはな：

しっかりと言いつつ、意識が朦朧としているし下着か？ってレベルだが。

まあ黒だったし間違いは無いだろう。後、以外と巨乳。

(見るなって言つたらうがあああ！) by天の声

すまん・・・もう、意識が・・・

会場全体の意識が無くなりかけたその時、ククイ博士が会場に入って来てランテルからグラードンのボールを掴み中に戻した。

ククイ博士は薄い羽織り物をランテルに向け、声を発した。

「ルール改定に伝説ポケモンの使用は禁止となってる！」

1ヶ月前のレッククウザの時の過ちをしないための処置だ！

そのルールを破ったランテルは負けとみなし、この勝負！リョウタの勝ちとする！」  
え？そのルール改定俺、知らなかったぞ？

いつ変わってたの？

：レッククウザの試合の後からだった!?

(我も知らなかったぞ) by天の声

ランテルは意識が途絶え地面に倒れ込んだ。

リオルの体力も限界を迎えていたので直ぐにボールに戻してやった。

中の方が安全だし。まだ快適だろう…

俺は意識がまだ回復していない状態でククイ博士に問うた。

「伝説ポケモンの使用禁止は同意します。」

その前に、どういった経緯で伝説ポケモンを手に入れたか気になります」

「そこは既に調べさせた」

ククイ博士からの報告によると：

4 戦目の時の相手は、ホウエン地方で伝説ポケモンを傭兵や密猟団を使い極限まで弱らせGETしたと言っていた。

ランテルのグラードンはマグマ団の幹部をしていた時に、団長のアカギと○○な関係になり譲り受けそのまま逃亡。今はマグマ団に追われている状況だった。

紅色の玉はその時に一緒に持ち出したらしい。

まさかと思うけど、5体目って：

そこは大丈夫だったみたいだ。

カイオーガなんて出て来たらみんな溺れ死ぬ！

ちなみに、ランテルの残りのポケモンは、メタグロスとルカリオだったみたいだ。

ここまで聞いた後、残念ながら俺も意識が途絶え地面に横たわった：

(今はゆっくり休め・・・) by天の声

リオル・レベル100 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル95

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル96（メス）

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル92（メス）

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル94（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マッシブーン・レベル99

特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き



## ランテルと結婚!?

## 45話

意識が完全に回復したのは丸一日経った時だった。

リーグの方は、グラードンの影響でまた修理をする事になり、暫く会場修理になると言っていた。

更に、グラードンの影響は会場だけではなく、自然にも影響が出ていた。

川の水が大幅に減っており、水ポケモン達が大変なめに遭っているとの事。

更に、川と海の温度が上がった事もあり、今は必死に冷やすための処置を施している。後、ベラ火山が噴火しそうになっていたみたいだ。

危ない危ない…

(災害レベルだな….) by天の声

ああ…本当、危ないわ。

俺が目を覚ましたと知ったランテルは直ぐに俺の所に来て謝りに来た。

グラードンは流石に止めてくれと苦笑いしながら言った後、俺はまた君と戦いと言った。

ランテルは鳴き出しながらありがとうと言い、崩れ落ちたが…

その後、ランテルはグラードンをマグマ団に返しに行くためホウエン地方へと向かうと言っていたが、まだ熱中症のせいで上手く動けないみたいだ。

結果、まさかのアカギ本人がこの島にやって来る事になった。

4戦目で戦ったアカネのレックウザは逃がす方向性となり、レックウザは自由の身となつて宇宙へと帰って行つた。

後、アカネはホウエン地方に送り届けられ、ジュンサーに引き渡されるそうなの…

そうそう！今は各島の医療施設で、今回の騒動での熱中症患者を治療中だそうなの…

流石は伝説ポケモン。被害は甚大だなあ…

俺の体の方は、後半日もすれば回復出来るので自分の島に戻る事をクワイ博士に言っていたら、ランテルも「私も行く！」との事。

別に構わないので一緒に連れて行く事にした。

その日の夜、俺はランテルと俺の島に着いた。アカギは2週間後ぐらいに来るらしい。

それまでは俺の島でゆっくりしたいとランテルは言っていた。

ランテルとバトルしながら更に強くなるう…

(バトル大好きだな) by天の声

俺はランテルとのバトルを楽しみにしながら我が屋敷へと行きスイレンに事情を説明して泊める事にした。

翌朝、ランテルが島を探検したいと言っていたので着いて行ってあげた。

その時、バトル場を見たランテルは直ぐにバトルしたいと言ったのでルカリオvsリオルのバトルが始まった。

ランテルのルカリオはリオルと一緒に波導の力を持っているのは当たり前だが、その波導の量が桁違い多い。体内に留めることが出来る力が段違いに多いのだ。

その量の違いはリオルも分かっていたので気にしていなかった。

リオルが一番気にしていることは、その波導の力の使い方。自分と違う使い方をしていたらそれを学ぼうとしているのだ。

結果は…流石は進化系。

リオルの培ってきた力の上を行っていた。

リオルの使っていた波導を使い方、ルカリオは既に習得済みだったのだ。

スカイウォーク含めて…

更にボーンラッシュと言う技。波動の力で形成して攻撃する技なのだが、その波導量が桁違いに多いルカリオのボーンラッシュは大きく丈夫。更に変化自在ときた…

更にルカリオと言ったら波導弾！この弾も波導の力その物で、ルカリオの放つ出量が

凄まじく通常の攻撃力を遙かに超えている。

もしかしたら、グラードンと良い勝負が出来るかもしれない・・・

そうそう、ランテルの相棒はルカリオだった。

武闘派の家系らしく、小さい時から一緒に遊んでいたリオルと一緒に旅に出たと言っていた。御三家のバシャーモを捕まえたのは、道中でポケモンに虐められていた所を助け、ラグラージはアクア団の奴等から助け出し、ジユカインは森で迷子になった時に出会ったGETした。

メタグロスはダイゴと言う人から貰ったらしい。

リオルはルカリオに弟子入りをして更に強くなるため修行に入った。

ランテルのポケモンのあの力。ラグラージ、ジユカイン、バシャーモ。それぞれが凄く強く速かった。どうしたらあそこまで強くなれるか聞くと、どのポケモンでも潜在能力と言う物があるらしく、それを目覚めさせれば仕えるそうなの……

何故、そんな貴重な事を教えてくれたか聞くと、俺の事が好きだと言われた……

(はあああああ!) by天の声

え〜と? ランテルが俺の事?

いやいや! 俺にはスイレンがいるし! ランテルには先に話していたはずだし……

え? 愛人でも良いって? いやいや! ダメだろ!?

「もしかして…私の事嫌い？」

断じてそれはない！

と言うか、ランテルって結構可愛いし！きよ…デカいし…

「そんな所見てたんだ」

あ、そ…そうだよ！

「じゃあ、見た責任って事で私を娶って？」

なあ！

ちよつと待ってくれ！

さ、先に聞くけど、俺の何処を好きになったんだ？

「一目惚れ」

おおお！？

マジか！いや、嬉しいけど！！

「ダメ？」

と、とりあえず俺の妻に会おう！

話しはその後でだ！

「は…い！」

屋敷に再び向かう事になりランテルを連れて行こうとしたら、ルカリオとリオルは修

行したいとの事で別行動をした。

まあ俺の島だし悪い奴はいないから大丈夫だ。

屋敷に向かう最中、ランテルの凄いスキンシップをしてくるので、我慢するのがキツいぜ：まだ手を出してないから安心して!?

(絶対に手を出すだろ・・・) b y天の声

いや! まだ大丈夫だ!

やつて来ました我が屋敷。

我が家なのに入るのが怖い：

俺はゆつくりとドアに手を伸ばすと先にドアが開いてスイレンが出て来た。

「とりあえず、話しを聞きますね。居間へどうぞ」

「はい」

俺達は居間で話をして、ランテルの事をどうするかスイレンに聞いた。

「別に私は良いよ?好きな者同士繋がることは悪い事じゃないし」

スイレンは笑顔でそう言い、夜に俺の部屋で集合だそうな：

ランテルは顔を赤くして俯くし：

なにこの子?可愛いんだけど!

(ちよつとまてえええええいい!!) b y天の声

ん？

(ん？じゃねえぞ！お前・・・ランテルとも・・・) b y 天の声

そこは聞くな。大人の事情ってやつだ。

スイレン達は色々準備をしたいと言って部屋を出て、夜になってしまった。

リオルとルカリオも帰って来ており、俺はリオルと部屋で寛いでいた。

そしてやって来たスイレンとランテル！しかも夜着だど！？

スイレンは別にな？いつも一緒だし、夜だから分かるんだ。

ランテルの夜着が非常に！ヤバい！うん！息子も凄く元気だよ！

まって！このまま書くとR入っちゃう！

てつ事で：イチヤコラを流れるにやりましてランテルを抱きましたよ。

後、一夫多妻制も良い物でしょ？ってスイレンに言われて俺は頷いてしまった。

後日、ランテルは俺の妻になりました！

それと、一夫多妻制は認めるけど先にここに連れて来てからして欲しいとの事。

全然OKだ!!

(いいのかよ・・・) b y 天の声

それからはと言う物、アカギがアローラ地方に到着する約2週間まで、ランテルと昼間はポケモンの修行に励み、夜はスイレンを混ぜて激しい夜を満喫しました。

後、ランテルのお腹に子供ができました：

嬉しい！

生まれてくる子が女の子ならリヨウテル。男の子ならランタにすることになった。

ランタとハルカは兄弟が増えることに大喜びしてはしゃいでいた。

そう言えばランタとハルカ、昼間家に居ないことが多いけど、どこに行っているんだ？

「ポケモン達とお散歩〜！」

「マツシブーンに肩車して貰ってる〜！」

ポケモン達と遊んでいたのか。凄く良い笑顔で言う2人が凄く可愛い！

スイレンはシャワーズ達と湖で泳いでいたらしい。

アカギがこの地方に到着したと知らせを受けた後、ランテルと2人で自家用ヘリに乗り本島に飛び経った。

リオル・レベル100（メス）

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル95



## 特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン  
ボーマンダ・レベル96（メス）

## 特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル92（メス）

## 特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール  
アブソル・レベル94（メス）

## 特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マッシブーン・レベル99

## 特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## 波導の極

### 46話

ランテルと本島にあるメレメレ島のハウオリシテイへと着いた俺達は、アカギと合流した。

「初めまして。俺はリヨウタ」

「初めまして。私はアカギだ」

「久しぶりですアカギ様……」

「そうだな。例の物を返して貰うぞ」

「はい」

ランテルはグラードンが入ったボールと紅色の玉をアカギに渡した。

「私達を裏切った事はこの際どうでもいい。ランテル、私とハウエンに帰らないか？」

「せつかくの誘いですが、お断りさせて頂きます」

「ほう？」

アカギは俺の顔を見ると頷いた。

「まあ……お前も女だしな。リヨウタと言ったか？幸せにしてやつてくれ」

「必ず」

「ではな。いずれホウエンに来る事があれば私の所に来るといい」

「そうさせて頂きます」

アカギは船に乗り込むと直ぐに出発した。

「リヨウタ〜！」

ランテルは直ぐ俺に抱きついた。

やっぱ、元組織のトップとは言え、会うのは怖かったか…

俺は優しく腕を回し抱きしめてあげた。

「ねえねえ！早く帰って続きしたい!!」

…今なんと？

「と、とりあえず帰ろつか?」

「うん!」

ランテルと俺は自家用の船に乗り島へと帰っていった。

今晚は2人を相手にイチャコラしますか!

翌朝、俺達はいつもの日常に戻りリーグ修復までリオルはルカリオに修行して貰い、アブソル達はバシヤ〜モ達に修行して貰った。

リーグが完成すれば、5ブロックを勝ち進んだ5名がバトルをする事になるので、今のうちに強化特訓をしとかなないと勝てないかもしれないのだ。

勿論、リョウタのブロック以外は、島キングハラ、島キングクチナシ、島クイーンライチ、島クイーンハプウが勝ち進んでいた。

やつぱこのメンツか：

5人だと、どういう組み合わせになるんだ？

俺はスイレンとランテルを連れながら島を巡回した。

レンタとハルカは島のポケモン達と遊びに行っている。

特に問題無く島の巡回をしていると、森の中からリオルとルカリオの修行がエスカレートしたのか、青い波導と紺色の波導が天に向かって伸びていった：

その直後激しい爆風と爆発が起こり、俺達は急いでその場に向かった。

現場ではリオルとルカリオがそれぞれ傷付きながらも波導を纏いながら睨み合っていた。

ルカリオは俺達に来るなどジェスチャーしてリオルに向き直る。

リオルは超高速スピードでルカリオに接近するが、ルカリオは片手でリオルを弾き飛ばし森の中に飛ばされるが、直ぐに波導弾を連発してルカリオを攻撃するものの手で弾かれる。

リオルは波導弾を更に撃ちながらルカリオに突貫し発動を使いルカリオを攻撃しようとして急接近した瞬間、リオルの真下から紺色のオーラがリオルを吹き飛ばしルカリオのグロウパンチで再び森の中に吹き飛ばされる！

俺のリオルが…こんなにあっさり負けるだど？

しかも、あの状態。波導を完全解放した状態だろ!？

ルカリオも波導を完全解放しているみたいだが、こんなにも差が出るのか。

「ルカリオはリオルの更に奥にある潜在能力を出そうとしているわ」

「更に奥の？」

あれ？そう言えば森の木々を壊したらマツシブーンも来るはず？

俺が周りを見渡すと、マツシブーンが近くの茂みで倒れていた。

「多分、ルカリオの修行は終盤にさしかかっているのかも」

「私はマツシブーンを治療しておく」

「頼んだスイレン」

「まかせて」

スイレンはマツシブーンを治療する為、森に住んでいるポケモン達を呼び自宅に運んで貰った。

その間、俺とランテルはリオルの修行を見守ることにした。

リオルの修行に変化が出て来たのは30分ほど経った時だった。

今まで青かった波導のオーラが一瞬白くになり、ルカリオもランテルも驚いていた。

「今のは…ルカリオでも辿り着けなかった領域の…?」

「え?」

ルカリオはランテルの方を見た後、キーストーンを指さした。

「リヨウタ。もしかしたら、リオルはルカリオが手に入れる事が出来なかった力を仕えるかもしれないわ。その為にも、メガ進化させて貰うわね」

「わかった」

「ルカリオ!メガ進化よ!!」

ランテルがルカリオをメガ進化させた瞬間、水色のオーラが急接近してルカリオを吹き飛ばそうとしたが、メガルカリオの回し蹴りで水色のオーラを蹴り飛ばした。

リオルの青かった波導のオーラは水色に変わり、時折白く輝く波導を見せる。

「波導の極」

「え?」

「波導の最終奥義よ。ルカリオはその奥義を修得出来なかった」

「まさか、リオルがその奥義、波導の極を習得出来た?」

「後1歩の所まで来ているわ」

と言うか、ランテルは波導の極を見たことあるみたい？

「あ、私の師匠がね。波導の極を習得しているから分かるんだ」

「なるほどね」

空手一家だったもんな。

リオルの方を見ると、森の中の一部に水色のオーラが見える。しかも、大きく膨れあがっているようにも見えたその瞬間！オーラが辺り一面に一気に広がりもの凄い暴風が襲ってきた！

俺とランテルが目を庇っている時、真横に何かが通り過ぎた。その方向を見るとメガルカリオが腹を押さえて立っていた。

俺達は直ぐに前を向くと、白く輝くオーラを纏ったりオルが居た。

「波導の極。リオルは辿り着いたのね…」

「凄いぞリオル！良くやったな！」

リオルはオーラを解除して俺に抱きついて来たので、なでなでしながら抱きかかえた。

メガルカリオもメガ進化を解除してランテルの側に来て回復して貰った。

「波導の極。この力でリーグ優勝しちゃって！」

「おうー」

リオル・レベル100（メス）

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル95

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル96（メス）

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル92（メス）

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル94（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）



マツシブーン・レベル99

特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## 潜在能力開花!

### 47話

リオルが波導の極を習得している時、アブソル達もそれぞれ潜在能力を開花していた。

アブソルの特訓相手はバシチャーモ。

ボーマンダの特訓相手はジュカイン。

イーブイとジバコイルの特訓相手はラグラージがしていた。

マツシブーンはね? リオルの修行を邪魔し(怒り)に来たマツシブーンをルカリオが倒した。

スイレンによって助けられた後、どこかに行つたみたいだが:

バシチャーモの猛特訓の成果でアブソルの開花した能力は、自身の気配を遮断する&幻術を仕える。

相手に幻術をかけ、更に気配を消しながらの死角からの攻撃。更に、スカイウオークも習得していたので、空中からの強襲も可能。

今のアブソルならリオルと良い勝負が出来るだろう。

ジュカインの猛特訓の成果でボーマンダが開花した能力は、防御、特防を捨てた超火力&スピード。最強の矛を手に入れたのだ。

ヒット&ウェイで相手を翻弄しつつ攻撃する。相手が怯めば連続攻撃と言った超攻撃型。

更に、空中でも超加速が出来るようになった。

ラグラージの猛特訓の成果でイーブイとジバコイルが開花した能力はそれぞれ違う。

ジバコイルは最強の盾を手に入れた。

攻撃・特攻は捨てる事なく、防御・特防を限界突破させ更に強化したのだ。

ラグラージがイーブイを攻撃するとき、守る為に開花した能力だ。

イーブイは特殊な力に目覚めた。

イーブイの進化系達の力の一部を仕えるようになったのだ！

サンダースなら10万ボルトや雷。シャワーズなら水の波導やハイドロポンプと言ったそれぞれの得意技を一時的に仕えるようになったのだ！

ちなみに、どこかに行ったマッシブーンは…

ウルトラホールに行きアクジキングに稽古を付けて貰っていた。

接近戦なら負けないと思っていたマッシブーンが2度も簡単にやられたショックから立ち直り、直ぐに猛特訓に入ったのだ。

その頃島キング達は…

ランテルとリョウタのポケモンが自分達のポケモンよりも遙かに強い力を手に入れているので、超特訓を開始していた。

どこまで強くなれるかは未知数だ。

リーグの修復から約3ヶ月…

遂に修理を終わらせたリーグ会場では、全開より確実に被害が大きくなると予想し色々な箇所を何十にも丈夫させていた。

更に、全開みたいに超スピードのバトルも見られるように、スーパースローカメラも搭載して、録画再生を出来るように改良もした。

ちなみに、全開の試合の映像はグラードンが原始回帰した時にカメラが熱で膨張し爆発して記録が無いそう…

さあ戻って来ましたポケモンリーグ!

色々な所を修理&改善を終えたリーグ会場は凄く豪華になっていた。

更に! 3ヶ月も空いた為、リーグ戦を生で見に行けなかった人達が溢れかえってい

た。

そんな所に、大会優勝候補である俺が到着した瞬間、周りの人達から歓声やらなんやらを浴びる事となった：まあ手を振って応えるけどね。

俺の後に到着した各島のキング&クイーンも同じような対応をしていた。

それぞれ3ヶ月前とは明らかに纏う雰囲気が違う。

なんかこう：必ず倒してやる的な：

各ブロックを勝ち進んだ5名による組み分けは、色の付いた紙をそれぞれ箱の中から取りだし、一緒の色同士が戦う事となった。

俺は黄色。

ハラは赤色。

クチナシは青色。

ハプウは赤色。

ライチは青色。

：俺にまさかの待てが来るとは。

残念だ：

島キング達も凄く残念そうにしていたが、相手は島キングと島クイーン。

しかも、上手いごとキングとクイーンが別れた事もあり会場も俺も、今回の試合は凄

く興味がわく。

面白くなりそうだ…

それと、マツシブーンがウルトラホールから帰ってきて、一緒にリーグに挑戦出来た。

リオル・レベル100 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル100

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル100 (メス)

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル100 (メス)

特性適応力

技捨て身タックル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル100 (メス)

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マツシブーン・レベル100

特性ビーストブースト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## リヨウタvsハブウ

## 48話

ハラvsハブウの試合はもの凄く熱かった。

特に凄かったのは、キノガツサとガブリアスの試合だ。

キノガツサのマツハパンチをガブリアスはドラゴンクローで受け止め、大地の力で真下からキノガツサを吹き飛ばした！更にストーンエッジで追撃しようとしたが、アイアンテールで迫って来る岩を粉碎し着地した瞬間、ソーラービームをガブリアスに放った！

ガブリアスは空に飛び上がり、ソーラービームを回避した後ギインパクトを発動させキノガツサに迫る！キノガツサは気合いパンチを発動させ集中力を高め、攻撃範囲に入った瞬間パンチを炸裂させた！ガブリアスとキノガツサの攻撃が激しくぶつかり合い爆発した後、ガブリアスだけがその場に立っていた。

ハラvsハブウの試合を制したのはハブウだ。

2人は握手を交わした後、控え室に戻っていった。

クチナシvsライチのバトルはクチナシが圧勝していた…



ライチの相棒ルガルガンも結構頑張ったんだが、俺のアブソル同様、クチナシのアローラペルシアンも気配を遮断出来るようになっていたのだ！

ルガルガンは攻撃が来ると直感しストーンエッジを自身の周りに発動させペルシアンを攻撃しようとするが、全く手応え無く気がつけば足や胴体に切り傷が数カ所…

最後に、Z技ブラックホールイクリプスを発動させルガルガンは闇の球体に飲まれ爆発した。

クチナシの勝利で終わった。

そしてやつと俺の番が来た！

クチナシとハプウは黄色と赤色の入った箱から一枚取り、クチナシが赤。ハプウが黄色となった。次の俺の対戦相手はハプウだ！

「やつとか…お主を倒す為ここまで来たのじゃ」

「ハプウさん。俺は負けませんよ？必ず貴女を倒します」

「いいよるわ…」

ハプウと俺は握手を交わし会場に入った。

リーグ戦ハプウvsリョウタ！

やったるでえ！

ハブウの1体目はシロデスナ。

いきなり面倒くさいゴースト入りのポケモンか…

俺はアブソルを出した。

ここで出し惜しみして負けるのだけは嫌だ。最初から全力で行く！

「アブソル、気配遮断。辻斬り！」

「む？シロデスナ、地震じゃー！」

シロデスナが地震を発生させた時、既にアブソルは気配を完全に遮断しておりシロデスナに黒い線が入った瞬間、戦闘不能になった。

「…ええ？」

会場の声も実況していた人も、控え室にいたハラ、ライチ、クチナシもアブソルのトレーナーである俺自身も何が起こったか分からなかった。

気配遮断出来る事はわかっていたが、ここまで凄いとは思わなかったんだ。

黒い一閃がシロデスナを襲った後、戦闘不能で倒れたんだ。

気がつけば、アブソルは俺の前に戻って来ていたし。

(気配遮断とかチートだろ) b y 天の声

久しぶりだな天の声！

(忘れられていそうだったからな。出て来てやったわ！) b y 天の声

ハプウはシロデスナを戻しトリトドンを出して波乗りを使って広範囲を攻撃してきたが、その波に黒い一閃が輝いた瞬間、波が切断された！更にトリトドンがバランスを崩し波から落下したその瞬間、十字の黒い線がトリトドンを攻撃した。

トリトドンが地面に落ちて来た時には既に戦闘不能になっていた。

「動きが読めん…」

ハプウは悔しそうに呟きトリトドンを戻した後、ゴローニヤを出した。

「大爆発じゃー！」

ゴローニヤは自身を大爆発させアブソル諸共戦闘不能にさせようとしたが、アブソルに攻撃は届かなかった…

アブソルはスカイウオークを使い空に居たからだ。

ハプウはゴローニヤを戻した後、ワルビアルを出した。これで4体目だ。

「噛み砕くじゃー！」

「避けて燕返し！」

アブソルが攻撃を避けた瞬間、燕返しをワルビアルに当て戦闘不能にさせた。

ハプウはワルビアルをボールに戻した後ダグトリオを出してきた瞬間、アブソルはダグトリオを睨み付ける。

幻術で、相手はアブソル姿が見えなくなっているのだ。更に気配遮断もしているのだ。

完全なステルスアサシンだ。

ダグトリオはラストアカノンを横風に放って来たが、アブソルはスカイウオークをしい空から迂斬りで強襲し一閃。ダグトリオの特性頑丈で耐えきりはしたが、もう一閃浴びせて戦闘不能になった。

ハブウは見えないアブソルに苛立ちを覚えるものの、攻略の鍵を探してもいたが、なかなかみつからない。最後のポケモンであるバンバドロを出した時、周りの空気が重くなり空が黒くなった。

「Z技・ブラックホールイクリプス」

「Z技・ライジンググランドオーバー！」

アブソルの出現させた黒い穴（ブラックホールイクリプス）が、バンバドロがZ技を発動するよりも早く飲み込んでいき、穴の中で大爆発した。

バンバドロが地面に落ちた時、既に戦闘不能になっていた。

「ワシの負けじゃ……」

「アブソル、良くやった！」

俺はアブソルを撫でながら褒めてやった。

「お主のアブソル、危害の強さじゃ」

「厳しい猛特訓を終えましたからね」

「その特訓とやら、ワシにも教えてくれぬか？」

「良いですけど、俺の島に来て貰いますよ？」

「構わん」

ハプウをリーグが終わった後、俺の島に招き入れる事にした。

それと、圧倒的強さで勝利を収めた瞬間、会場が沸いた。

「優勝はリョウタだ！」とか「リョウタ好き〜！」は言われなかったな…

(それはまず無いだろうな) by天の声

俺のアブソルを女医さんに預けポケモンを回復させて貰った後、決勝戦が始まる。

クチナシと俺のバトルだ！

クチナシさん。すごく良い笑顔で俺を見た後肩を軽く叩き…

「お前を倒せるのは俺だけだな」

そう言い部屋を出て行った。

それ言っただけなら恥ずかしいだろうに…

リオル・レベル100 (メス)

特性不屈の心

技電光石火、波導弾、まねっこ、発勁

ジバコイル・レベル100

特性頑丈

技電磁砲、トライアタック、バリアー、ラスターカノン

ボーマンダ・レベル100（メス）

特性石頭

技流星群、火炎放射、鋼の翼、思念の頭突き

イーブイ・レベル100（メス）

特性適応力

技捨て身タツクル、電光石火、アイアンテール、シャドーボール

アブソル・レベル100（メス）

特性プレッシャー

技サイコカッター、滅びの歌、辻斬り、燕返し（つばめがえし）

マッシュブーン・レベル100

特性ビーストブレスト

技爆裂パンチ、飛びかかる、雷パンチ、毒突き

## 初代チャンピオン誕生！

## 49話

遂にリーグ決勝戦！

対する相手はクチナシ！必ず勝って、アローラ初代チャンピオンになってやる！

リョウタvsクチナシ

「出てこいサザンドラ」

んなあ!?!いきなり厄介やな！

「出番だマツシブーン！」

お前の新たな力、見せて貰うぞ！

マツシブーンは出て来た瞬間、全身からビーストブーストを発し赤黒いオーラを体に

纏う。

「先手必勝だ。悪の波導！」

「躲して爆裂パンチ！」

マツシブーンはサザンドラの攻撃を躲すどころか、そのまま突っ込んでいった！

(命令無視か) by天の声

俺の命令を無視しやがった・・・後でお説教だな。

マツシブーンは悪の波導の中を突っ込んで行くが、しっかりと攻撃を受け流していた！

ビーストブーストの赤黒いオーラを前面に展開して、攻撃を全て受け流していたのだ！

マツシブーンは更に加速して爆裂パンチをサザンドラの腹に当て天高く殴り飛ばした！

「破壊光線だ！」

サザンドラは空中から破壊光線を発射したが、マツシブーンはビーストブーストのオーラを拳から腕に纏わせ破壊光線に振り払い消し去った…

「トドメをさせ！」

マツシブーンは一気に跳躍しサザンドラの真上に行くくと毒突きを背中当て更に空を蹴り落下速度上げ地面に突き飛ばした！

マツシブーンもスカイウォークを習得していたのだ。

サザンドラは今の攻撃で戦闘不能になり、ビーストブーストの効果で攻撃力が強化された。

「凄いでマツシブーン！」



(凄すぎだろ・・・) b y天の声

マッシブーンは決めポーズを取り応えた。

そのポーズが色々と面白く、会場にいる観客達も笑ってしまう。ちなみに、俺も笑ってしまっていた。クチナシも心なしか笑っているようにも見えた。

マッシブーンの能力はビーストブーストのオーラを自在に操れる事なのか？

それとも、まだ見せていない能力があったりするのかな？

(それは自分で確かめる事だ) b y天の声

そうだな。追々確かめる事にするよ。

クチナシの2体目はワルビアル。

「ワルビアル、砂地獄だ！」

「爆裂パンチ！」

ワルビアルがマッシブーンの足下を砂地獄に変える直前、マッシブーンはスカイウォークを使ってワルビアルに急接近して爆裂パンチを頭上から殴り落とした！ワルビアルは顔を地面に埋めた状態で戦闘不能になった。

更にビーストブーストで攻撃力強化された。

「一撃で倒されるか…UB。嫌らしいな。おいククイ！このポケモンは反則にはならないのか!？」

『UBはならないよ。伝説ポケモンではなく、別の種類に分類するとルザミーネ代表からも言われている。UBはUBと分別される事になっているんだ』

「つち…やつぱ面倒くせえな。出てこいヘルガー」

（わかるぞその気持ち…どう考えてもUBは伝説ポケモン級に強い！それをあえて伝説扱いにしない理由…その力を確かめたいのだからな…）by天の声

そうなのか？それじゃあ…最終的にはUBも使用禁止かな？

（それは運営側に聞け）by天の声

クチナシはヘルガーを出し、嘔み砕くを命じて接近戦を持ち込んできたが…

マッシブーンは拳から腕にビーストブーストを纏わせヘルガーの攻撃を受け止めたのだが、その攻撃はオーラにしか届かず、マッシブーン事態にはダメージを与えることが出来なかった！更に、オーラを纏っている拳（手）がヘルガーをがちり掴み、空いている手に爆裂パンチを発動して超高速連打でヘルガーを仕留めた。

更に、ビーストブーストで攻撃力強化される。

「一撃当たったらお終いか…全く。嫌いになるぜ。次が俺の最後のポケモンだ。行けペルシアン」

クチナシはペルシアンを出し気配遮断をさせた。

確かに気配遮断は有効だが、一番有効なのは幻術。相手に自分の姿を見せない事だ。

更に気配遮断をして一切相手に感づかれずに戦えれば最強。

(それ、もうチートだぞ) by天の声

「辻斬りだ！」

「マツシブーン。とりあえず受け止めてあげて」

マツシブーンはペルシアンが動くよりも先にペルシアンを押さえ込んだ！

「あの凶体で!？」

「あ、そだ。クチナシさん。気配遮断も強力だと思いますが、まずは自身の姿が見えていない時に使わないとあまり意味ないですよ」

「…俺の負けだ」

クチナシは両手を挙げて降参した。

この勝負。俺の勝ちだ!!

マツシブーンはペルシアンから離れると俺の所に戻って来た。

「良くやったなマツシブーン！」

「今だ・・・ボソ」

ペルシアンは辻斬りでマツシブーンを背後から襲おうとしてきた！

だが…

「まあ悪タイプの使い手ですからね。マツシブーンも油断はしてませんよ」

マッシブーンは飛びかかって来るペルシアンの顔を鷲掴みにし、俺から少し離れた後空中に飛んだ。

「一撃で決めてあげて」

マッシブーンが頷くと、毒突きを発動させペルシアンに突き刺しながら急降下し地面に激突させた!

間違いない戦闘不能だ。

(隙がねえな……) by天の声

悪タイプの場合は特にね。何してくるかわかったもんじや無い。

これで俺は完全勝利となり会場から「チャンピオン誕生だ〜!」等色々と賞賛してくれた。

まあ、その中で「化け物だ」「チーターだ」等と言っている奴等がいた。

後で会いに行つてやろう。

俺がそいつ等に目を向けると走るように逃げていくので、マッシブーンがビーストブーストのオーラで分身を創り出しそいつ等を捕まえた…

ビーストブーストってこんな使い方も出来たの!?

え?ウルトラホールで特訓していた?

(もう影分身だな) by天の声

掴まった奴等は必死に謝りまくりマッシブーン(分身)から解放された後、全力ダツシユで逃げていった。

その後、ククイ博士から表彰とトロフィーを頂き、俺は初代チャンピオンとなった。

アローラ地方初代チャンピオン・リョウタ

使用ポケモン

リオル

アブソル

マッシブーン

残り3体未使用。

ジバコイル

ボーマンダ

イーブイ

ちなみに、リーグで出番が無かった3体は島に帰った後、しっかりと相手をしてあげた。

(戦いたいたかったのに戦えないのは嫌だったろうな) b y 天の声

だよな・・・

戦えなかつた恨みなのか、いつもよりも凄く気迫迫る勢いで攻撃してくる此奴ら・・・  
めつちや怖かつたぞ!

特にボーマンダ! 戦える喜びからか、もの凄い笑顔でとんでもない攻撃してくんな!  
流星群を降らしながら、火炎放射で燃える岩・・・隕石が無数に落ちてくるとか怖すぎだから!

(まあ・・・完全燃焼させるには仕方ないだろ。諦める) b y 天の声

俺と俺のポケモン達の完全燃焼させる為の戦いは半日程かかった・・・

ちなみに、俺が使用していたポケモンはリオルだ。

だつてさ・・・最後の方なんか、1体5・・・

リオル対アブソル、マッシブーン、ジバコイル、ボーマンダ、イーブイが連携してきてからな!

リオルも波導の極を発動してねじ伏せたけど、やつぱ、アブソルが一番きつかった・・・  
幻術かけて強襲つて・・・相手にしてみてもわかつたが、アブソルえげつな!

(今更!? ) b y 天の声

相手にして脅威がわかつたよ・・・味方でよかつた〜!

(そのアブソルにすら勝てるのがリオルか・・・一番相手にしたくないのはこっちだな)

b y 天の声

そうだな・・・

## チャンピオン後の生活（完結）

### 50話

初代チャンピオンになつてやる事が増えるのかと思えば、そうでは無かつた。

リーグ戦の時は行かなければならないが、それ以外は好きにしてくれて大丈夫と言う事だつたのだ。時折イベント等があるので、参加出来る時は来て欲しいぐらいだそうな

：

後、ランテルが子供を産んでくれた。

元気いっぱい生まれてきた女の子の名前はユキ。

理由は冬に生まれたから。

ちなみに、ランテルの産んだ子は双子で、もう一人は元気な男の子。名前はリョーテル。

子供が出来た時に決めていた名前と違うが、ランテルがその名前をつけたので俺は何も言わない。

俺達は殆どこの島で暮らしているが、時々家族と一緒に本島に行き買い物等をしてい



あ、そうそう！

俺が初代チャンピオンになって早数年（5年程）経った時、マオが島に訪れた。

なんでも、この島で一緒に暮らしたいそうなの…

急に来てそう言われた時はビックリしたが、スイレンとランテルは新しい家族が出来ると嬉しがり、マオと結婚する事となった。

普通にビックリだよ…

しかも、一緒に暮らしたい…結婚になってたし…

スイレンもランテルも嬉しそうにしていたし、マオは照れくさそうだったけど…

（本当はリョウタも嬉しいだろ？） by天の声

う、うん…

マオがこの島に来た理由は、俺達が楽しそうに買い物をしている光景を目撃して、私はまだ結婚も出来てないと落ち込んでいたから…

マオはスイレンと同一年で30歳。（五年経ったから）

ちなみに、ランテルは28歳だ。

マオは結婚を諦め切れなかったのと、スイレン達と楽しく暮らしたいと言う願望もあり、俺と結婚して子供も産みたいと密かに思っていたらしい…

そして、スイレンとランテルとマオとほぼ毎晩イチャコラし続けた結果、マオにも子

供が出来た。

あ、言い忘れていた・・・

スイレンとランテルは、また子供を産んでくれた。

生まれてきた子は2人とも女の子。男の子の生まれてくる割合が確実におかしい！

流石にこの流れでリーリエも来ないだろうかと思っていたら・・・

（フラグを立てるんじゃない！）by天の声

すまん：リーリエもマオと一緒に気持ち良かったらしく、自分の子を産みたいと思っていた。

結果、スイレン、ランテル、マオ、リーリエが俺の妻となり、一夫多妻制となった。

後、リーリエにも子供が出来た。

（一夫多妻制とか羨まし過ぎるわ！しかも美女ばかり・・・）by天の声

許してくれ・・・

俺は年に一度開かれるリーグに行き、チャンピオンの座を維持し続けている。

それから更に数十年・・・

俺は初代チャンピオンのまま。スイレン、ランテル、マオ、リーリエは更に可愛くなり、甘えてきてくれる天使&妻。

レンタは既に島巡りを終え、ハウエン地方のジムバトルに挑戦している最中。相棒はエルレイド。既に4つのジムバッチを集めたと報告も聞いている。

ハルカも島巡りを終えており、ポケモンコンテストに出たいと言っていたので、ハウエン地方で開催されているコンテストにポケモンと一緒に出ている。

相棒はサーナイト。ハルカは2つのコンテストで優勝したと喜んで報告してくれた。

レンタとハルカは2人でハウエン地方を旅して今でも仲良く行動しているそう。

リョーテルとユキは、俺の島で実った木の実などを本島に売りに行っている。

ユキは銀髪が美しく煌めく美少女になって、リョーテルは金髪が似合う美男子に成長している。ユキとリョーテルが本島で木の実を売ると1時間も掛からずに完売するほど人気だ。

勿論、木の実自体も良い物を売っているものもあるが、双子目当てで来る人の方が多い

ユキの相棒はアローラロコン。リョーテルの相棒は通常のキュウコンだ。

アオイとユウキは、2人で島巡りをしている最中。

今はメレメレ島で島巡り中だ。

アオイの相棒はモクロー。

ユウキの相棒はアシマリ。

更に数十年経つ頃には、レンタはカントー、ジョート、ハウエン、シンオウ、イツシユ、カロス地方全てのリーグ戦で優勝を手にした。

ハルカもコンテストが開かれていて、各地方のマスターランク全ての部門を制覇して、レンタとハルカは俺の所に帰って来た。

リョーテルとユキの双子コンビは俺達の島でポケモン達と遊んだり、木の実の手入れをしている。

アーカラ島で仲良くなったオニドリル達が双子ペアを手助けしてくれているので嬉しい。

アオイとユウキも島巡りを終えて、俺達の所に帰って来た。

結構遅かったので何かしていたのか聞くと、島巡りを始めた時、ククイ博士からポケモン図鑑を貰ったので、ポケモンの情報を埋めたかったと言う事だった。

その図鑑はロトム図鑑。ククイ博士が改良したポケモン図鑑だった。

後、年に一度のリーグ戦が子供達が戻って来た時期に開催していた。

挑戦者の名簿の中には、子供達の名前がしっかりと記載されていた：

俺の子供達がこのリーグ戦に挑戦か。俺の所まで勝ち上がってきて欲しいな：

（お前の子達だ。誰かが勝ち上がってくるだろうな） by天の声

そうだな。楽しみだ。

そして、リーグ戦を見事勝ち進みチャンピオン戦の切符を勝ち取ったのは、レンタだった。

「レンタとバトルか。手加減はしない。勝ちに行くぞお前達！」

俺のポケモン達はそれぞれ力強く頷き、俺はチャンピオン戦の会場へと向かった。

そして…俺はチャンピオン戦で初めて負けた。

勿論手加減はしていない。レンタが俺より上だったと言う事だ。

チャンピオン防衛戦は30連で終わりとなった。

(エルレイドのカウンターは見事だったな…) by天の声

ああ…俺のリオルでもアレは無理だ。完璧なカウンターだった。

(今まで…)苦勞だったな) by天の声

お前もな…今まで見守っていてくれてありがとう。感謝してる。

「強くなったな、レンタ」

「はい。父上！」

俺はレンタと握手を交わし、頭を撫でた。

「これからは、レンタがチャンピオンとしてこの地方を守ってくれ」

「はい！」

「皆！新たなチャンピオンにもう一度、盛大な拍手を！！」  
会場に居た全ての観客達、俺の家族、リーグ挑戦者達全ての者達が拍手を送った。  
アローラ地方、2代目チャンピオンはレンタ！  
これから、この地方をよろしく頼む！

それぞれの親と子供の名前と歳を纏めておこう。

後、俺の妻達が新たに子供を産んでくれたことに感謝。

夫 リヨウタ43歳

妻 スイレン40歳

息子 レンタ22歳（2代目チャンピオン）

娘 ハルカ20歳（コンテスト総合優勝者）

娘 エレイン15歳

娘 カノン13歳

妻 ランテル38歳

息子 リョーテル18歳（双子兄）

娘 ユキ18歳（双子妹）

息子 ソラ15歳

娘 シロ13歳

妻 マオ40歳

娘 アオイ15歳

娘 サクラ3歳

妻 リーリエ40歳

娘 マキノ3歳（双子姉）

娘 ユウキ3歳（双子妹）

気がつけば16人の大家族になっているが幸せだ。

これからも、俺は家族を愛し、人を助け、夜のイチヤコラを楽しむぜ！

（まだやっていたのか!!） b y天の声

まだいたの!?

（・・・1人は寂しいからな） b y天の声

これかもよろしくな！

（よろしく頼む） b y天の声